

社会学伝来考 : 大正の社会学(3)

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	54
号	1
ページ	288-148
発行年	2007-07
URL	http://hdl.handle.net/10114/1040

社会学伝来考

——大正の社会学「3」

第六章 編年史的にみた日本社会学

大正期の社会科学書

大正期の特質——赤化思想の進出とその運動

大正期の社会学界

大正期の社会科学書。

高田保馬訳『社会学綱要 全』（大正2・12）は、イタリアのモデナ大学法科大学教授アレクサンドロ・グロッパリ Prof. Dott. Alessandro Gropali が著した『社会学原理』（*Elementi di Sociologia*, 1905）を反訳したものである。

社会学綱要 全

グロッパリ原著
高田保馬譯

東京 有斐閣書房

グロッパリ原著『社会学綱要 全』。

訳者によると、京都文科大学在学ちゅうに米田庄太郎から、社会学の講読用に習ったというから、原書（イタリア語）を用いての授業であったものとおもわれる。訳稿は明治四十三年（一九一〇）夏にすでにでき上っていたようだが、長く筐底にしまいこんでいたものである。

清新かつ独創の見をもとめる読者にとって、同書はやや期待はずれの観があるかもしれないが、平易に書かれているから、初学者にとっても良好なる一書だという。イタリア社会学の様子を知るうえで格好の書という。

宮 永 孝

本書は、原著者が一九〇〇年から翌年にかけて、自由大学、フェララリヂエオの高校、ミラノの大学拡張講演において、社会学についておこなったさまざまな講演が母体になっているようだ。

内容の概要は——第一章 社会学 第二章 社会と家族との起原 第三章 社会現象の因果及び系列の問題 第四章から第六章までは、経済現象・法律現象・政治現象の起原及び其の社会的進化 第七章 道德現象・宗教現象の生成及び其の社会的進化 第八章 芸術現象・科学現象の起原及び其の社会的進化 第九章 社会現象の法則及びその被豫見性 附録——である。

原著者が説く社会学とは、どのようなものなのか。オーギュスト・コントが“社会学”の名称を創る以前——古代ギリシャ・ローマの時代、すでにプラトン（四二七？～三四七B・C）やアリストテレス（三八四～三二二B・C）は、『共和国』や『政治学』と題する著書のなかで、“社会現象”やその性質、法則を研究したことはよく知られている。

グロッパリは、社会学の定義を二つにわけている。

第一類……社会学は、連合・集団の事実の学である。

第二類……社会学は統計的研究にもとづく社会物理学である。社会学は、法律を有している。社会——正義の自然的形成を研究する学（法理学）である（ロベルト・アルディコの説）。社会学は、社会心理学である。人間結合の原理や法則を決定することである（ガブリエル・タルドの説）。社会学は、社会の構造・機能の学である（オーギュスト・コントの説）。社会学は、社会の形式を社会生活の内容から引きだして考察するにある（ゲオルグ・ジンメルの説）。

グロッパリはのべている。

——心理学と社会とは密接な関係があるが、タルドのいう社会学は、社会心理学である、という言説は、誇大の言だという。しかしながら、社会事変の因果関係や連鎖を理解するには、これを促し、これをうごかしている心理力リキの作用を知っておく必要があるという。

葛西又次郎と伊藤輔利の共訳になる『应用社会学 全』（大正2・12）は、アメリカにおける社会学の大家レスター・エフ・ウォード（一八三一～六二、ブラウン大学社会学教授、社会学を純粹社会学と応用社会学にわけた）の論著（原書名不詳）を反訳したものである。

内容の概要は——第一篇 運動 第一章 純正社会学と応用社会学との関係 第二章 努力の効験 第三章 社会学の終局又は目的 第四章 社会的事功 第五章 世界観 第六章 真理と誤謬 第七章 真理の社会的所有 第二篇 事功 第八章 可能的事功 第九章 機会 第十章

機会の論理 第三篇 改良 第十一章 事功と改良との調和 第十二章 応用社会学の方法 第十三章 応用社会学の問題——である。

ウォードの説く、「純正社会学」と「応用社会学」との根本的区别について語っておこう。前者は、単に社会の現実的狀態にたいする科学的な討究だという。すなわち、社会学上の問題を論じたもので、理論的である。「何を」「なぜ」「どのようにして」といった問題を解釈しようとするものである。いいかえれば、事実とか原因とか原理に関するものである。

後者は、社会学の応用を説いたもので、じっさい的である。「何のために」「何を目的として」といった問題に答えるものである。

加藤弘之（一八三六—一九一六、明治期の啓蒙的官僚学者）の「社会学とは如何なる科学なるか」（大正3・6）は、社会学院の大会における講演筆記である。当時加藤は、大学をしりぞき名誉教授であった。建部逕吾に勧められ、講壇にのぼった。加藤の講演は、三十分ほどのみじかいものであった。かれは劈頭、「私は社会学の事は、殆んど知らないであります。以前は少し本を説んだこともあるけれども、近頃は社会学の本をさう読んだことはないから、一体出る資格は無いのである」とのべた。

ともかく、何か話してほしい、との要望にそって、大会に出席したのである。

加藤の談話速記（六四〇—六四五頁）の骨子は、つぎのようなものであった。

——社会学というものは、ヨーロッパの新しい科学である。オーギュスト・コントによって始めてそれが創出された。それ以前のギリシャ・ローマ時代には、「社会学」といった語はなかったが、多少社会や国家や政治のことを論ずる学問はあった。

コントは、空論のきらいなひとであった。じっさい証拠にもとずいて論じる人であった。コントは、社会学というものは、生物学（バイオロジー）というものにもとずかねばならぬ、と説いた。社会というものは有機体（それじたい生活能力をそなえた組織体）であり、生物でもあるから、社会のことは生物学の道理によって説かねばならぬ、と主張した。

いまメタフィジック（形而上学）といったような、実験や実証にもよらない、哲学が盛んになっている。ドイツのオイケン、フランスのベルグソンのような先生が、さかんに勢力をえてきておる。せっかく実験とか実証というようなことが盛んになりかかってきたのに、社会学もしぜんそういうところから侵されるような気がする。

『大学一覽』をみると、社会学とか心理学は、哲学科の部類に入っている。社会学がそこに入っているということは、わたしにはわからない。大学における社会学の学科についてであるが、社会学がおもで、社会政策・史学・統計学・教育学・人類学・言語学・宗教学などをおしえることは、もとより

けっこんなことである。しかしながら、先刻ちょっと話したように、生物学の大意をおしえることは、きわめて大切であるようにおもう。

社会学が、哲学の部類に属していることはこまる。これは独立して、一つの科学とならねばならぬ。他に同居するのはまちがいである。

このように加藤は、社会学についてくわしいことは知らない、といいながらも、ふだんからそれについて考えている所感をのべ、講話をおえた。栗原基訳『社会政策概論』（大正3・7）は、シカゴ大学教授シー・アール・ヘンデルソンの講演集（原題、刊行年、出版社不詳）を反訳したものである。著者がインドで刊行した書物を中心に、大正二年（一九一三）春、——同人が日本をおとずれたとき——、同志社・青年会館・京都帝国大学などでおこなった講演などを加えて、翻訳し、一書としたものである。

著者は、社会改良家である。人道、正義の勇者である。一九一二年（大正元年）九月、スイスのチューリッヒで「一週間の社会集会」がひらかれたとき、かれは「万国労働者法律保護協会」「万国失業者保護協会」「万国社会保険協会」など、三協会の目的をインド・中国・日本で開陳するよう委嘱をうけ、人道と社会主義のために、極東へと発った。

内容の概略は——訳者のはしがき 序文 万国社会制度協会の目的 講演の要綱 第一章 社会政策の基礎としての経済状態及び社会理想 第二章 貧民及び不具者に対する公私の救済事業 第三章 反社会者に対する政策 第四章 公衆健康、教育及び道徳 第五章 労働者の経済状態及び精神状態の改善 第六章 社会の進歩——である。

健全なる法を犯すもの、大道を犯すものは、すべて「反社会者」（犯罪人）である。しかし、犯罪者といえども人間である。かれは市民たる権利を有している。キリスト教は、汝の敵を愛せ、とおしえている。この語の意味は、あわれみと希望とをもって敵を愛せよ、ということらしい。個人にたいして、あるいは人間の集団にたいして、あるいは社会そのものにたいして害をあたえる者は、法に照らしてとうぜん制裁をうけねばならない。著者によると、西洋における犯罪処分の社会的目的は、民衆が、犯罪者の苦痛をみて恐怖をおぼえ、みずからも改心する（悪いことを改める）ことにある、という（一五五頁）。

山崎直三訳『社会学原理と応用』（大正4・5）は、アメリカのブラウン大学教授ジェームス・キール・ディレーの著述（原書名、出版社、刊行年不詳）を反訳したものである。訳者によると、本書は社会学の原理と応用について、きわめて平易簡明に説いたものという。「余は社会学研究を初めんとする人々に対して、最も適当なる入門として此書^{このしよ}を薦めんと欲す^{すす}」（「序言」）とのべている。

内容の概略は——第一篇 社会学原理 第一章 科学としての社会学 第二章 古代に於ける社会の発達 第三章 文化と文明 第四章 社会心理学 第五章 社会上の諸制度の発達 第六、七、八章は、同上のつづき。

第二篇 応用社会学 第九章 社会の進歩 第十章 社会進歩の人權的要素 第十一章 社会進歩の経済的要素 第十二章 精神的文明と物質的文明の關係 第十三章 社会進歩の一要素としての教育 第十四章 社会心理学の社会進歩に対する応用 第十五章 社会幣寶（欠陥）の芟除（とりのぞく） 第十六、十七章は、同上のつづき 第十八章 個人の進歩 第十九章 社会の理想——である。

著者によると、社会学の研究がますます重要になりつつある理由は何かといえ、この新科学が個人や社会の幸福を増進させるにあたって、有益な指針となつてほしい、といった願望があるからだという。コントは、社会学なる新科学を提唱し、人類進歩の法則と原理をきわめ、社会改良の羅針盤とすることを力説したことはよく知られている。

著者いわく。

——社会学の人類にたいする効用という点からいえば、社会学がもっとも有用の知識であることは、他の科学のおよばないところである、という。しかし、われわれは社会学の知識を得るがためには——精神界の現象の説明については、心理学の系統に属する諸科学の研究が必要であり、また生命に関しては、生物学上の学理に矛盾しないことを要するという。

早稲田
文学社 文学普及会講話叢書第十五編に、樋口龍峽（一八七五—一九二九、明治から昭和期にかけての評論家）の「近代社会学講話」と中村星湖（一八八四—一九七四、明治・大正期の小説家）の「欧州近代小説史講話」が収められている。

前者の「近代社会学講話」（全一七〇頁）は、『講話』といった文字があるように、社会学について講義形式で、わかりやすく説いたものである。著者は、本書の冒頭において、「私は茲に社会学の主要を皆様に講義することになりましたが、社会学という学問は頗る広汎な学問であつて、而かも深淵なる学問でありますから、之を一朝一夕に且つ限られたる紙面に於て、完全に詳細に漏るゝ所なく総てを尽くして講義することは出来ません」と語っている。

そのため著者は、いたずらにむずかしい文字をならべたり、徹底せざる文章をかいて、鬼面人をおどろかすようなことをしなかつたとのべている。

内容の概略は——第一章 総論 第二章 社会の概念 第三章 社会の基礎 第四章 社会の構成 第五章 家族 第六章 国家 第七章 社

会意識 第八章 社会の単純なる進化 第九章 社会の複雑なる進化 第十章 社会の理法——である。

「第一章 総論」のなかで、著者は社会学の研究法についてふれている。著者によると、社会学の研究法には、帰納・演繹の二つの方法があるという。帰納的研究法には、比較研究、歴史的研究、統計的研究などがあるといい、演繹的研究法には、物質的研究、心理的研究、総合的研究があるという。

社会学を研究しようという者は、ぜひとも人類学や統計学、生物学、心理学に通じる必要がある、という。また基礎というほどのことはないが、歴史学・哲学・文明史についても、一通り知っておく必要がある、という。

『社会学』の語を創ったコントは、社会学を『静学』（人間社会の秩序の理論）と『動学』（人間社会の自然的進歩の理論）とにわけて論述した。コントのあとにイギリスのハーバート・スペンサーがつづいたが、その社会学や哲学は、総合哲学の体系の一つであり、宇宙的、物理的理法をもって社会現象を説明しようとした。

スペンサーの社会についての中心思想は、社会がひとつの有機体であるというにある。コントやスペンサーのあと、社会学の研究は、各国において鬱然^{うつぜん}として興るのであるが、著者は各国の代表的な学者名をあげている。いま著者の説明に多少補足して記すと、つぎのようになる。

フランス……………コントを生んだ国だけあって、社会学の名士は数多く輩出した。タルド（一八四三～一九〇四、社会心理学の基礎をつくった）、フィエ（一八三八～一九二二、契約有機体をと考えた）、ル・ボン（一八四一～一九三一、『群集』の概念を提出）、デュルケーム（一八五八～一九一七、社会的事実を個人の心理や意識を超越した存在としてとらえるべきといった）、ヴォルムス（一八六九～一九二六、社会有機体の立場をとった）など。

オーストリア……………この国には、シュフレ（一八三一～一九〇三、スペンサーの社会有機体説をとった）、ラッツェンホーフアー（一八四二～一九〇四、国際社会の形成を集団闘争にもとづく進化的理論によって解明しようとした）、グンプロヴィチ（一八三八～一九〇九、集団の意志が個人を規定すると説いた）などが出た。

ドイツ……………シュタン（一八一五～九〇、ヘーゲルの国家論やフランスの社会主義運動、社会政策などを研究した）、ジンメル（一八五八～一九一八、形式社会学の提唱者として知られた）、テニエス（一八五五～一九三六、社会を共同社会と利益社会とにわけた）などのほかに、国家学・経済学・人類学・文明史の方面から社会学の研究に従事する者が多くでた。

イタリア……………この国の学風は片寄ってはいるが、ロンブローゾ（一八三六～一九〇九、犯罪学に実証主義的方法を導入した）をもって、その白眉とするという。

イギリス……………スペンサーの亡きあと、マッケンジー（一八六〇～一九三五、経験の総合的把握を主張）、ド・モルガン（一八〇六～七二、論理学の代数化をこころみた）、マクレナン（一八二七～八一、婚姻制度を歴史的に研究した）などがある。

アメリカ……………近代社会学の大家が多いのは、なんといってもこの国である。スモール（一八五四～一九二六、『アメリカ社会学雑誌』の創始者）を先輩として、ウォード（一八四一～一九一三、社会学を純粹社会学と応用社会学に区分した）、ギッディングズ（一八三五～一九三一、同類意識を社会の基本的事実とした）、ボールドウィン（一八六一～一九三四、W・ヴィントの影響をうけた）、ロス（一八六六～一九五一、スタンフォード、ウィスコンシン大学でアメリカ社会学を講じた）などの大家がいる。その他、モーガン（一八一八～八一、アメリカの民族学者）、ウィンセント（一八六四～一九四一、『社会研究入門』をあらわす）、クレー（一八六四～一九二九、ミシガン大学社会学教授）、パーソンズ（一九〇二～？、ハーヴァード大学教授）、マックス・ウェーバー（^{（ヴェー）}の社会学をアメリカに導入した）などがある。

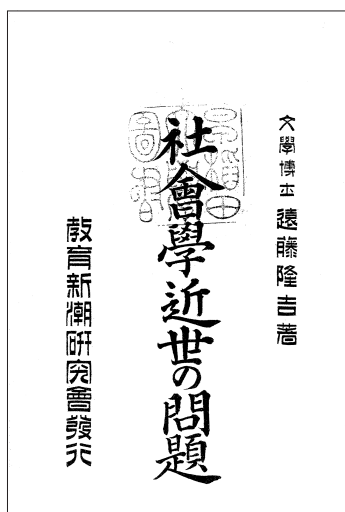
ロシアでは、ノヴィコフ（一七四四～一八一八、啓蒙思想家、ジャーナリスト）が有名であり、ベルギーではド・グレーフ（一八四二～一九二四、社会を有機体とし、一般哲学を社会学と考えた）などが、名を知られているという。

また肝心の日本の社会学者としては、著者は外山正一の名を第一にかかげ、ついで倫理方面より斯学に入った加藤弘之、法学のほうより社会学

に入った穂積陳重、^{（ほづみ）}その他有賀長雄、浮田和民、建部遯吾、遠藤隆吉の名をあげている。

遠藤隆吉の『社会学近世の問題』（大正4・9）は、約言すれば、社会学的にみたる日本についてのべたものである。本書は、社会学の根本原理についてのべるのが目的ではなかった。コントは、社会全体を物理学的に研究する意図で“社会学”という新科学をつくった。かれがめざしたことは、社会についての正確なる知識をうるにあった。

遠藤の社会学研究の立脚地となったものは、“社会力”（社会のなかでのみ行なわれる力、われわれを支配するところの力）であった。かれはそれをよりどころとして、日本



遠藤隆吉著『社会学近世の問題』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕



遠藤隆吉著『社会力』。
〔日本大学文理学部図書館蔵〕

の実際問題について論じようとした。

内容の概略は——一 社会学上の立脚点 二 日本の人民的階級 三 日本の交通的条件 四 日本の学問的制度 五 日本の思想的社會力 六 日本の心理学 七 日本の外界 八 日本の病理学 九 日本に於ける重なる社會力 十 将来に亡びんとする社會力、十一 結語——である。

著者は「四 日本の学問的制度」のなかで、西洋学と東洋学についてふれている。著者によると、「西洋学」とは、西洋人によって發明され、西洋人によって組織されたものをいう。東洋学とは、東洋の文字でないとわからない、漢学や国学（国学）などという。西洋学の流行は、横文字（外国語）の流行によってこれを知ることができるという。いまの日本の学問は、西洋学に依りつつあるといい、外国語をまなばないことには、ちがいがあかないのである。そのため、なるべく子どものときから、外国語をまなぶよう勧めている。外国語を知らない、と、外国の学問を知ることができないからである。

われわれが外国語をまなんだり、研究したりする目的とはなにか。著者の答えは——商工業または旅行や学問の助けとするためである。また著者は、大学における学問についても言及しているが、いろいろな学問が帝国大学で研究されているが、なんらじっさい上の目的をもっていないという。日本にとって必要なことは、学問の応用なのである（一三五頁）。

おなじ著者による『社会力』（大正5・3）は、社会学の中心問題である「社会力」の性質やその他の問題について明らかにしようとしたものである。

内容の概略は——総論 第一章 社会学の意味 第二章 社会力の説 第三章 社会学系統論 本論 第一章 社会力の充実 第二章 社会力の効果 第三章 社会力の成立 第四章 社会力の組織 第五章 社会力の静動学的觀察 第六章 社会力の要素 第七章 社会機能論 第八章 社会と個人 第九章 社会学研究法 第十章 雑論——である。

遠藤がいう「社会力」については、先にすこしふれたが、もうすこしそれについて語ってみよう。「社会力」とは遠藤の新造語である。それはどのようなものかといえ、われわれが余儀なく（させられる）と感じるばあいがそれだという。

われわれは習慣にしたがうことがあるけれど、それは暗示の力によるためである。われれは、暗示の力によって、“社会力”の存在を知るとい

う。遠藤によると、社会学は“社会力”を中心に研究すべきものであるから、社会学は個人の行動を論ずる学となるしかなく、人間の行動をその分量と性質上より研究するものという（二五頁）。

藤森達三訳『ウォードの社会学』（大正五・六）は、アメリカの著名な社会学者レスター・フランク・ウォードが著わした「テキストブック・オブ・ソシオロジー」が原著という。同書はどうも初学者用の社会学の書であるようだが、訳者はそれを「ウォードの社会学」に改めた。

内容の概略は——緒論 第一章 社会学の学問 第二章 科学の分類 第三章 社会学の論材（既知件） 第四章 法式論（研究法） 第五章

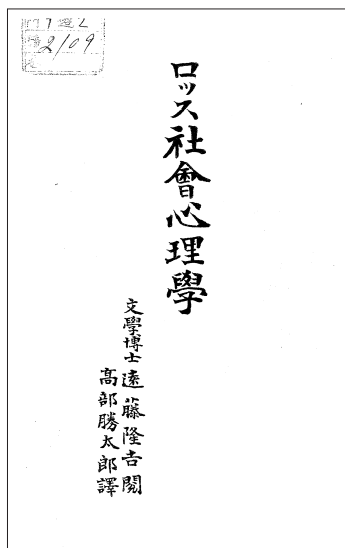
社会学の論件（題目） 本論 第一編 社会力の起原及其分類 第二編 社会力の本質 第三編 社会の自発的發展に於ける社会力の動静 第四編 期成的働原の起原及本質 第五編 社会的功績に於ける期成的働原の動作——などである。

原著者によると、人間社会は種属的に動物社会とは異なるという。動物社会は、自然的かつ本能的であるに反して、人間社会は、不自然にして合理的であるという。社会学はその人間社会を研究するものである。

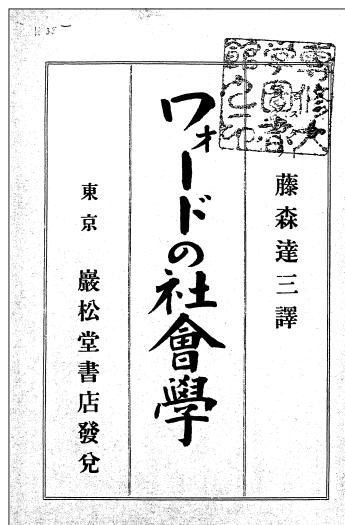
社会学を純正と応用の二部門にわけるのは、当然のことという。純正社会学は、原理や原則を樹てんとするものであり、応用社会学は現実的もしくはじっさい的である。

高部勝太郎訳『ロッス社会心理学』（大正六・五）は、ウィスコンシン大学教授エドワード・アルズワース・ロッスの名著『社会心理学』（*Social Psychology*, 1908）を反訳したものである。ロッスは本書を著わすにさいして、数多の書をよみ、引証し、概括をこころみたが、いちばん参考にしたのはガブリエル・タルド（仏）の書であったという。

“社会心理学”とは何か。原著者によると、それは人間の共同生活のあいだに生ず



高部勝太郎訳『ロッス社会心理学』。



藤森達三訳『ウォードの社会学』。
〔専修大学附属図書館蔵〕

文學博士 坪井九馬三 序
文學博士 建部 遜吾 序
東京帝國大學 小原忠三郎 著
社會學專攻



農村社會學



東京 洛陽堂 版

小原忠三郎著『農村社會學』。

〔法政大學附屬圖書館藏〕

る心的平面とその流転とを研究するものという。社会的原因にもとづく感情や信仰、意志と動作との一致点のすべてを理解し、説明しようとするものである。

社會學は、社会の各群およびその組織を研究するに反して、社会心理学は社会の平面と流れとを考へるものという。

内容の概略は——第一章 社会心理学の性質及範圍 第二章 暗示性 第三章 群衆 第四章 群衆心 第五章 群衆心の予防剂 以下、第二十三章までであるが、省略する——である。

尾戸長熊の『社会学入門』（大正6・5）は、あたかも著書のような印象をあたえるが、じっさいはジョン・ヘンリー・ウィルブランド・スタッケンベルク（一八三五—一九〇三、ドイツ・ハノーバー生まれのルーテル教会の牧師）が著わした“*The Introduction to the Study of Sociology*,” 1898”を解説したものである。

本書の「緒言」にいう。「世の腐敗を唱ふるや既に久し。必ずその反面に覚醒の大白（きわめて潔白なこと——引用者）なるものあらん。今社會学入門を発行す。社会の歡迎果して如何」。

内容の概略は——第一章 社会学の定義及び目的 第二章 社会学と他の科学との關係 第三章 社会学の分類 第四章 社会其者の原理 以下、第十一章までであるが、省略する——である。

著者（すなわち解説者）は、「第十章 現代の社会学的研究」において、こんなことをのべている。

現代の社会を研究するに方（た）てて斯（か）く全体の研究をなすと同時に、又一方に於ては 特別なる研究をなすことを得。即ち各種の政体を論じ、倫理 教育 宗教 政治教育 文学 哲学 美学等の団体を研究することも亦（また）可能の事に属す。

時代精神の研究は 即ち社会心理学なり。スタッケンベルグ氏の説（せつ）よりするに 社会学は即ち社会心理学なり（六六頁）。

小原忠三郎の『農村社會學』（大正6・6）は、著者の苦心の一作である。著者は関東の一寒村に生まれ、上京後、遊学にしごとに、兵役に

心身をうばわれたが、高等学校入学を果たし、つづいて東京帝国大学社会学科にまなんだ。いわゆる苦学力行の典型であった。

近年、修学の余暇に郷里にかえり、父母を省み、農村生活の惨況を感得するにおよんで、農村社会学を企図したようである。社会学科を出るにあたって、卒業論文として書いたものが『農村社会学』（全五三〇頁）であった。もとより未成品であったが、いろいろ手を加えて本書としたものという。

ところで『農村社会学』とは、何んのことか。著者は本書の「自序」のなかで、いくつかの定義をにかけている。そのうちの一つを紹介すれば、こうである。「さらに適切な体制をえんがために、村落生活の社会力および社会的要因を究明するものなり」（マサチュセツツ高等農業学校ヘラ ン教授談）。

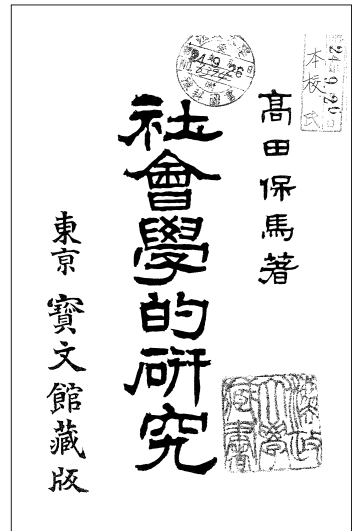
内容の概略は——第一編 緒論 第一章 農村の意義 第二章 農村の地位 第三章 大中小農の定義 第四章 農村問題の意義並びに其研究法 第二編 農村社会史観 第三編 農民の富力及中小農保護政策 第四編 農村の教化 第五編 農村の自治 第六編 農村問題と社会運営論 結論——である。

「村落」は「むら」の意である。が、この語を言語学的に詮索してみると、いろいろおもしろいことがわかる。著者は研究者の言を引用してのべているが、日本語の「村」は、朝鮮語の「牟羅」から出たものようだ。

西洋語には、「村」や「村落」を意味するものに、つぎのようなものがある。

英語……………*thorpe* (小村、集落)、*hamlet* (小村)、*village* (村、*hamlet*より大きい)
ドイツ語……………*Dorf* (村、村落)
フランス語……………*hameau* (小さい部落)、*bourg* (大きい村)
イタリア語……………*crofare* (小部落)
ロシア語……………*Dieremna* (村)

著者によると、「村落」は、じつに自然社会に人為の情態を附加して成れる、人為社会発生の第一段に位し、その第二段階は、市府に達する階



高田保馬著『社会学的研究』。
〔法政大学附属図書館蔵〕

梯（階段）にあるものをいう。

ともあれ、この大著は、西洋の諸大家が著わした、その国を基準として樹てた政策論を後生大事にして執筆したものではなく、あくまで日本の農村に材をとり、国内の農業の形勢を大観したものである。

志水義暉訳『社会進化論 全』（大正7・7）は、エール大学社会学教授アルバー・ト・ガロウエー・ケラー（一八七四～一九五六）の『社会進化論』(Social Evolution, 1915) を反訳したものである。

著者のケラーは、一八七四年四月オハイオ州スプリングフィールドに生まれ、一八九六年二十二歳をもってエール大学を卒業した。在学ちゅうより、すでに著名な社会学者サムナーに師事していた。そのまま大学にとどまり、大学院において社会学を専攻し、古代ギリシャの詩人ホメーロスの叙事詩にみられる古代社会を、社会学の見地からみた博士論文をかいて学位をえた。サムナーが退職してからは、その後継者となり、後進の育成につくした。

“進化” というものは、自然現象においては外的であるという。すなわち、物質的である。しかし、人類社会においては、進化は内的（すなわち、精神的）である。動植物は、外囲のものに順応せんがために形態をかえてゆくが、人類はかたちを変えてゆくばかりか、進んで精神的に変化し、環境に順応してゆくという。

内容の概略は——序論 第一章 人的形態の進化 第二章 変種 第三章 淘汰（自動的） 第四章 合理的淘汰 第五章 合理的淘汰（続）
第六章 反対淘汰 第七章 移伝^{マタ} 第八章 順応 第九章 順応（承前） 附記——である。

高田保馬の『社会学的研究』（大正7・10）は、著者が明治四十三年（一九一〇）以降、約八カ年のあいだに書いた論考のなかから、十二篇えらんで一書としたものという。

本書の篇別は、著者がその影響をうけることがきわめて多かったギィディングズの社会学の篇別にしたがったという。

内容の概略は——第一章 社会学方法論の問題 第二篇 社会人口及び社会心意の問題 第三篇 社会組織及び社会幸福の問題——である。
著者によると、科学の世界は、法則の支配する普通概念の世界であるという。法則は科学の中核である。概念は、ただこの法則が成立しうる所

以の道具である。

社会学の対象とはなにか。著者によると、社会学の対象とは、精神現象の一部としてみられる“社会現象”である。社会学の中核をかたちづけている法則は、永久なる反覆——無限なる循環であるという。

建部遯吾の『普通社会学』（大正7・12）は、著者の四部作の最終巻である。著者は、本書の趣意について、つぎのようにのべている。「社会の変遷進動（しんどう）を効果し、社会の運命を決定するの処（しよ）に矚目（しよく）するに存す。乃（すな）ち此兩篇（社会進化論と社会理想論のこと——引用者）の叙述の後、更に文明論の一篇を加へて、以て社会動学の総束と為し、以て普通社会学の結末と為さむとす」と。

建部の文章は、いったいにむずかしく、わかりにくいのが特徴でもある。こんにちから観ると、その文章は、よむに耐えないものである。

内容の概略は——第一篇 社会進化論 第一章 社会進化の要義 第二章 社会進化の方式 第三章 社会進化の実質 第二篇 社会理想論 第一章 理想汎論 第二章 個人的理想 第三章 社会的理想 第三篇 文明論 第一章 文明汎論 第二章 社会進化の史観 第三章 文明の概評——である。

著者によると、社会を科学的に説きあかすさいに必要なものは、動学的・静学的研究であるという。動学的研究とは、運命を説きあかすことであり、静学的研究とは、現象の研究にすぎず、そこからえられる知識は、単に客観世界の写象としての意義をもつだけだという。

高田保馬の『社会学原理』（大正8・2）は、大正五年（一九一六）春三月ごろから執筆に着手し、同七年四月に書きおえたものだが、大正期に刊行された社会学書のなかでも、もっとも大部な専門書である。

同書は、一三八五頁もある述作であり、その厚さといったら“箱枕”ほどもある。「凡例」によると、この本はだいたい私見を開陳したものであるという。“註”は、学説の引用、叙述、批評をもってあてたものである。内容の概略は——第一篇 社会学 第二篇 社会成立論 第三篇 社会形態論 第四篇 社会結果論 結論——である。

著者によれば、“社会学”は有情者の結合を対象とする科学であるという。社会学は社会のすべてを研究対象とするのであるが、人類社会より哺乳類（こんちゅう）の社会、魚や昆虫の集団、単細胞動物の集合にいたるまで、心理的結合の存在が推断（たて）しうるかぎり、社会学の研究対象になるという。

社会学は、社会の学——すなわち、社会現象の学である。社会学は経済的、宗教的、道德的、芸術的現象など、いっさいの現象を包括的に研究すべきものという。

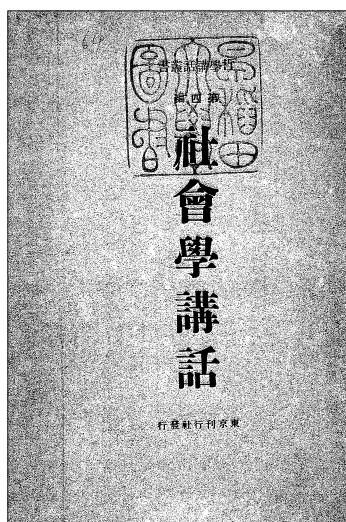
防貧策全

シドニー・ウェッブ夫妻著。
『防貧策 全』

平瀬龍吉訳『防貧策 全』（大正8・5）は、イギリス人シドニー・ウェッブ夫妻の書『防貧』（*Prevention of Destitution*, Longmans, Green, 1911）を反訳したものである。ウェッブは一八五九年七月ロンドンに生まれ、のち租税調査官、名誉牧師、議員をへて、ロンドン市政のために尽力した人である。共著者である夫人も、夫の名声とともに世に喧伝せられているという（「例言」）。

本書は、おもにイギリスの貧窮問題について叙したものである。が、著者夫妻が二年前に来日したおり、日本各地の工業地帯において目撃したものは、日本もイギリスもおなじように、“貧困”という社会的疾病にかかっていることであった。人口稠密なる国民は、概してその社会および社会生活において軌を一にしており、おなじ社会的疾患にかかっている。

“貧窮”は、社会の病なのである。著者のいう貧窮とは、ただ単に貧しいということではなく、赤貧洗うがごとき状態を指していた。渴して飲まず、飢えて食わず、凍えて衣なく、住むに家なきひとびとの窮状である。貧すれば鈍する、といったことばがあるが、ひとは衣食住や日々の必要な物品にこと欠くと、精神のほうも荒廃し、ひととして



柴田安正著『社会学講話』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

の途を踏むことは、とうていできなくなるのである。

イギリスの都市に住む数百万の貧困者は、せまい、不潔なる一室に群居雑住し、食物や医療に窮していた。近年、イギリスにおいて、“救貧法”のやっかいになった者は二百万人という。

さて肝心なのは、“救貧”ではなくて“防貧”につくすことであり、貧しさの原因をしらべ、その根治のみちを講じることである。もちろん、各国はそれぞれの貧困防止策を用いるべきであり、他国の真似をするべきではないが、お互いまなぶべき長所がすくなくある、というのが著者の意見である。

柴田安正の『社会学講話』（大正8・11）は、社会学をはじめて学ぼうとするひとびとのために書かれた入門書である。わたしが見た本書は、

水谷八重子（一九〇五―一九七九、大正から昭和期にかけての新派女優）の寄贈本である。昭和十年（一九三五）十二月に、早稲田大学図書館に寄贈したものである。

著者によると、日本の社会学界の進歩は、もとより欧米のそれに及ぶべきもないが、社会学についての著述はかならずしも少なくない、という。しかしながら、ひとつ問題がある。それは何かというと、どの著書も高尚で遠大であり、あるいは浩漭こうかんにすぎ、あるいは難解に陥っていることである。初学者は斯学しがくに指を染めようにも、わかりにくいものであれば敬遠してしまう。

著者がこの書を公にした所以は、だれにでもわかる社会学入門書であった。そのためやさしく書き、文辞もつとめてやさしい語を用いたという。今後の世界の大問題は、社会問題の解決だということ。とくに社会改造の大問題を解決するためには、まず“社会”そのものをよく知っておく必要がある。

内容の概略は——第一章 社会学 第二章 社会 第三章 社会の物的心的要素 第四章 社会の構成 第五章 社会の体制 第六章 社会の進化 第七章 社会の理法——である。

社会的動物である人間の住むところは、いわゆる“社会”であるが、その社会についての研究は、古くからあった。しかし、それは一部の社会的現象を研究するにすぎなかった。やがて社会的諸科学が進歩するにつれて、社会の本質や社会を支配する何らかの理法（法則）を知る必要が生じた、という。

近世において自然科学は、ひじょうな進歩をとげたのであるが、そのうちでも社会学にたいして貢献したものは、生物進化論であった。社会学の成立には、この進化論の影響を無視できないのである。

著者によると、社会学とは、統一体としての社会の科学的研究だという。そして社会を支配する理法をあきらかにするのが社会学だといっている。ちょうどすべての科学に共通する研究法があるように、社会学にも“二つの研究法”があるという。それは演繹方法（組み立てた理論によって、特殊な課題を説明する）と帰納的方法（具体的な事柄から、一般的な命題や法則をみちびき出す）である。

この二つの研究法をわかりやすく、つぎに記してみよう。

生物学的または物質的研究——自然が生物（個人）にあたえる影響は、個人を通じて、社会にも影響を及ぼす。生物としての人間は物理的法則に支配されている。生物一般についての理法は、つねに社会を支配している。が、それを用いるやり方。

演繹的方法

心理的研究

社会現象の大部分は、心理的關係である。心理学の原理・原則によって社会を説明しようとするやり方。

総合的研究

社会は群集心理の理法によって支配され、個人におけるのと異なる現象を呈することが多い。生物学的、心理学的研究によってえた原理原則を綜合しておこなうやり方。

比較研究

動物の社会、野蠻人の社会、古代人の社会、種々の民族・動物の社会の諸現象を、比較研究するやり方。

帰納的方法

歴史的研究

家族の研究についていえば、原始的家族より、いまの文明国の家族にいたるまでの変遷を研究するやり方。

統計的研究

社会現象の、おおよそその趨勢を暗示する統計を用いるやり方。

これらの六つの研究法は、“社会研究”にとって、もっとも必要なものであるが、じっさい適用するとき、どの方法によるかは研究者による。

高田保馬の『現代社会の諸研究』（大正9・2）は、現代社会のむかいつつある諸傾向を考察したものであり、本書に収めた諸編は、おおむねこの目的のために執筆したものという。

著者は大著『社会学原理』（大正8・2）を攷筆してから、何か月か郷里に病臥したという。病を養ったのち京都にもどると、ふたたび研究生活を開いた。が、『社会学原理』の執筆ちゅうも、その後もかれの念頭をはなれなかった問題は——社会進化の窮極（はて）、現代社会の進路、社会変動の趨勢などであった。

内容の概略は——第一編 将来社会観の種々 一 ジンメルとスペンサアとの将来社会観 二 集産主義の社会学的考察 三 ギルドソシアリズムの社会学的考察 四 遊戯としての社会生活 第二編 富及び企業およの集中 五 所得のパレート線に就いて 六 収益の丘を論ず 第三編 戦争及び人種問題 七 戦争と文化 八 人種問題私見 第四編 日本の人口問題 九 日本に於ける出生率増加の原因 十 最近の出生率減少に就いて——である。

本書ちゅうの第一編のはじめの三篇は、各章すこし問題の中心を異にしているが、その間に連絡があるものという。「四 遊戯としての社会生活」は、私有財産のみが社会の進歩の原動力である、といった卑俗な論についての反論である。

第二編の諸篇は、現代日本における集中の事実を統計材料にもとづいて論じたものである。第三編の諸篇は、目のまえに展開している事実に刺激されて立論したという。

米田庄太郎の『ばんきん輓近社会思想の研究 卷上』(大正9・4)は、最近の社会主義の發達に大きな影響を及ぼしたマールブルヒ派の社会哲学や新カント派の哲学者がいかにして社会主義化してきたか、またマールブルヒ派の思想家が、いかにしてカント化してきたかについて論じたものである(本書第一篇)。

ついでフランスやイタリアの社会主義の理想主義化が、最近の法理学の影響をうけて、いかに社会主義を温和化したかを究明した(第二篇)。さいごに革命的サンヂカリズム(組合主義)の理想主義化の影響が、どのようにして過激な社会主義を産んだかを明らかにしようとした(第三篇)。内容の概略は——第一篇 新カント哲学と輓近の社会主義 第一章 マールブルヒ派の社会哲学 第二章 カントと輓近の社会主義 第二篇 輓近の法理学と法的社会主義 第二章 法的社会主義と輓近の法理学——である。

納武津訳『社会哲学原論』(大正9・6)は、イギリスの思想界の一権威アイ・エス・マッケンゼーが公刊した『社会哲学要綱』(I.S.Mackenzie: *Outlines of Social Philosophy*, 1918)を反訳したものである。社会哲学は、社会学の特種部門に属する学問である。原著は、プラトンの「理想国」の精神を現在のイギリスの社会状態にあてはめて推論したものという(「例言」)。

内容の概略は——第一編 社会的秩序の基礎 第一章 人間性 第二章 共同生活体コムミューニチイ 第三章 結合生活体アッショシエーションの諸様式 第二編 国家的秩序 第一章 家族 第二章 教育的制度 第三章 産業制度 第四章 国家 第五章 正義 第六章 社会的理想 第三編 世界的秩序 第一章 国際

関係 第二章 宗教の地位 第三章 教化の地位 結論 一般的结果——である。

著者は、宇宙における人間の地位について、つぎのようにのべている。人間とは、この世界(地球の意か)の一産物、土地から湧きでたものにすぎない、と。ゆらい人間の定義について、いろいろ試みられたが、著者によると、どれも満足なものはないという。ある者は、人間とは“合理的動物”といい、またある者は、“動物の皮をかぶった心霊”とか“器具をつかう動物”と定義した。著者の定義によると、人間とは、特種な肉体的特質ならびに性向をもった“特有体の動物”なのである。

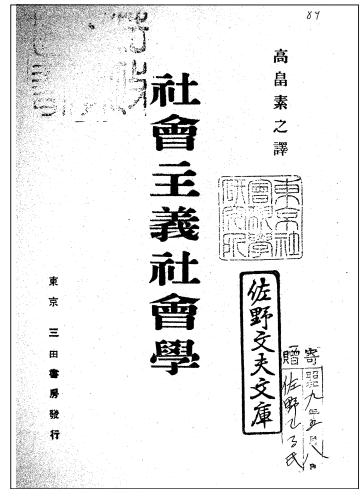
輓近社会思想の研究

卷上

京都帝國大學
文学部経済学部講師 米田庄太郎著

京都 弘文堂書房

米田庄太郎著
『輓近社会思想の研究 上巻』。



アーサー・リュウス著
『社會主義社會學』

高畠素之訳『社會主義社會學』（大正9・6）は、アメリカの社會主義者アーサー・リュウス（Arthur Lewis）著『社會學への「の手引」』（Arthur Lewis: An Introduction to Sociology, C. H. Kerr, 1919）を反訳したものという。

本書は、その題名のしめすとおりのも——すなわち、社會學入門書である。大学で社會學をまなんだことのない者、またなんらかの科學について格別の訓練をうけたことのないひとびとのために書かれたものである。

本書を要約すれば——社會學の起源と發達の歴史、社會學のいまの位置について一般的

觀念をあたえようとしたもののようだ。

内容の概略は——第一章 コムトの人類發達説 第二章 コムトの科學分類法 第三章 スペンサアの靜的社會學 第四章 スペンサアの類推社會學 第五章 ラッエンホーフエルの社會學 第六章 社會學史上に於けるマルクスの位置 第七章 社會學と社會諸科學 第八章 社會學と科學的研究方法 第九章 社會力 第十章 社會進歩の諸因子 第十一章 社會過程の筋書 第十二章 間接行動と直接行動 第十三章 社會學の目的 第十四章 社會學と自由意志説 第十五章 社會學と偉人説——である。

寒河江三郎の『最近社會學の進歩』（大正9・9）は、各専門の諸大家に執筆を依頼し、だれにでもわかる社會學を念頭において編輯したものである。

世の当路者ばかりか一般人も“社會學”とはどのようなものか、よく理解していないという。すくなくとも社會に立ちて、生きてゆこうとする者は、社會學とはどのようなものか、究めておく必要がある。が、人口にかいしゃされるこの語について、真にわかっている者となると、寒心にたえないという。

本書は、啓蒙の意図をもって編まれたものである。文部事務官や大學關係者十八名が、それぞれのテーマで執筆しているが、早大教授・遠藤隆吉の「社會學の応用」といった論文についてふれておこう。

著者いわく。ちかごろ“社會學”といった名称がしきりに使用されているという。十数年まえまでは、“社會學”といえは“社會主義”と混同し、当局も社會學者を追跡して、危險人物とみなすようなこともあったという。

社会学は、広汎なる学問であり、社会問題（失業救済、救済事業、免囚保護など）全般にわたらなくてはならぬという。ともかく、社会学が社会全体に関係があるという点は、何人もみとめるところであり、「社会学」は、社会そのものの論究でなくてはならぬという。

応用といった点からみたら、社会学は社会のすべての現象の研究のみに偏せず、経済・政治・哲学・宗教をも取りあつかうのも研究上の一法という。

市村光恵と森口繁治の共訳『民約論 全』（大正9・10）は、フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーが著わした同一タイトルの原書を反訳したものである。「序」によると、日本にはルソーの翻訳があるが、一言にしていえば、どれも駄作であるという。ルソーの著述を理解して訳したのは、故中江兆民であるが、兆民の反訳は、わずかに第一篇だけであり、他の三篇におよんでいないのである。翻訳にさいして訳者は、ベルリンのA.Asher & Co.の発行にかかわる「J. J. Rousseau : Du Contrat Social ou Principes du droit politique, 1860」を底本とし、その他英訳と独訳をもちいたという。

訳者はのべている。翻訳をするには、二つの条件が必要である、と。その一つは、原文がよく理解できること。すなわち、語学力があるということ。その二は、原書のことがらを理解するだけの知識があること。語学力はあっても、原書の内容がわからないと、ただ文字を訳すだけであり、徹底した翻訳はできないという。

まことに耳が痛い話である。日本語の翻訳がだめなのはこれである。ところどころ原文に合っているだけで、大部分はまちがった訳である。わが国には、ルソーの『民約論』を危険な書物としてみるひとびとが、少なくないという。本書をいちばん先に熟読玩味せねばならぬのは、頑迷

固陋のひとびとなのである。

生来ひとは自由である、と、ルソーは説いている。しかし、ひとはいたるところで鎖にしばられている。ルソーは、国家存在の理由を「民約」（人間社会が契約によって成立する）に求めた。しかし、かれの国家観は、ギリシャ時代の国家至上主義にあり、個人はもっとも国を愛する公民となる必要がある、という。

米田庄太郎の『現代社会問題の社会学的考察』（大正10・3）は、新聞や雑誌などに発表した論文をあつめて一書としたものである。内容の概略は——第一章 現代社会の

文學博士 米田庄太郎著

現代社会問題の社会学的考察

京都 弘文堂書房

米田庄太郎著
『現代社会問題の社会学的考察』。



納武津著『最新社会学講話』。

階級 分析 第二章 現代階級闘争思想の発達 第三章 現代社会問題の社会学的意義 第四章 現代社会運動 第五章 現代哲学と資本主義精神 第六章 近代労働者階級の哲学思潮 第七章 精神的創造或は発明の原理 第八章 労働者教育運動の晩近の発達 第九章 消費組合の社会的意義 第十章 現代温情主義 第十一章 協調主義労働組合＝仏国黄色組合の発達——である。

本書の第八章第三節は、労働者教育の機関として注目すべき“セツトルメント事業”に関するものである。これはブルジョア（有産）階級の進歩的分子が中心となつてつくつた、労働者のための教育機関のことである。セツトルメントは、英米において発達し、ヨーロッパ諸国にひろまったものであるが、一種の人道的事業である。

その教育の精神は、労働者のこころに、友愛の念を発達させるにある。いいかえると、余暇によるこびやたのしみをもつようにさせ、人生を豊かにすることである。要するに、セツトルメント事業は、労働者の精神的発達に貢献することにある。

笠田長継の『社会進歩の意義』（大正10・8）は、慶文堂の通俗社会学叢書の第二巻目にあたる。著者がいう“社会進歩”とは何のことか。著者は、その意味をあきらかにするためにスペンサーの言説をひいている。

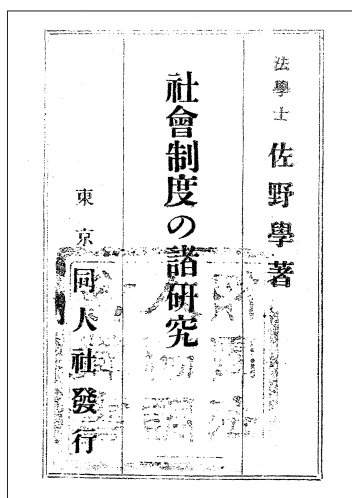
——社会の進歩とは、人民と財産との保護力を増し、自由思想と行動との範囲を拡張し、人間の欲求を満たす品目が、ますます多大の質量と変化とから産出せらるゝにありと。

社会進歩とは、この産出について、社会機関の構成を改変することである。著者によると、“生活難”は、社会進化の一現象であり、個人的階級または一団の状態としてみなすことができるという。

本書は、十五章から成っている。内容の概略は——緒論 進化と進歩 第一章 外界及び人種 第二章 知識、じよう剰余精力、しよ種属 第三章 集団の競争、衝突 第四章 物質的進歩 心的進歩 第五章 同情心、他愛心、模倣、同類意識 以下省略する——である。

納武津の『最新社会学講話』（大正10・10）は、主として初学者のために、社会学の内容と輪郭との一般を講じたものという（「例言」）。

著者によると、社会学者と称する一部のひとびとが、社会学の研究に一身をささげるようになったのは、近年のことという。社会学界の急務と



佐野学著『社会制度の諸研究』。

は何か。それはもとより社会学的資料とか原理の蒐集そのものにあるのではない、という。社会学的体系^{システム}の確立こそ、いそいでなさねばならぬしことであるという。

著者がみるところ、“体系的な社会学”の建設につとめている代表的な著作は、欧米の学界においても、わずかに二十種内外にすぎないという。日本では建部遯吾や遠藤隆吉が、それを試みているが、一般の社会学者の首肯^{しゅこん}しうるものであるや否やはうたがわしいという。

本書は、四一二頁もある大著である。執筆にさいして、あらゆる社会学的著作を参照したとのべている。内容の概略は——第一編 第一章 社会学の概念 第二章 社会学の題目と問題 第三章 社会学の研究方法 第二編 第一章 社会の概念 第二章 社会の分類 第三章 社会の性質 第三編 第一章 社会の起原 第二章 社会力 第四編 第一章 社会活動 第二章 社会の組織 第五編 第一章 社会精神 第二章 社会秩序 第六編 第一章 社会進歩——である。

著者によると、社会学についての“観念”（考え、概念）が、ひとにより大いに異っているという。社会学に関するもっとも通俗的な観念は、これを“社会の弊害”（害となる、わるいこと）とその救済^{きうさい}をとりあつかう科学である。

社会学は、“社会的弊害”の研究と、その弊害を匡正^{きやうせい}（正す）しようとする“慈善”の科学的発達とを通して成長してきたのである。その他、社会学は、社会現象、社交性の諸現象、人間の諸制度、社会の秩序や体制や進歩などを科学とする考え方もある。

しかし、なんといっても、社会学の題目は、広義の“社会現象”であるようだ。

佐野学の『社会制度の諸研究』（大正10・11）は、大正八年（一九一九）の後半より同十年（一九二一）前半まで、『解放』『我等』『先駆』などの雑誌に発表した論文をまとめて一書としたものである。

本書には社会階級、農民史、農民問題に関する論文がふくまれているが、社会階級についての論考が多い。著者によると、社会階級は、国家や財産制度とともにもっとも根本的な社会制度だという。わたしが見た本書は、著名入り本であり、西村真次（一八七九—一九四三、大正・昭和期の歴史学者、早大史学科の基礎をつくった）に献じたものである。

内容の概略は、第一編 社会階級の諸研究 一 階級社会の発生的考察 二 社会戦の社会学 三 古代社会階級考 四 貴族階級の本質と心理と運命 五 軍人階級の社会史的考

察 第二編 農民史及農民問題の諸研究 第三編 社会制度の種々 第四編 社会思想その他——である。

「第三編 社会制度の種々」のなかに、「三 現代の支配者階級」の一章が収められているが、これについて著者の考えを聞いてみよう。

著者によると、明治維新は、政治革命であるとともに社会革命でもあった。この革命によって、旧来の支配者階級が一蹴された。維新後のもつとも根本的の支配階級は、資本家階級であり、この階級とともに「貴族階級」が、支配者の一列を占めているという。

貴族階級は、三つの部分から成っている。

第一は維新以前の支配者（大小名の後身である華族）。

第二は平安朝貴族の後身（堂上華族）。

第三は維新の元勳を中心とする官僚系の華族集団。

大正時代、じっさい日本を支配していたのは、資本家と貴族の両分子であった。

著者によると、資本主義国家において、つぎの時代の支配者はだれかというと、労働者階級を中心とするであろうと予想する、という。

支配層の更新には、二つの条件が必要だという。ひとつは在来の支配者階級が廃^{はいたい}（おとろえる）、その地位をたもてなくなること。その二は他に代るべき実力をもった新しい社会階級が発生することである。その新興階級とは、中間階級（中等商工業者、中農、俸給生活者、教育者、自由業者）である。

いまの支配者階級にとって代わるべき階級とは、いまのべた中^{ちゅう}間^{かん}階^{かい}級^{きゅう}や労働者階級であるという。著者の考えによると、現代社会の二大階級とは、支配者階級と被支配者階級（その大部分は、労働者階級）であった。

田制佐重訳『社会遺伝』（大正11・4）は、イギリスの著名な社会学者ベンジャミン・キッド（一八五八―一九一六）が著わした『力の科学』（*Science of Power*, 1918）を反訳したものである。が、原書名を改め、『社会遺伝』とした。

キッドは名著『社会的進化』（一八九四年）をもって世界的名声をえた人である。が、同人の社会進化論の基調は、それまでのダーウィン説に反抗するところにあった。本書の主意は、個体的遺伝にたいして社会的遺伝を論じた点である。身体の媒介による個体的遺伝は、社会進化を助長

しないという。社会が進化するのには、社会文化を媒介とする社会遺伝によってであるという（「例言」）。

内容の概略は——第一篇 西洋知識の挫折 第一章 世界的革命の集成 第二章 大逆転の心的中心 第三章 西洋倫理の終極面 第二篇 大組織の基礎 第四章 文明の力は理性に宿らず 第五章 理想の情緒は最高の原理 第六章 西洋に於ける奇怪の現状 第三篇 力の心的新中心 第七章 力の科学の根本法則 第八章 婦人は社会組織の中心 第九章 婦人の心意 第十章 社会的遺伝——である。

井上吉次郎訳『社会学』（大正11・5）は、カナダのトロント大学教授マックイヴァー『社会』^{「ミニマ」}を反訳したものである。内容の概略は——第一卷 緒論 第一章 社会的事実と社会的法則 第二章 社会と組合 第三章 学問中社会学の地位 第二卷 社会の分解 第一章 間違った社会観 第二章 社会の要素 第三章 社会の構成 第四章 制度 第三卷 社会発達の原則 第一章 社会発達の意味 第二章 所謂社会死滅の法則 第三章 社会発達の第一法則 第四章と第五章は、第一法則に関連する問題 第六章と第七章は、社会発達の第二、第三法則 第八章 総合——である。

著者によると、広義の社会学といえ、特殊社会科学（政治、経済、法律、宗教、教育、美術その他）も包含されるが、狭義の社会学は、社会の本質や発達の研究であるという。

社会学者の研究対象は、『社会』であるという。その社会研究の最初にして、最大の著作はプラトンの『共和国』であるが、これは都市社会論でもあった（三〇頁）。

高田保馬の『社会と国家』（大正11・5）は、社会学的方面から考察したものであり、それたるにとどまると「序」の中でべている。国家と社会との関係は、これまで政治学・法学・経済学の方面から研究されてきたが、著者の立場は、多元的社会観であるという。

内容の概略は——第一章 総説 第二章 社会及び全体社会 第三章 共同社会に関する思想の変遷 第四章 全体社会と国家との同視 第五章 社会の発達の問題に就いて 第六章 部分社会の分化 第七章 社会の団結の減衰 第八章 社会の地域的解放——である。

“国家”とは何か。そして“社会”とは何か。著者がみるこの両者についての考えは、こうである。——社会とは、大勢のひとびとの結合したものであり、ゆえに国家も、ひとつの社会である。国家は、もっとも重要にして、複雑かつ宏大なる社会である。

国家と社会とは、その存在において相対立するものか。社会は国家のなかに包括せられ、その一部を形成するものなのか。国家が発達するにつれて、社会にどのような発達が生じるのか。一般文化の発達にともない、国家も社会も著しい変化をこうむるという。

国家と社会との包括的關係をかんがえるとき、全体社会の発達の問題が提起されるようである。

遠藤隆吉の『社会学原論』（大正11・7）は、社会学をもつて、社会の発生とその法則を研究する学問である、との考えのもとに、本書を発表したようである。しかしながら、今回の作も意に満たないものという（「序」）。

著者によると、これこそ社会学の述作とおもわせるものは少いという。たとえば、アメリカの社会学者であるロッスの『社会学原理』は、ほとんど系統的でないというし、ウォードの純正社会学も著者一流の見解というにすぎず、ギィディングズの系統も、いまからみればただ同類意識の説明にすぎないという。

内容の概略は——第一編 総論 第二編 社会 第三編 社会の系統 第四編 社会の法則 第五編 社会の本質と其の応用——である。

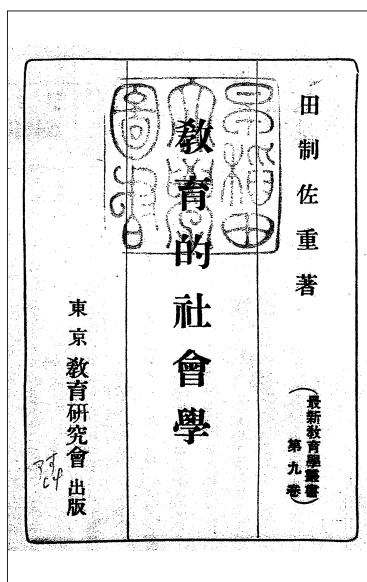
著者によれば、“社会的”という名称は、きわめて包含的であるという。この呼び名には、政治的・国家的・経済的・道德的な意味がある。人間社会の利害禍福（わざわいと幸い）に關係するものがある以上、それは社会的なのである。いかなる時代、いかなる社会といえども、“社会学的研究”のないことはない、という。

著者は、東洋における社会学的研究（第一編 総論 第二章 社会学の前提）のなかで、インドと中国のばあいについて取りあげている。インドのマヌ法典（紀元前二世紀ごろ成立した）は日常生活の規範をのべた社会的研究の一種としてきわめて重要なものであり、仏教の開祖・釈迦（前四六三—三八三ごろ）以後におけるインドの社会学的研究としてみるべきものは、“四部律”（四種類の戒律書）という。

一方、中国は社会学的研究がもっとも発達した国という。ゆらい中国人は、数多の氏族にわかれてくらし、相互に軋轢の状態にあったから、政治道德の思想はみずから発達せざるをえなかったという。処世修養のかなめを教えた書経（中国の経書、古代の政治における君臣の言行のモデルとすべきものを集成した）は、古代中国における注意すべき社会学的研究のひとつである。

佐野学の『社会の進化』（大正11・10）は、日進堂の近世分化叢書の第二編にあたる。本書は、抽象的に社会進化論の理論を説いたものではない。著者の意図は、社会進化についての根本的な、具体的事実にたいして、その例証をあげ、その人類史的意義を解釈し、将来の社会進化のすがたを想像したものである。著者はかたっている。——社会は進化するものであり、その停滞は死を意味する、と。

内容の概略は——第一章 原始の社会 第二章 君主の魔術的起源 第三章 原始の財産制度 第四章 部族社会と文明社会 第五章 経済生活及政治生活の進化 第六章 資本主義社会——である。



田制佐重著『教育的社会学』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

著者は、さいごの章節のなかで、こんなことをのべている。こんにちの資本主義社会において、二個の巨大なる経済的階級が対立すると。それは資本家階級と無産者階級である。前者は、旺盛なる利己的企業精神のもとに活動する社会階級である。かれらの富は、加速度的にまし、その財産を膨大させる。後者は、生産的資力をもたず、ただ労働力だけを売り、生活を維持するだけの労賃をもらっている社会階級である。強者は、資本家階級。弱者は、無産階級である。上層階級は、じぶんにも有利な現状をあくまで維持しようとつとめ、下層階級はこれを打破して、新生面をひらこうとする。そのため両者は互いに争闘する。

こんにちの（日本）社会は、その現状を永久に維持すべきではない。歴史の必然として、なんらかの新しい社会に移ってゆかねばならない。すると、将来どのような社会の現出が、もっとも妥当性を有するのか。それは社会主義的社会である。

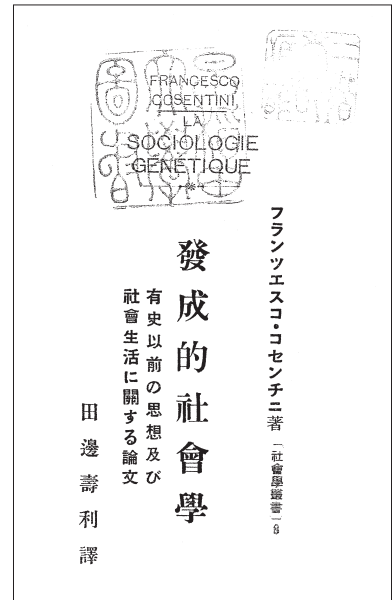
日本が欧米流の資本主義国となったのは、近代のことである。いまの社会には、中世的特徴がまだ数多くある。“華族”と称する封建貴族の後身、もしくは成り上がり者の一群が、政治的権力の一要素を構成している。日本社会が将来において、どのような方向を採るかは軽々しく断じえないが、われわれが慎重に解決せねばならぬ問題である、という（三五二頁）。

田制佐重の『教育的社会学』（大正11・10）は、教育の社会学的方面の研究についてのべたものである。「……社会学」といった風に、社会学の上にいろいろ文字を冠したものをよくみかける。“教育的社会学”の名称は、もとよりアメリカの教育学界においてはじめて現われたものである。が、だれによって命名されたものか明らかでない。

著者によると、命名者はおそらくワシントン大学総長・ヘンリー・スザロ博士ではないかという。

ではいったい“教育的社会学”とは、どのようなものをいうのであろうか。それは社会学の原理、方法、結果を教育の研究に適用し、教育研究の基礎を社会学に置くものとのことである（二二頁）。

教育的社会学は、近年になって開けた草創の学問であるから、その名を冠する著述はすくないという。内容の概略は——序論 第一章 教育的社会学の本質及び職分 第二章 個人と社会との関係 第三章 社会の構造 第四章 家族の教



フランツエスコ・コセンチニ著
『發成的社會學』

育的職分 第五章 遊戲団体の教育的職分 第六章 地方自治体の教育的職分
第七章 中間的社會団体の教育的職分 第八章 國家的教育的職分 第九章 学
校調査 第十章 學校行政 第十一章 訓練 第十二章 教科課程 第十三章
教授法 第十四章 職業教育 第十五章 職業指導 第十六章 文化教育 第十
七章 民衆文化の理想と教育の社會化 附録——である。
要するに“教育的社會学”とは、“教育”を社會的ないし社會学的に研究するこ
とを指し、ドイツやアメリカの教育学界でますます隆盛におもむきつつあるという。

井上吉次郎訳『社會学原論』（大正11・11）は、カナダのトロント大学教授マ

ックイヴァーの『社會科学の初歩』（*The Elements of Social Science*, Methuen, 1921）を反訳したものである。

訳者は、マックイヴァーの述作として、先に『社會学』（大正11・5）を刊行したが、今回訳したものは、前書とくらべて、思想に別段の發展はみられぬものという。しかし、じつにみごとな要約という（訳述者の序）。

内容の概略は——第一章 社會の本質 第二章 社會の段階 第三章 社會と環境 第四章 利害と組合 第五章 社會の構成 第六章 社會の進化 第七章 社會進化の大則——である。

社會学のこととは何か。社會学はどうあるべきか。これらの問にたいして、原著者はこう答えている。——社會学のこととは、社會生活を形成する過程および活動の無限の變化を通じておこなわれる法の大系をみつけるにある、と。また社會学のあり方としては——家族、國家、經濟組合、教會、その他いっさいの特殊組合の子宮たる大共同生活体、すなわち共同社會の性質を説明する一般的、あるいは構成的科學たるべきである、と（二二頁）。

田邊壽利訳『發生的社會学——有史以前の思想及び社會生活に關する論文』（大正11・11）は、イタリアの社會学者フランツエスコ・コセンチニが著わした同名の論著を、フランス語訳から重訳したものである。仏訳の書名および版元、刊行年は、“Francesco Cosenza: *La Sociologie génétique essai sur la pensée et la vie sociale préhistoriques*, Paris, F. Alcan, 1905”である。

これまでほとんど耳にすることがなかった“發生的社會学”とは、いったいどのようなものか。原著者によると、それは人類社會の起原および

そこに発現した小さいの現象を取りあつかうものという。そのためには、この社会の淵源におけるさまざまな機能を分析する必要があるという。本書の序論をかけたロシアの社会学者コワレフスキーは、発生的社会学を、“社会胚生物学” (Embryogénie Sociale) と呼んだ (六頁)。

秋葉隆^{たかし} (一八八八—一九五四、大正・昭和期の社会学者、京城帝国大学助教授) が訳した『社会原力の理論』 (大正11・12) は、ペンシルバニア大学経済学教授シモン・ネルソン・パッテンの主著 “The Theory of Social Forces, 1896” とその姉妹篇 “The Reconstruction of Economic Theory, 1912” の二書を反訳したものという。

内容の概略は——序論 第一章 環境の影響 第二章 民族心理学 第三章 知識と信念 第四章 社会共和態 第五章 正常的進歩 附録——である。

本書の目的は、現代の社会哲学を書きかえ、これまでの中で閑却されていた要素を誘入することだという。旧き^{ふる}哲学は、普遍的原理にもとづくことなく、ただ民族がこれまで生活してきた環境の系列を基礎としているようにおもえるという。民族のいまの環境は、それ以前の時代のものといちじるしく異っているから、その影響を説明するために、一つの新しい、社会哲学が必要だという。

長岡保太郎訳『タルド社会法則論』 (大正12・1) は、フランスの社会学者、刑事学者として令名が高いガブリエル・タルド (一八四三—一九〇四) の著書『社会の法則』 (*Les Lois sociales, esquisse d'une sociologie*, Félix Alcan, Paris, 1898) を反訳したものである。

著者がこの小著を出版した目的は、社会学についてのその三主要著作——『模倣法則論』 (一八九〇年) 『社会論理』 (一八九二年) 『普遍的对立性論』 (一八九七年) の要約または抜粋を提供するだけでなく、それらの著作を綜合し、その内部をむすびつける絆とするところにある、という。

内容の概略は——序 緒論 第一章 現象の反復性 第二章 現象の対立性 第三章 現象の適応性 結論——である。

鈴木栄太郎訳『諸科学の分類 社会有機体 個人対国家』 (大正12・3) は、ハーバート・スペンサーが著わした三編〔(一)「諸科学の分類」 (一八六四年)、(二)「社会有機体」 (一八六〇年)、(三)「個人対国家」 (一八八一年)〕を反訳したものである。

(一)の論文は、コントの実在論的学問分類論にたいして批判を試みるとともに、自説をもっとも組織的に論述したものである。

(二)の論文は、スペンサーの社会有機体説をもっとも明瞭に説いたものである。

(三)の論文は、当時のひとつの社会生活の信条や社会哲学を批判し、かつ社会の科学的研究の必要性を説いたものである (訳者序文)。内容の概略については、省略する。

波多野鼎^{かなえ}（一八九六―一九七六、大正・昭和期の経済学者）が訳した『社会学体系論』（大正12・3）は、ドイツの哲学者、社会学者であるパウ・バルト（一八五八―一九二二、ライプチヒ大学教授）が著わした『社会学としての歴史哲学』（Paul Barth: *Die Philosophie der Geschichte als Soziologie*, 1915）を反訳したものである。

本書は、まだ第一巻しか出ていなかったが、当時よく売れ、よくよまれた書物であつたらしく、訳者は第一巻の第二部（「批判的概観」——諸学者の社会学説についてのべたもの）を翻訳したのである。しかし、本書はかならずしも原文に忠実な訳ではなく、直訳や抄訳の箇所もあることを訳者は「緒言」のなかで断っている。

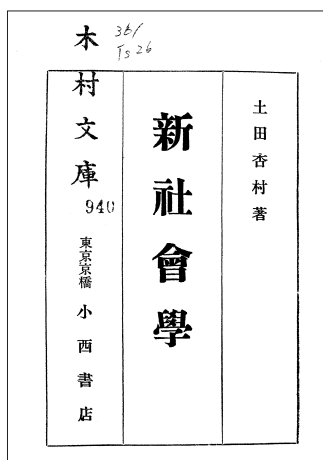
訳者によると、『社会学の歴史』や『社会学説史』をあつかった書物はすくなく、わずかに二、三あるにすぎないという。訳者は社会学の歴史に興味をおぼえ、二、三年まえからバルトのこの書をよんでいたが、その要領をしるしたノートは相当な量になったので、はじめて本書を訳す気になったという。

バルトの見解によると、『社会学』とは『歴史哲学』とおなじものである。社会学は、人類の歴史的発展における法則を究明することを任務とするという。かれは諸家の学説を解説し、それを批評するにあたって、この立場をはなれることはなかった。

内容の概略は——第一編 社会学の成立 第一章 政治学 第二章 社会学の先駆者サン・シモン 第二編 主知的社会学 第一章 コムトの社会学 第二章 分類主義社会学 第三編 生物学的社会学 第一章 社会学的ダーウィン説 第二章 スペンサアの社会学 第四編 主意的社会学 第一章 主意的社会学の本質 第二章 主意的社会学の本源（テンニース） 第三章 二元的社会学 第四章 関心の社会学（ラッツェンホーファー、スモール、ロッセ） 第五章 ヘーゲル派の主意主義（マッケンダー） 第六章 ハウリウの二元論 第七章 主意的社会学の批評——である。

通説にしたがえば、『社会学』はコントに淵源する。が、バルトによると、その実体からいえば、社会学はそれよりもずっと以前の古代ギリシヤに存在していた。社会学は、純理論的な問題ばかりか、じっさいの問題にむけられ、『政治学』（*πολιτική*）の名を冠せられていた。そして、プラトンが、『政治的觀察法』をなかば理論的に、なかばじっさい的に構成したのち、アリストテレスがそれを採用した。プラトンは、支配者の精神状態を基礎として社会を分類し、当時の社会にじぶんの理想国家をつけ加えて、内包的に考察したという。

田辺壽利訳『社会学概論』（大正12・3）は、アメリカの著名な社会学者レスター・フランク・ウォードの述作『社会学概論』（*Outlines of*



土田杏村著『新社会学』。



ウォード著『社会学概論』。
〔日本大学文理学部図書館蔵〕

Sociology, 1898) の社会学説、社会哲学の概要を知るには、もっとも適当なる著述である。しかしながら、かれの書は、いったいに難解の書として知られている。

内容の概略は——第一篇 社会哲学 第一章 諸科学中に於ける社会学の地位 第二章 社会学の宇宙論に対する関係 第三章 社会学の生物学に対する関係 第四章 社会学の人類学に対する関係 第五章 社会学の心理学に対する関係 第六章 社会学の与件 第二篇 社会科学 第七章 社会活力 第八章 社会の力学 第九章 社会学の目的 第十章 社会的発生 第十一章 個人的企成 第十二章 集合的企成——である。松永栄訳『社会学的方法の規準』（大正12・4）は、フランスを代表する著名な社会学者エミール・デュルケームの (*Les Règles de la Méthode Sociologique*, 出版社、刊行年不詳) を反訳したものである。デュルケームの代表的著述に『社会分業論』や『自殺論』などがあるが、この二書に

おとらず有名な書は、本書である。

内容の概略は——緒論 社会科学に於ける方法論の基礎的状态——本著書の目的

第一章 社会事象とは何ぞや 第二章 社会事象観察に就いての規準 第三章 正規的及び病理的の区別に関する規準 第四章 社会型の形成に関する規準 第五章 社会事象解釈に関する法則 第六章 学証に関する規準 結論——である。

著者によると、ひとは“社会現象”を科学的に研究する習慣をもっていないといふ。だから本書にふくまれた命題は、読者をおどろかすことがあるかもしれない、とのべている。

しかし、社会科学なるものが存在するとしたら、単なる伝統的偏見の解釈にとどまらぬあるものを予期し、事物が俗人が考えたものとは違ったものを示さねばならぬという。

すべての科学の目的は、発見をなすことである。そして、その発見により、既成概念を乱すにあるという。

土田杏村の『新社会学』（大正12・5）は、“新社会論”とも呼ぶべきものとい

う。そのほうが本書の取りあつかっている題材にふさわしい、と著者は考えたようである。

著者によると、“社会学”といった“独立の科学”が、成立するかどうか疑問であるという。

従来の社会学は、動物学における蠕形ぜんけい（はい歩く）動物のように、その範囲が漠然としすぎていた。社会学の研究方法とはなにか。なにを研究对象とするのか明かにされていなかった。

ただ“社会”におこった現象であるかぎり、芸術・道徳・法律・経済など、あらゆる範囲にわたって取りあつかった。しかも、その取りあつかい方といったら、あるときは哲学的、またあるときは心理学的であり、なんら一定したものではなかった。

共通なることばは、ただ“社会に生起した現象”といった通俗語であった。この漠然とした対象を、いろいろの方法で取りあつかうのが社会学の任務とされた。著者はそれをいみじくも“野戦病院”にたとえている。“傷病者”といった名称のもとに一括せられた患者の群れを、それが単に戦地でおこった傷病の名目のもとに収容するのとおなじように。

内容の概略は——第一編 序論 第一章 社会学の主問題 第二編 個人と社会理想 第二章 文化人の一票権行使 第三章 改造行程上の自由人宣言 第四章 労働問題への原則 第三編 社会構成と社会変化 第五章 社会変化の根本原理 第六章 社会革命と其の過渡期 第七章 三権分立説の否定と執行機関 第八章 社会構成と権力 第四編 法律経済の基礎概念 第九章 法律解釈と複合的社会 第十章 経済価値と社会制度——である。

本書の目的は、社会学研究の方法論上の議論を叙述しようとするものではなくて、ひとつの理想社会もしくは理想郷、あるいは現代社会思想について批判したものである。

田辺壽利訳『社会学の本質』（大正12・5）は、フランスを代表する社会学者ルネ・ヴォルムス（一八六九—一九二六、社会有機体の立場をとった）の『社会学——その本質、内容、係累』(*La Sociologie, sa nature, son contenu, ses attaches*, Paris, 1921) を反訳したものである。

書名をそのまま訳すと、日本名としてあまりにも長すぎるので『社会学の本質』としたという（訳者序）。

内容の概略は——第一編 社会学の本質 第一章 問題の要点 第二章 社会学は技術にあらず 第三章 社会学は特殊科学にあらず 第四章 社会学は如何なる意味に於いて社会の一般的科学なるか 第五章 社会学は特殊社会諸科学の哲学なり 第二編 社会学の内容 第三編 社会学の繫縁けいえん——である。

著者によると、一般に社会学の対象（目的）といえは、社会の諸制度の改革とか社会の改造を企図することのように考えられているが、これは誤りだという。つまり、社会学は人類の害悪をいやす手段になりえても、“技術”ではないからである（九頁）。

土生秀穂訳『社会進化と政治理論』（大正12・6）は、レオナード・トレロウニー・ホブハウス（一八六四～一九二九、オクスフォード大学教授を経てロンドン大学社会学教授、進化論哲学を主張）が、一九一一年四月コロンビア大学政治学科において講義した“*Social evolution and Political theory, 1911*”を反訳したものである。

ゆらい社会の性質についての理論に、社会契約説・社会有機体説・心理的社会説・唯物的、機械的社会観などがあるが、ホブハウスは“社会有機体説”を奉ずるひとりとみなされている。そしてかれの社会学説は、“人類学的社会学”と称せられるものである。

著者によると、“社会進化”とは、社会の無価値的進行過程であり、“社会進歩”とは、社会生活の目的や理想に合致する社会進化なのである。またいづこの国であれ、政治上の中心問題は、“国家”とその国家の成員である“個人”とのあいだの争い——束縛と自由とのあらそい——である。

個人が自由であるためには、国家はすべての個人を平等に束縛する必要があるという（「訳者序」）。

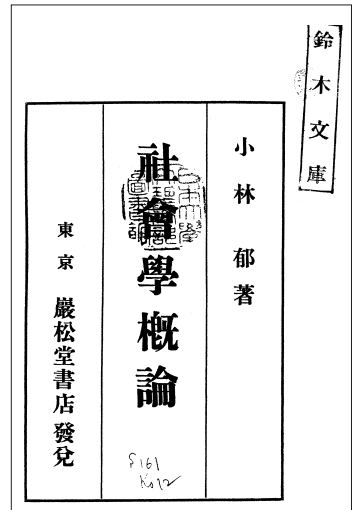
内容の概略は——訳者序 第一章 進歩の意義 第二章 進歩と生存競争 第三章 優生学の価値及び限界 第四章 社会調和と社会心意 第五章 社会形態学 第六章 国家の発達 第七章 進化と進歩 第八章 社会哲学と現代の諸問題 第九章 個人と国家——である。

宮崎市八訳『心理学的社会学』（大正12・6）は、アメリカのミズーリ大学社会学教授チャールズ・エイ・エルウッド（一八七三～一九四六、社会心理学と心理学的社会学の総合、および人間社会の一般理論としての社会学を提唱）の『社会学の心理学的方面』（Charles A. Ellwood: *Sociology in its Psychological Aspects, 1912*）を反訳したものである。

原著者の「序」によると、本書は心理学的なる社会学説の一概論である。このなかで著者が論じようとしたのは、社会学の心理学的の一方面——すなわち、“社会心理学”であるという。

本書は、社会学説の抱括的な見解ではなくて、直かに心理学に倚^よって立つところの社会学説の一部門であるという。

この訳本は、五二八頁もある大部な書である。内容の概略は——第一章 社会学及び社会の諸概念 第二章 社会学の主材及び問題 第三章 他の諸科学に対する社会学の関係 第四章 哲学に対する社会学の関係 第五章 社会学に於ける科学的方法 第六章 社会学の心理学的基礎



小林郁著『社会学概論』。
〔日本大学文理学部図書館蔵〕

第七章 社会の起源 第八章 心理学的社会学の基礎事実、社会整理 第九章 心理学的社会学の基礎事実——社会自制 第十章 社会生活に於ける本能の役目 このあと第二十章までであるが、省略する——である。

小林郁の『社会学概論』（大正12・6）は、著者が拓殖大学、日本大学、中央大学、慶応義塾大学などで講義した稿本をもとに一書としたものである。著者によると、本書をもって“社会の性質”を論じ、かつこれによって“社会問題”を解釈するさいの一助にしようとしたものであり、“現実問題の処理”にとって、社会学は欠くべからざるも

のという（「序」）。

内容の概略は——総説 本論 第一編 基礎概念 第一章 社会 第二章 社会学 第三章～第五章までは、社会学の学問上に於ける地位 第六章 社会学研究法 第七章 社会学の問題 第八章 社会の種類 第九章 社会力 第十章 社会の構造と機能 第十一章 社会過程 第十二章 社会連帯性 第十三章 社会進化論 第十四章 環境論

第二編 社会進化論 第三編 社会実質論 結論——である。

著者によると、社会学の主題は、人間の社会現象にある、という。その社会現象を組織的に、攻究するとき、観察によるべく、実験によってはならないという。社会学研究の特殊方法として、“比較方法”があるという。それは二個以上の相類似した現象を比較考察し、因果の関係をあきらかにすることである。

その他、“統計的方法”があり、これは社会の事実を数字をもって示したものであり、これは研究にとって欠くべからざる資料を提供している、という（七二頁）。

波多野鼎と河野密の共訳『コント実証哲学 附功利主義論』（大正12・7）は、イギリスの功利主義哲学者ジョン・ステュアート・ミル（一八〇六～一八七三）が著わした『オーギュスト・コントの実証哲学』（*Positive Philosophy of August Comte*, 2 edition, 1867）を底本とし、ドイツ語訳のミル全集ちゅうに収められた本書『オーギュスト・コントと実証哲学』（*August Comte und der Positivismus*, 1874）を参照し、反訳したものである。本書は、二つの部分から成っている。第一部の「コント実証哲学論」は、コントの実証哲学の講述にみられる思想についてふれ、第二部の「コ

ント再論」は、コントの後期の思想——実証政治学体系を中心とする思想について批評したものである。

内容の概略は——序言 訳者序文 第一部 コント実証哲学論 第二部 コント再論 略伝 第三部 功利主義論——である。

山田吉彦訳『犯罪社会学』[上]（大正12・7）は、イタリアの著名な刑法学者エンリコ・フェルリ（一八五六？、ホログナ、チュラー、シエナ、ローマの各大学で教鞭をとった）が著わした『犯罪社会学』（*Sociologia Criminale*）のフランス語訳からの重訳である。

フェルリの「犯罪社会学」は一名、「社会主義犯罪学」と呼ばれている。かれは部分的独創力よりも、その総合的精神にすぐれていたようである。はじめダーウィンの進化論、スペンサーの総合哲学、マルクスの科学的社会主义社会学などを摂取し融和したのち、これらのものから生まれた社会学を犯罪科学に適用し、「犯罪社会学」といったものを創成したとされる（「訳者序」）。

内容の概略は——訳者序 序論 実証犯罪学派 第一章 犯罪人類学に依って与へられたる与件 第二章 犯罪統計学に依って与へられたる与件——である。

なお、同書の下巻は、おなじ訳者によって同年八月に刊行されているが、内容の概略は——第三章 刑事責任の実証的理論 第四章 實際的改革 第五章 結論——である。

本書は、犯罪の社会的關係を追究し、犯罪現象にたいする批判とその解決のカギをあたえようとした論著のようだ。

風早^{かさはや}八十二（一八九九〜一九八八）は、大正・昭和期の刑法学者である。昭和二年（一九二七）、九州帝国大学教授。マルクス主義者として活躍し、同八年、十五年と二度にわたって投獄された。同人が訳した『タルドの社会学原理』（大正12・8）は、長岡保太郎訳『社会学方法論』とおなじ内容のものである。風早訳は、はやくから完結していたが、出しおくれで長岡訳に先をこされてしまった。が、タルドの原書ちゅうにみられる難解な箇所について、長岡訳はなにも答えていないので、あながちじぶんの訳を読者に提供することは無益ではないという（「訳者序」）。

原著者によると、本書はすでに発表した三部作——『模倣の諸法則』『一般的対立』『社会学論理』——の概論と精隨とをはっきり摘要し、それらを結果している内面的連鎖をあきらかにしようとしたものという。

内容の概略は——緒論 第一章 現象の反復 第二章 現象の対立 第三章 現象の応化 結論——である。

タルドによると、科学はなんらかの实在を、反復作用・対立作用・応化作用の三つの方面から考察することによって成りたつという。「反復」とは、因素的な「原因作用」を意味する。科学は性質上、「対立」をもとめねばならぬが、諸力の平衡・諸形の対称・生活有機体の闘争・すべて

の生物の抗争を考量に入れる必要があるという。

そして、もっとも重要なことは、現象の「応化」^{アダプテーション}であり、科学者はより高い応化を建設せねばならないという。

明治大学教授・赤神良譲の『社会学概論』（大正13・2）は、一〇九頁の小著である。おそらく、本書は教科書として執筆されたものであろう。国立国会図書館の蔵本は、和とじ本である。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 社会学ノ概念 第一節 社会ノ概念 第二節 社会学ノ定義 第三節 社会学ノ分類 第三章 社会学トノ関係 第四章 社会ノ主要素 第五章 社会ノ助要素 第六章 社会ノ動因——である。

著者が「社会学」にたいして抱いている意味内容はどのようなものか。それはつぎのようなものであった。

——社会学とは、社会そのものの発生、実体、運営、進化などの理法（法則）を研究して、これを実社会の諸現象に応用して、人生の幸福を増進させるにあると。

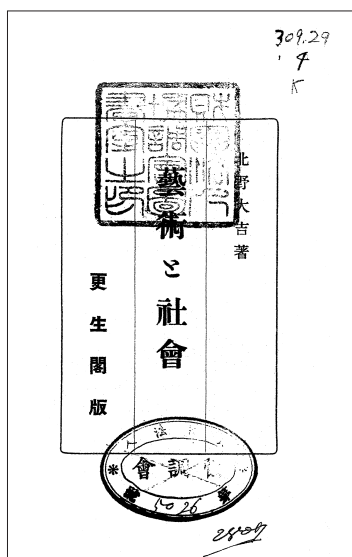
『社会理想学』（大正13・3）は、竹内泰が下訳をし、それに手を入れたのが浮田和民であったようだ。原著は、イギリスの社会学者、経済学者であるジョージ・ダグラス・ハワード・コール（一八八九—一九五九、ギルド社会主義者、労働問題の権威者）の『社会理論』（*Social Theory*, 1920）である。

著者の目的は、既成社会を説明することにあるのではなく、いまの社会組織を批評し、その欠点を指摘し、人格の理想と自由とにかなった新しい社会組織を招来することにある。ゆえに版元では表題を「社会理想学」と命名したという。

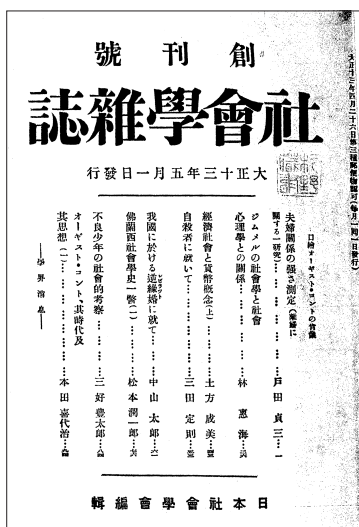
内容の概略は——第一章 社会理論の様式 第二章 名称と其の意義 第三章 機能の原理 第四章 協同の様式と動機 第五章 国家論 第六章 民主主義と代議制度 第七章 政治と立法 第八章 強制と統制 第九章 組織的社会的経済的構造 第十章 郷土主義^{レジヨナリズム}と地方政治 第十一章 教育論 第十二章 自由論 第十三章 制度の虚脱 第十四章 結論——である。

著者によると、人間は生まれるとすぐ社会的環境のなかに投じられ、しだいに社会に応化されてゆく。ひとはその環境を有効に利用することが、生まれてから死を迎えるまで、かれの終生の事業となる。發育にともない、ひとは家族の存在を意識しはじめ、家族との接触こそ、かれのはじめの社会的経験となる。

やがてひとは家族以外に、もっと大きな社会があることに気づく。大人になるころには、じぶんの環境が——個人と社会、習慣と制度、権利と



北野大吉著『芸術と社会』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕



『社会学雑誌』（創刊号、大正13・5）。

義務、快楽、苦痛、欲望、希望、恐怖の複合であることを知るといふ（「第一章 社会理論の様式」）。大正十三年（一九二四）五月、『社会学雑誌』の創刊号が刊行され、東大の戸田貞三をふくむ八名の学者が寄稿した。北野大吉の『芸術と社会』（大正13・5）は、イギリスの詩人・工芸家・社会主義運動家として著名なウィリアム・モリス（一八三四～一九六）の『社会思想』を紹介したものである。

モリスの主張は、芸術の原理を社会の原理とすることにあつたという。かれはこれのために、生産の歓喜を唱導し、創造の自由や労働の快楽化を主張した。が、その思想は高尚すぎて、当時の労働運動に大きな影響をあたえなかったという（「序」）。

内容の概略は——緒言 第一章 モリス略伝 第二章 手工業論 第三章 社会主義 第四章 共產主義——である。

著者によると、イギリスの産業革命は、将来にむかって大いなる「禍根」を残したという。すなわち、分配の不平等は、貧富の差、下級労働者の生活の悪化をまねき——社会問題を後世にのこした。そのような労働者を劣悪な生活状態から救いださんがために、「社会改良家」とか「社会主義者」と呼ばれるひとびとが立ちあがった。

いまその社会改良家を分類すると、およそつぎの三つになるという。

- 一 人道的改良家（「慈善」を金言とする、キリスト教社会主義者。社会問題を感じ情的立場から取りあつかう）
- 二 理智的改良家（「正義」を標語とし、社会問題を指導してゆく立場）
- 三 審美的改良家（「美」を尊重することによって、社会問題を解決してゆく）

モリスは、第三の「審美的改良家」の代表者であり、かれにおいては「芸術」と「生活」とは、密接な関係を持ち、「美と道徳」「歓喜と活動力」は不可分の関係で

あった。モリスはこの関係を念頭において、社会問題の解決にまい進した。

川辺喜三郎の『社会学原論』（大正13・6）は、四二七頁もある大著である。本書は、時代の要求に応じるため、大学や専門学校の社会学教科書または参考書とするために、また同時に一般むきの読物として、斯学の普及に役だてたい——との希望から、やさしく説いたという。

欧米諸国では、社会学の進歩はおどろくほどであり、単に理論研究だけにとどまらず、人生問題のじっさい的解釈法として、ますます発達しつつあるという。とくにアメリカにおいては、中等学校・専門学校・大学に社会学講座がもうけられ、その修得が要求されているという（「序」）。

日本では、中学校や高等学校に全然社会学はなく、専門学校や大学にも社会学講座のないところがあり、世界の趨勢におくれているという。

著者によると、本書は社会学概論の一種であり、根本原則だけを取りあつかっているから、これを『社会学原論』と名づけたという。

内容の概略は——第一章 緒論 第一節 社会生活 第二節 社会生活関係の研究 第二章 社会学の性質 第一節 社会学の意義 第二節 社会学の発達 第三節 社会学の範囲と目的 第四節 社会学と他の社会科学との関係

第三章 人間性 第四章 人間性の個人的・性的・人種的^{（不明）} 第五章 社会力及び社会過程 第六章 自然環境の影響 第七章 社会進化

第八章 社会進化程度の分類 第九章 経済生活の進化 第十章 経済生活の社会的方面 第十一章 言語・文字 第十二章 芸術的生活 第十三章 道徳的生活 第十四章 家族的生活 第十五章 政治的生活——である。

著者は巻頭において、人間の「社会生活」について省察している。社会生活とは何か。それは一名「集団生活」のことだという。

世間には、めぐまれた環境で生まれ育ち、エリート教育をうけ、難^{なん}無^なくよい職にありつき、人生の出世階段をのぼってゆく人間がいる。一方、逆境のなかで生まれ育ち、ろくに学校へもゆくことができず、社会の片すみで貧しい暮らしを強いられ、ひっそりと生きている者もいる。

世の中は、じっさい公平にできていないのである。ひとに運や不運はつきものである。そして人生はまさに優勝劣敗なのである。

たまたま受験戦争を勝ちぬいてきたもののなかには、往々にして、人間性に欠いた者が多くみられる。かれらは自分自身、すぐれていると自負しており、学歴や肩書だけをたよりに生きているから、みずからを恃^{たも}んで營々として学んできた人間とちがって、じっさい底はあさいし、実力に乏しい。

著者によると、ひとはじぶんの考えと力だけで何でもできる——他人の世話になる必要はない、と考えがちである。じぶんは才覚のある人間である、とうぬばれているからである。

しかし、よくよく考えてみれば、それはただひとつの気まぐれにすぎない、という。われわれは他人の世話にならず、また他人の意志や行為の影響をうけずに、なしとげるものは何ひとつないのである。経済的、政治的活動はもとより、教育・宗教・交通・通信・家庭生活・隠遁生活において、他のひとの世話や影響や支配をうけている。

学問を例にとっても、純然たる独創の産物はじつにすくないように思える。じぶんの頭でかんがえ、じぶんひとりでつくり出したものである、と誇称してみたところで、どこかでひとからヒントや着想をえたにちがひなく、そうやすやすと独創されるものではない。

著者いわく。——自修自製などと誇称しても、大部分は他人の既に作つた書物や発見や思想・理想を土台として、自分は僅かに其れ等的一部分を取り入れ、又は少々其の上に新機軸を出すに過ぎない、と（第一章 緒論）。

つまり、われわれはどんなに權威や大家ぶっても、しょせん他人の文字をなぞっているにすぎないのである。このことの自覚のない人間はあわれである。この種の人間に天佑神助はありえない。すなわち他人から学ぼうといった気持がない以上、その学問はまず大成することはなからう。

ともあれ、ひとは他人の“補助”がないと、この世の中を生きぬくことはできないのである。著者によると、“社会”とは、お互いの心的交通を有し、かつ統一ある二人以上の人間の共同生活団結体——であるという。

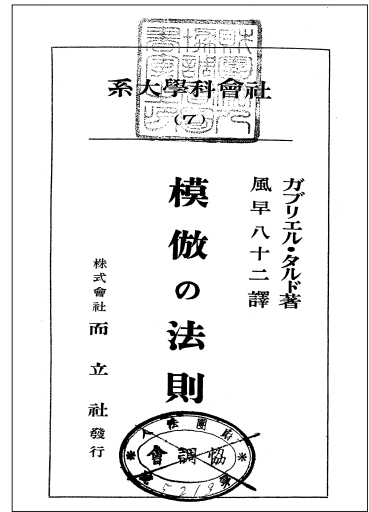
新明正道の『権力と社会』（大正13・6）は、あらゆる社会に共存している“権力現象”を文化的、歴史的に検討したものである。“権力”とは何か。それは他人を支配し、服従させる力の意である。著者によると、“権力”は社会における強制のひとつの発展だという。だからそれは社会的にひじょうに重要な問題のひとつである、とのべている。（「序文」）。

内容の概略は——第一章 権力の社会的意義 第二章 権力の古代の様相 第三章 権力の近代の様相（二） 権力の性質 第四章 権力の近代的様相（二） 権力の相互関係 第五章 権力進化の傾向及び批判 附録 社会構成化について——である。

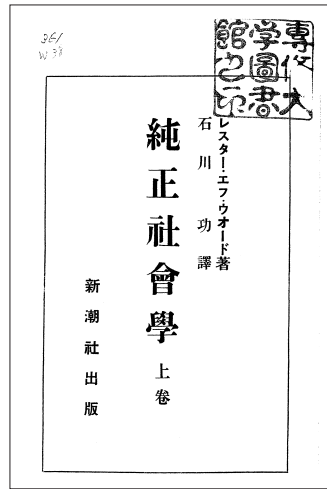
著者によると、“権力”なるものは、あらゆる社会に通じて存在するものでないという。権力は“組織社会”においてのみ存し、かつ問題になるという。権力は、組織社会における一つの社会現象である。それが存立するわけは、社会規範を施行するためにある。

権力と社会組織との関係はきわめて密接であり、不可離である、という。

ジャン・ガブリエル・タルド（一八四三—一九〇四）は、社会学者・刑事学者・司法官といった三つの顔をもっている。はじめ刑事学の方面で業績をあげ、晩年は社会学者となり、コレージュ・ド・フランスの教授になった。



ガブリエル・タルド著『模倣の法則』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕



レスター・エフ・ウォード著
『純正社会学 上巻』。
〔専修大学附属図書館蔵〕

風早八十二訳『模倣の法則』（大正13・7）は、タルドの代表的な著述のひとつである。かれによると、社会は物理界、生物界とおなじように一定の法則を有している。社会とは“反覆”（すなわち“模倣”）によって、漸次に拡充してゆく現象だという。

この訳書は、四四九頁もある大著である。内容の概略は——初版、再版、訳者の序凡例 第一章 普遍的反覆 第二章 社会的類似と模倣 第三章 社会とは何ぞや 第四章 歴史とは何ぞや——考古学と統計学 第五章 模倣の論理的諸法則 第六章 『超論理的諸勢力』——である。

タルドによると、社会は模倣なのである。模倣はすなわち一種の夢中遊行病にほかならない、という。

景山哲雄訳『社会学』（大正13・11）は、ウエルネル・ゾンバルト（一八六三—一九四一、ドイツの経済学者・社会学者、一時マルクス主義にちかづいたが、のちその批判者となる。プレスラウ、ベルリン大学で教鞭をとった）は、一九世紀から二十世紀にかけての著名な社会学者の“標本”を選定し、その学説について釈義し、説明したものである。

内容の概略は——緒論 ウエルネル・ゾンバルト 第一章 アウギュスト・コント 第二章 グスタフ・アドルフ・リンドネル 第三章 ハアバート・スペンサー 第四章 アルベルト・シェッフレ 第五章 フェルディナンド・テンニース 第六章 グスタフ・ルボン 第七章 ルウドルフ・シュタムレル 第八章 ガブリエル・タルド 第九章 オットオ・フォン・ギルケ 第十章 レスタア・エフ・ワアド 第十一章 クルト・ブライジヒ 第十二章 ウィルヘルム・ヴント 第十三章 ゲオルグ・ジンメル 第十四章 オットマール・シュパン 第十五章 マックス・シェレル 第十六章 マックス・ウェーバー——である。

石川功訳『純正社会学 上巻』（大正13・12）は、レスター・エフ・ウォードの著“*Pure Sociology*, 3rd ed. New York, 1921”を反訳したものである。本書は、各大学の夏期講習会で社会学について講演をこころみたとときの手記をまとめ一書としたものである。本書は、社会の起源、性質お

よびその自発的発達についての理論的研究をおさめたものである。

内容の概略は——第一編 排列論 第一章 純正社会学の一般的特色 第二章 科学の確立 第三章 社会学の主題 第四章 方法論 第二編 発生論 第五章 血統関係 第六章 動的作因 第七章 主観的能力の生物学的起源 第八章 意欲的能力 第九章 社会機械学 第十章 社会静学 第十一章 社会動学 第十二章 社会力の分類 第十三章 有機体発生日——である。

“純正社会学”とはなにか。その一般的特色とはなにか。まずこれらの事項についてのべておかねばならない。

著者は、純正社会学において追求せねばならぬ目的は、“社会の根本的性質”だという。そして、それが発生した“先行的状態”をことごとく知るのではないと、何ごとも知ったとはいえないとのべている。

純正社会学とは、現在の社会における諸現象や諸法則を取りあつかう学問の意味だという。それは社会の諸現象によっておこる過程を説明し、われわれによって観察される社会上の諸事実によって存在するにいたった、先行的条件を探究することである。

純正社会学は、あくまでも現在および過去のみに制限され、将来はそがあるがままにまかせ、真理を目標として探求をすすめることに主眼をおく、という（八頁）。

そして、社会学の主題、その目的とはなにか。著者によると、社会学は“社会活動” *social activities* に関係する学問だという。社会学は、行動の研究であり、現象の研究なのである。社会学の研究目的は、人間とは何であるか、ということではなく、人間のなすところのものは何かということである。

社会学研究の資料のおもな源泉は、歴史・人口学・人類学・心理学・生物学・公民学・経済学などである。

宮崎市八訳『社会学的認識論』（大正13・12）は、オーストリアの政治、社会学者グスタフ・ラッツェンホーファー（一八四二—一九〇四）が著わした“*Die soziologische Erkenntnis, 1896*”を反訳したものである。

著者は、“社会学的国家学”の集大成者であるという。本書は、原著の輪廓にはじまり、認識論、実体論的提説、国家論について解説し、さらに国家論から政治学の本質と目的にまで説きおよんだものである。

内容の概略は——第一編 技抄 第一章 合法則性の主張 第二章 統一的進化と関心の位置 第三章 社会過程の理論 第二編 解説 第一章 社会学的認識論の出発点 第二章 関心の性質及びその社会的機能 第三編 応用（政治の本質及び目的）第一章 新しき政治学 第二、第

三章 政治の本質 (一) (二) 第四章 政治の目的——である。

山田嘉吉の『社会学概論 上』(大正13・12)は、現代社会学の学説を批評し、社会学を研究する基礎概念をつくるのを目的に著わしたものである。

国立国会図書館の蔵本は、上・下二冊合本されている。小型本であり、(上)は一一四頁、(下)は九八頁ある。「はしがき」によると、著者はじぶんの意見をのべたというより、むしろ諸大家の学説や評論を取りいれ、「全編が諸大家の論じたものを蒐集したと等しいもの」であるという。いわば諸大家の所論を材料として、じぶんの意見を建設したようなものである、と正直に告白している。このようにすなおにじぶんの創作の手のうちを明かす人物はめずらしい。

内容の概略は——(上) 序論 社会学の必要 社会とは何ぞや 社会学の概念 現代の社会学説 一 慈善の学としての社会学 二 人類学としての社会学 三、四は生物学としての社会学 五 経済学としての社会学 六 歴史学としての社会学 七 特別社会学としての社会学 八 社会的事実の記述としての社会学

(下) 九 団体研究としての社会学 十 分業としての社会学 十一 模倣としての社会学 十二 無意識なる社会束縛としての社会学 十三 人類の争闘としての社会学 十四 社会主義としての社会学 基督教社会主義^{キリスト教} 十五 純正社会学 十六 応用社会学 附録——である。

“社会学”とはなにか。これについて各大家は、いろいろ定義をくだしているが、著者によると、一つの共通点があるという。それはなにかというと、社会を研究する学問であるという点である。

よく“社会現象”を取りあつかうのが社会学である、といわれるが、著者によると、これはあまりにも意味がひろすぎており、ほんやりしているという弊があるという。

社会学が社会現象を研究する学問である、といっても、社会現象を研究する学問はいくつもある。たとえば、経済学・倫理学・政治学・法律学などもみな、社会現象を研究している(二四頁)。

波多野鼎訳『社会政策「総論」』(大正14・1)は、カールスルーエの高等工業学校、ミュンヘン大学で教鞭をとったことがあるオット・フォン・ツイーデネック＝スエーデンホルスト(Otto von Zweideneck-Süden horst, 一八七二—一九五七)の著『社会政策』(Sozialpolitik, 1911)の第一部を反訳したものである。

本書は、学生の参考書として役立せるために執筆したらしく、個々の社会政策的問題を描写することを眼目としたという（「序」）。内容の概略は——第一編 序論 社会と社会階級 第二編 社会政策とその発現形式 第三編 社会政策の活動範囲 その目標その方法 及びその可能性——である。

新明正道訳『社会学と政治理論』（大正14・4）は、アメリカの社会学者、歴史学者であるハリー・エルマー・バーンズ（一八八九～一九六八、アマースト、スマス、コロンビアの各大学で教鞭をとった）が著わした、同名の書を反訳したものである。

本書は、訳者によると、政治学的主要问题についての社会学者のさまざまな解釈や考察を、テーマを中心に概説したものという。政治学と社会学との交渉をあきらかにしているばかりか、社会学をベースにした政治学的知識を読者に提供している（「前詞」）。

内容の概略は——第一章 政治理論における社会学的傾向の発展 第二章 社会学の政治学に対する関係 第三章 国家の本質に関する典型的な社会学概念 第四章 国家の起源と発展の研究に対する社会学的貢献 第五章 国家の本質的要素の社会学的研究 第六章 国家と政府の形式の社会学的分析 第七章 政治の過程と機構の社会学的検討 以下、第十三章までであるが省略する——である。

著者によると、本書はけっして独創的な、連絡のある「社会学的な国家論」を提唱したものではないという。そうではなくて、社会学的な政治と国家の理論についての貢献を紹介することを意図したものという。

神永文三訳『社会学通俗教科書』（大正14・5）は、アメリカの高名な社会学者ギッディングズが著わした『社会学の初歩』（*Element of Sociology*, 1887）を抄訳したものである。原著は、大学や専門学校用の教科書として、平明かつ科学的に執筆されたものであり、同時に一般人にたいして、社会学の根本的な知識をあたえるにあつたようである。

内容の概略は——第一章 人口と社会 第二章 人口の集成 第三章 社会成員の実際の活動 第四章 社会化 第五章 協働 第六章 社会性 第七章 社会成員の階級 第八章 社会心意 第九章 同情的相似心及び衝動的社会活動 第十章 形式的相似心 伝統及び帰依 以下、二十章までであるが省略する——である。

「社会組織」とはなにか。著者によると、それは社会における習慣的な相互関係もしくは協働活動の永続的な形態をまとめたものという。そして、社会組織をつくり出す根基をなすものは、「相似心」（多数のひとびとの協働を可能ならしめているところの思想と感情の合致）である。社会組織は、人口内の相似心の表現である、という（二三頁）。



西村文則著『水平民族史物語』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

林要^{かなめ}（一八九四〜）は、大正・昭和期の経済学者である。大原社会問題研究所の助手をへて、大正十二年（一九二三）同志社大学教授になったが、のち大学を追われた。同人が訳した『社会主義及び社会運動』（大正14・5）は、ウェルナー・ゾムバ^{ヴェルナー・ゾムバ}ルトが著わした“*Sozialismus und Soziale Bewegung*, 1919”を反訳したものである。同書は、ゾンバルトの数多い著述のなかでもっとも有名な著述の一つであり、江湖^{こうこ}の好評を博し、二十一カ国語に訳された。

義及社会運動』の表題のもとに訳書を刊行しているという。

内容の概略は——訳者序 開題 社会主義及び社会運動の意義 第一編 社会主義 第一章 近世社会主義の根本観念 第二章 合理的社会主義 第三章 歴史的社會主義の創建 第四章 マルクス主義批判 第五章 革命的サンヂカリズム 第六章 ボルシェヴィズム 第二編 社会運動 第一章 社会運動前史 第二章 国民的特性の發展 第三章 統一的傾向 附録——である。

著者によると、社会主義とは——近世社会運動の精神的沈澱物であり、そして近世における社会運動とは、無産階級^{プロレタリアート}（賃金労働者階級）のあらゆる解放的努力であるという。さらに現代において生命ある社会主義はただひとつあり、それは“マルクス主義”だという。本書において、著者がおもにのべているのは、社会運動であり、無産階級の反対極にあるブルジョアジー（資本主義経済組織の代表者）のことである。

佐野学訳『社会進化論』（大正14・4）は、イギリスの社会学者ベンジャミン・キッド（一八五八〜一九一六）の同名の著作を反訳したものである。同書は、四五六頁もある大部なものであるが、近藤憲三が手を貸したようである。

佐野は、訳業をおえ、原稿を版元の而立社^{じりつしゃ}にわたして幾日もたたためのに、世間周知の事件により「亡命の身となられたのである。今両氏^{どこ}は何処にかある」（凡例）といい、本書はその記念になるものという。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 人類進化の状態 第三章 進歩は理性の裁可^よに據らず 第四章 人類歴史の中心點 第五章 宗教の社会的機能 第六章 西洋文明 第七章 西洋文明（続） 第八章 近代社会主義 第九章 進化の非理智性 第十章 結論——である。

西村文則の『水平民族史物語』（大正14・4）は、書名が如実にしめしているように、特殊部落民の虐いたげられた歴史をやさしく綴ったもの

である。著者が、本書の残りの原稿を版元（中央出版社）に渡したのが大震災の前日の八月三十一日であった。

九月一日正午——著者は、沼津駅頭において、大震災と遭遇した。東京方面の空に、一種異様な雲がみられた。畑のなかの掛小屋で何日かくらしたのち、灰^{かい}じんの中での生活がながくつづいた。

暑いさなか、汗をながしながら書いた原稿や校正刷のことが、ときどき思い出された。もうそれらは鳥有に帰してしまっていることであろう。

じぶんの努力がすべて水泡に帰したことを惜んでいたとき、組版こそ焼けてしまったが、ゆくりなくも原稿のすべてが印刷所の一隅から発見されたといった知らせが入った。

内容の概略は——一 民族闘争の黎明 二 虐げられたる民族人 三 階級闘争^{および}及水平運動の烽火^{ほうか} 四 水平運動の流行 五 水平民族の意義 六 水平社の分野 七 史上の水平民族（其一） 八 史上の水平運動（其二） 九 史上の水平運動（其三） 一〇 日本民族の氏族観と水平族 一一 日本人の潔癖性と水平族 一二 仏教に誤られたる民族 一三 史上の賤民別 一四 民族の水平族化す経路——である。

著者によると、穢^え多^たは非人よりも、やや身分が上であつたようだ。かつて京都の鴨川の河原に浮浪民がいて、小屋がけ生活をしていた。それを河原者といった。が、当時それを水平社族ほど低い人間とみなさず、ふつうの貧民、宿なし者、木賃宿生活者ほどにみていた。

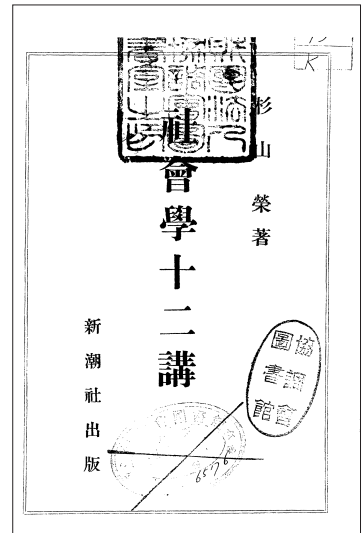
が、じょじょに区別を生じ、「皮革業」をなす者を穢多^え多^たといい、そうでないものを非人と称した。穢多^えの多くは皮革類や竹皮ぞうりを作ったり、その他の職人や商人をかねた生活をしたが、非人はもの乞い、もの貰い専門であつたという。

綾川武次^{あやかわたけじ}（一八九一—一九六六）は、大正・昭和期の国家主義者、弁護士である。昭和二年「全日本興国同志会」を組織し、戦後は「日本革新同盟」を結成した。同人が著わした『^{誰にも解かる}社会学の知識』（大正14・7）は、いわば社会学入門書である。著者は「此^この書は社会学入門として取扱^{あつか}はる可^べきであつて、社会学とは如何なるものであるかを示^{しめ}したにすぎない」（「序」）とのべている。

著者によると、社会学は何人^{なにびと}も知らねばならぬ学であるという。ちょうど経済学がこんにちにおいて、一般的に必要な学とみとめられ、ひとびとが経済学の指示する原則にしたがっているのとおなじである。

社会学は、一般的科学であり、だれもが味読すべき学であるという。これからわれわれの生活が複雑になるにしたがって、緊要^{きんよう}欠くべからざる学問であるという。

内容の概略は——総論 社会学の意味 東洋の古代社会学 西洋の古代社会学 西洋近世社会学 社会学の発生 社会学の種別 コントが社会



杉山栄著『社会学十二講』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

学を創始した動機 社会学の区別

社会 社会と集合体の区別 社会とは何を意味するか 社会の生活と観念 社会の
心理的基礎の必要 個人と社会の意味 社会と社会学の関係 国家の権力 権力存在
の意義 国家の意義 家族制度と団体の生活 夫婦と家族 地域団体 機能団体
文明 集積力と社会力 社会力の解釈 社会意識と諸法則 マルクス社会説の誤謬
共産とは何ぞや——である。

著者は「社会学の意味」のなかで、社会学はコントによって創められたものではない。コントは実証哲学のなかで「社会学」の文字を使用したことはよく知られているが、かれは社会学を「社会物理学」とよんだのである。

著者によると、「社会学的思想」の発芽は、ヨーロッパだけではなく、東洋にもあったという。東洋において社会学研究の発達したのは支那（中国）だという。古代中国では、数多の民族がわかれて生活し、お互いあつれき（不和）があった。したがって政治思想、道德思想はみずから発達したという。

孔子の言行録のなかに、法律的、政治道德的思想をうかがうことができるし、インドにおいてはシャカの出現により、宗教的見地より、がんこな階級制度を打破することを社会問題としている。

杉山 栄の『社会学十二講』（大正14・8）は、「旧社会学」の範ちゅうを脱して、「新社会学」について簡易平明にした入門書である。旧社会学とは、著者によると、社会現象を包括的に研究するものであり、一方新社会学は、特殊社会科学のひとつとして、「社会学」を建築しようとする試みである。その代表者は、ジンメル、テニス、フェアカント、マクキバア、高田保馬などである。

「新社会学」は、生まれてまだ日が浅いため、高田保馬の数種の書物、新進社会学者による論文や翻訳書をのぞくと、まだまとまった文献はないという。

内容の概略は——第一講 社会学と社会の本質 第二講 社会の構成と社会の種類 第三講 社会過程——其の一 社会の集積 第四講 社会過程——其の二 社会の分散 第五講 社会の統制——其の一 社会意識 第六講 社会の統制——其の二 社会運動 第七講 結合の強度 第八講 離反 第九講 社会と個人 第十講 社会の解体と持続 第十一講 文化——其の一 文化の発達と衰頹 第十二講 文化——其の二 都

市文化と村落文化 其の他——である。

著者はのべている。「^{いま}今までの社会学は、故郷を持たぬ放浪児のやうなものであった」と。社会学は、科学として形がととのっていなかったばかりか、その誕生がおそかった。ものごころがつく年ごろになって、周囲を見まわしたとき気づいた。

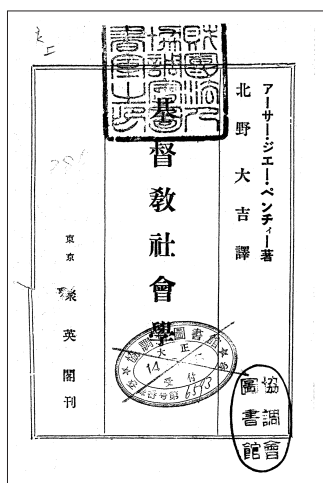
——すでに政治学、経済学、法律学、宗教学、倫理学、心理学その他の諸科学が、とくに根を張っていて、社会学のすわるべき^{せきど}尺土（すこしの土地）もないではないか。このときから、社会学の彷徨がはじまった。

ゆらい社会学の概念について誤謬が存在したという。社会学はときとして原始人の生活様式を研究するもの、またときに人類学、生物学、土俗学、社会政策論、社会主義、社会運動と誤解せられてきた。社会学が多様に解せられたのは、その研究対象である「社会の本質」がながいあいだあいまいであったからだとしている（一四頁）。

北野大吉訳『^{キリスト}基督教社会学』（大正14・9）は、イギリス人アーサー・ジェー・ペンチーが著わした『^{キリスト}基督教社会学にむかって』（Towards a Christian Sociology, 1923）を反訳したものである。

“^{キリスト}基督教社会学”といった名称は、われわれの耳目をおどろかしてあまりあるものだが、これはいったいどのようなものか。社会組織の原理と形式とを、基督教の原理に関係せしめようするのが、この語の意味のようだ。

科学万能の時代に——はたして科学は、人類の幸福のために用いられているか。科学と宗教、科学と芸術はいかなる関係をもっているか。科学は人類の生活にどのような害悪、呪詛（のろい）をあたえたのか。本書は、このような問題を提起している。



アーサー・ジェー・ペンチー著

『基督教社会学』

〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

内容の概略は——訳者序文 第一章 社会主義と基督教 第二章 社会主義と前進の

観念 第三章 神の王国 第四章 神の王国に於ける生活 第五章 律法の大なる^{かかれい}誠令

第六章 教会と共同心 第七章 教会と兄弟関係 第八章 法律の必要 第九章 中世

の社会組織 第十章 中世は何故に^{なぜ}衰微したるか 以下、二十二章までであるが省略する

——である。

原著者によると、“社会救济”の幾多の条件のなかに、社会改造が包含されているという。改造問題の研究には、二つ方法がある。そのひとつは基督教の方法によるも

のであり、もうひとつは社会主義の方法によるものである。

あらゆる社会問題についての思想は、けっきょくその根底をキリストとマルクスとの教義に置く、二つの対立した概念のあいだを動くものという。山口吉彦訳『社会学と哲学』（大正14・9）は、エミール・デュルケーム（一八五八～一九一七）の論文集“*Sociologie et Philosophie*, editeur Felix Alcan, 1924”を反訳したものである。

内容の概略は——第一章 個人表象と集合表象 第二章 道德事実の決定 討論 第三章 反对論に対する回答 一 社会状態と輿論状態 二 個人的理性と其道德的現実性 三 義務の感情と道德の神聖的性質 四 集合体の道德的威力 五 哲学と道德事実 第四章 価値判断と現実判断——である。

高畠素之訳『社会学講話』（大正14・10）は、アーサー・ルイスが著した『社会学への手引』（*An Introduction to Sociology*, 1919）を反訳したものである。

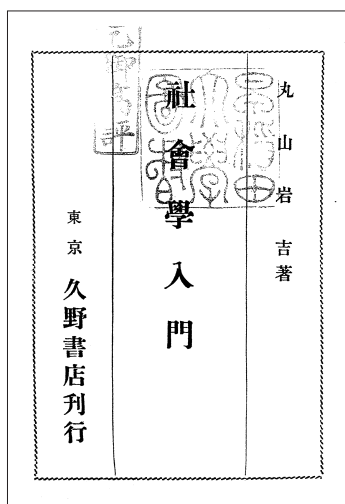
本書は、大学で社会学をまなんだことがない読者や、科学についてとくべつな訓練をうけたことがないひとびとのために書かれた通俗書である。いわば、読者を社会学の門に引きよせるのが本書の目的であった。

だからこの本は、社会学上の学説にたいして、あたらしい知見をくわえたものではない。社会学の起源や発達、社会学のいまの位置などについての一般的概念をあたえるのが、この講話の意図であったようだ。

内容の概略は——（訳者）序文 第一章 コントの人類発達説 第二章 コントの科学分類法 第三章 スペンサーの静的社会学 第四章 スペンサーの類推社会学 第五章 ラッセンホーファーの社会学 第六章 社会学史上に於けるマルクスの地位 第七章 社会学と社会科学 第八章 社会学と科学的研究方法 第九章 社会力 第十章 社会進歩の諸因子 第十一章 社会過程の要素 第十二章 社会進歩と間接的方法 第十三章 社会学の目的——である。

このうち社会学者として“黙殺”されたマルクスについての、原著者の意見を紹介しておこう。

これまで公けにされた多くの社会学史は、カール・マルクスの名を逸しているという。マルクスが社会学者として偉大であることを知っていても、かれの名に言及する者はすくなかった。しかし、社会学者のなかでアルビオン・ウッドベリー・スモール（一八五四～一九二六）だけは例外であり、マルクスの功績をじゅうぶんに評価したという。



丸山岩吉著『社会学入門』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

マルクスも、みずから社会学者であると称することがなかったことも、その理由のひとつとされている。マルクスの社会学は、労働問題の社会学といった見方もある。スペンサーは、原始的野蛮人の社会に、社会学の根拠をもとめた。しかし、マルクスは、社会的進歩の最終の産物である機械が、もっとも完全な発達をせしめていたイギリスの社会的形態とそのすじみちのなかに、じぶんの社会学の根拠をもとめようとした（七九頁）。

雑誌『社会科学』の十月特輯として、改造社から刊行された『形式社会学研究』（大正14・10）は、三五〇頁以上もあり、ゆうに一冊の書物ほどの厚さがある。高田保馬、新明正道、松本潤一郎など、社会学の第一線でかつやくしている学者ら十名の論文を掲載したものである。

内容の概略は——定型としての共同社会（高田保馬） 自然的社会と文化的社会（新明正道） 社会学に於ける文化の取扱（松本潤一郎） 発達諸段階に於ける社会の全体性（小松堅太郎） ウィーゼの関係学綱要（波多野鼎） 以下省略する——である。

近代において社会学は、どのような方向にむかっているのか。いかなる発展の経路をたどっているのか。新明論文によると、社会学のおもな傾向は二つとめられるが、それは自然的社会学（社会学そのものの発端が自然的であったことの意）と文化社会学であるという。さいきんではとくに、文化的社会学の勃興が鮮明になってきたとのべている。

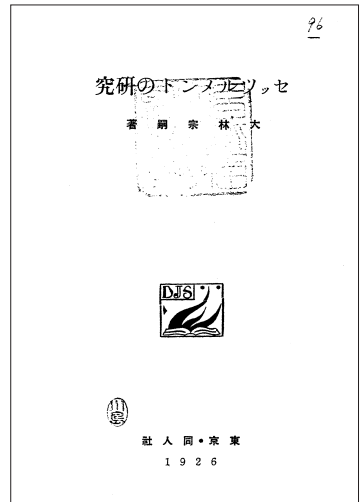
丸山岩吉の『社会学入門』（大正14・10）は、好書である。これまで世にでた社会学書の多くは、けっして読みやすい、しかも内容の理解しやすいものではなかった。それらの専門書の大半は、われわれの実生活とかけはなれた、はなはだ物憂い内容のものであった。

それらの社会学書は、いまの“生きた社会”をじかに、しかも具体的に、またできるだけ把握しようとはしなかった。その捉え方や叙述方法は、具体的でなく、はなはだ抽象的であり、かつ皮相的であった。

本書における著者のねらいは、まず直截簡明に、現代社会の諸相をみずから解剖し、それらを構成するさまざまな要素をえぐり出し、それを如実に描写することであった。

ついで現代社会の人生的意義を、その歴史のあゆみの上から本質的にとらえることであった。著者はかたっている。——この小著（とはいっては、三三四頁ある）は、できるだけ平明に、またできるだけ体系的に叙述しようとしたものだ。

著者は、社会学をわかりやすく説くことによって、“生氣ある社会学”に、英氣はつらつとした若い読者の胸に、ほんものの社会学にたいする興味と、“生きた社会”その



大林宗嗣著『セツルメントの研究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

ものにたいする理解の基礎をあたえようとしたのである。

専門書は、叙述が平明でない、われわれ読者はその書物をとって読みとおすことはできないし、活眼をもって身のまわりの“生きた社会”を理解することはできないのである。ともあれ、本書は社会学の初学者にとって、かっこうの入門書である。

内容の概略は——序論 第一節 個人と社会 第二節 社会の概念 第三節 社会学の意義及び傾向 第一章 社会の分析 第二章 社会の構成 第三章 社会の進化 結論 附録 研究資料に就いて——である。

著者、いわく。

——我々は社会のうちに生れて、社会のうちに生活して、社会のうちに死んで行く。社会は我々を育む揺籃（ゆりかご）であり、我々が活動する舞台であり、我々の足跡を永遠に刻する記録台である（第一節 個人と社会）。

われわれは、まず“家族”といった一つの社会に生まれ、社会によって育てられ、生長してゆく。社会とは、われわれを取りまいていて環境のことでもあるが、われわれはその中で“社会生活”を送っている。社会生活とはなにか。それになりたいする著者の答えは、こうである。

社会生活は、一定の土地のうえに成り、さまざまな物質を利用し、かついろいろの規則や制度によって統一され、支配せられている。これらの土地・物質・規則・制度といったものは、社会生活を可能ならしめている条件、すなわちその環境だという。いいかえれば、“社会の環境”とよぶものが、それだという。

松本潤一郎訳「社会学の沿革」（大15・1）は、エミール・デュルケームの筆になる小論「社会学」（La Sociologie）を反訳したものである。

この論文は、サン・シモン、コント、クールノー、スペンサー、タルドなどの特徴ある著述——社会学の発達において多少とも重大な新紀元を画するものとみなされる述作について論じている。

大林宗嗣の『セツルメントの研究』（大正15・2）は、大正十年（一九二一）四月に大原社会問題研究所叢書第三冊として刊行された『ソーシャル・セツルメント事業の研究』を改稿したものという。本書は、翻案的著述のような印象をあたえる。訳書をよんでいるような錯覚にとらわれるからである。

内容の概略は——第一編 緒論 第一章 セツルメントの意義 第二章 セツルメントの社会的基礎 第二編 セツルメント史 第一章 思想的背景 第二章 セツルメント運動の発生 第三章 事業の発達 第四章 米國セツルメント事業史 第五章 各國に於ける略史並^{なうじに}現状 第三編 セツルメントの構成 第一章 組織及事業 第二章 我國に於ける労働者教育の必要 附録——である。

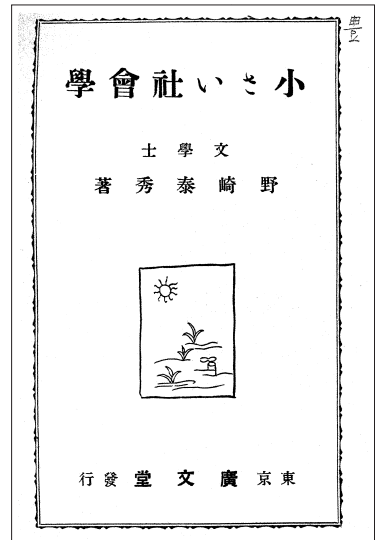
“セツルメント”(settlement)とはなにか。この語の日本語訳もさだかでなく、英語をカタカナ表記して使っている英和辞書はおおい。これは貧しい地域でくらすひとびとのために、生活改善や教育などにあたる意味である。著者(訳者?)によると、セツルメントは、欧米において七十年の歴史をもつ社会事業という。イギリスではこれを“social settlement”といい、それがなす事業のことを、“social settlement work”とよぶらしい。英語の settlement といった語は、ヨーロッパ各国ではどのように訳されているのか。いまドイツやフランスの例をにかけてみよう。

ドイツ
 { *Arbeitsgemeinschaft* (労働共同体)
Soziale Arbeitsgemeinschaft (社会共同体)
Volkshochschulen (民衆大学 成人講座)
 フランス *La Residence Sociale* (社会的居住地)

このセツルメントの思想とはなにか。著者のことばを要約すると、つぎのようになる。——個人的接触を通じて、労働者階級のひとびとの物質的、精神的要求をみたしてやること。“全人愛”をもって、かれらに教育や自己開発の機会をあたえてやること。ただし、優越者が下級者に恩恵をほどこすような気持をもたざること等々。

貧しい労働者は、社会人として生きながら、教育をうける機会にめぐまれなかった。かれらは政治上、社会上さまざまな権利をあたえられず、また富の分配の恩恵にも浴していない。かれらはたえず生活の脅威におびえながら、日本国民として重大なる責務を二つ負わされていた。それは何かといえば、——

納税
 と
 兵役



野崎泰秀著『小さい社会学』。
〔法政大学附属図書館蔵〕

であった。この二つは貧民労働者のところに重くのしかかり、かれらのところを暗くし、生への意欲をそいでいた。

セツルメントは、貧しい労働者に“生きるはり”をあたえる人道主義的な社会運動でもあった。

野崎泰秀の『小さい社会学』（大正15・4）は、著者が一昨年いらい、女子学習院において社会学を講義した“下書き”の一部を、なるべく簡略かつ平易に心がけて書きあらためたものという。

著者によると、さいきん社会学の著述の出版は、日を追って多くなってきたという。あまりにも学究的であり、またあまりにも浩瀚なものであるため、社会学の入門者にとってふさわしいものではなかったという。

著者が世に送りだそうとしている本書は、社会学をはじめて学ぼうとするひとびとのために書かれたものである。

社会学は、われわれが暮らしている“社会の本質”を科学的に研究するものという。——社会がどこにはじまり、どのような道程をへて発達してきたのか。また社会は、どのように組織され、どのように活動するものなのか。ことに社会の本質とは何なのか。

内容の概略は——第一章 社会学は如何なる学問であるのか 第二章 社会進化の理 第三章 社会の起源 第四章 社会組織の発達 第五章 文化財の発達 第六章 社会心意 第七章 社会秩序と社会統制 第八章 社会進歩と社会理想 附録 社会学研究参考書目——である。

ゆらい社会学の定義は、ひじょうにむずかしく、各人各様の説明をあたえている。いまここでは、社会学とは、社会についての科学である、としておこう。

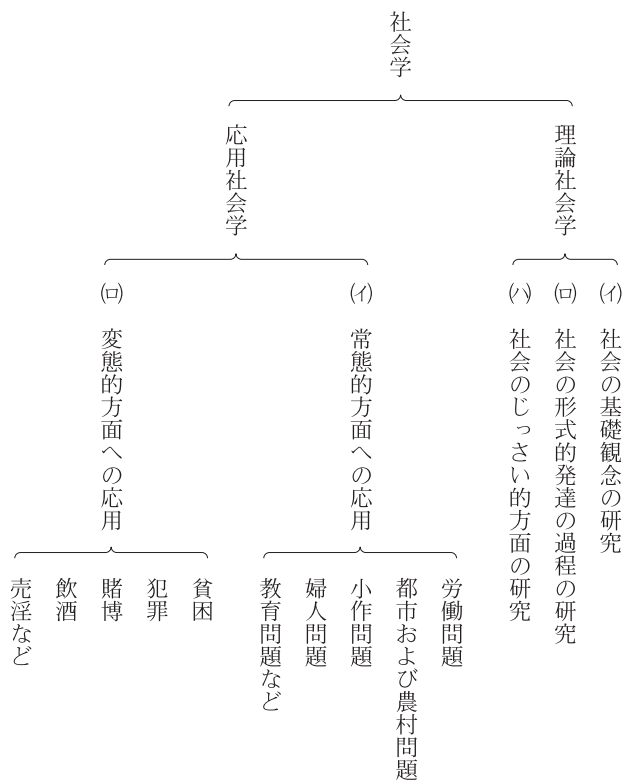
社会学の定義は、きわめてあいまいであるばかりか、その研究テーマ、その研究方法も確立されているわけではなく、研究者の意思にまかせられ、てんでんばらばらにおこなわれているのが現状である。しかしながら、社会学には“領域”（研究の対象分野）があるという。

社会学の領域についてのべると、一方に純理論的方面（理論社会学）があり、他方に応用的方面（応用社会学）がある。

著者によると、前者のしごとは、社会学の基礎観念を提示し、社会学研究の基礎をつくること。後者のしごとは、理論社会学の研究を借りて、

じっさいの社会問題を解釈しようとするものである。
すなわち、社会学を応用して、労働問題・婦人問題・宗教問題・教育問題の解釈をなし、さらに貧困・犯罪・賭博・飲酒・売淫などの諸問題にたいする解釈をほどこそうとするものである。また慈善事業、感化事業、セツトルメントといった社会改善にたいして指針をあたえることもこのなかに含まれるという。

社会学の研究目的やその領域をわかりやすく図解すると、左記のようになる。



永井享の『社会読本』(大正15・4)は、社会に関する一般むきの通俗本もしくは教科書のようにもみえる。著者によると、一般国民は社会の本体(実体、本質)に手をふれようとしないう。また社会の急所をつこうともしない。さらに日本社会の所在^{ありか}さえさぐる術も知らないとい

廢姓外骨序文
文學士二階堂招久著

初夜權

JUS PRIMAE NOCTIS の社會學的攻究

東京・上野 無名出版社 發行

二階堂招久著『初夜權—JUS
PRIMAE NOCTIS の社會學的攻究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

ともあれ、学歴はどうあれ、年齢はどうあろうとも、まいにち実社会ではたらし、新聞や雑誌をよんでいる人なら、ぜひこの本の読者となり、この書物をいっぺんは読んでおいてもらいたいという。

内容の概略は——第一課 社会の発見 第二課 社会の組織 第三課 社会の進化 第四課 日本の社会 第五課 理想の社会 第六課 社会問題 第七課 社会運動 第八課と第九課は、社会思想（上）（下） 第十課 社会政策——である。

著者のみるところ、日本は世界に類のない“国体”を有している。日本の皇室は、外国のどの王朝ともちがって、国民と合体している。いわゆる“君臣一体”もしくは“君民同治”といえるものがそれである。

明治の世となり、立憲君主制がわが国に確立されつつあるが、その完成を期するには、国家を社会化し、社会を民主化せねばならぬという。

こんにちの日本は、過渡期にあり、新旧左右の岐路のうえに立ち、まことにあぶなげな^{どうと}道途（みち）をあゆんでいるという。“社会問題”をかかえているが、それをどのように解決したらよいのか。

社会問題は、いかなる時代の、いかなる社会においてもかならず発生するものであろうが、もしそれが発生しないとしたら、それは社会秩序がわりに統一されているからだという。そのような社会で、個人の自覚や階級の意識といったものが生じると、革命的な変革がひきおこされるといえる。

著者の社会問題に関する解決策とは、どのようなものか。——その解決には、国家の社会立法の促成（早くつくらせる）と、社会運動のしつかりとした発達ということが、あいまってその対策になるという。問題解決のカギは、資本や企業の私営をやめさせることではない。

そうではなくて、資本家も労働者も産業を民主的に統制すること——すなわち、社会の民主的な統制ということである。

二階堂招久の『初夜權——JUS PRIMAE NOCTIS の社會學的攻究』（大正15・4）は、まことにユニークな書である。著者は東京高等工業学校を卒業したものであるが、せっかく修学した工芸に従事することがいやになり、文学方面に変わりたいとおもい、大正八年（一九一九）東京帝国大学文学部に入り社会学を専攻した。

“初夜権”とはなんのことか。その意義は、狭義においては、ヨーロッパ中世の封建諸侯が、配下の結婚にさいして、新婦と第一夜の“^{ユス・マリマエ・ノクティス}寝”をともにする特権をいい、広義においては、領主や祭司、僧侶といった権力者が、庶民の婚姻にさいして、新婦といっしょに寝る権利を指している。

初夜権の史実は、古くはヘロドトス（前五世紀、ギリシャの歴史家）やストラボン（前六四ごろ～後二一ごろ、ローマの歴史家）の記録にもあらわれているという。

内容の概略は——序論 第一章 初夜権の意義 第二章 各国に於ける初夜権の名称 本論 第一章 初夜権の史実 第二章 近代及現代に於ける初夜権の事例 第三章 本邦に於ける初夜権の事例 第四章 初夜権の起源に関する諸家の説並びに其批判 第五章 初夜権の起源に関する吾人の見解 第六章 初夜権の社会的効果 結論——である。

この卒業論文は、刊本となるまえに、東大で審査をうけたのであるが、戸田貞三や今井時郎から、近ごろまれに見る優秀なものだと、ほめられたということである。

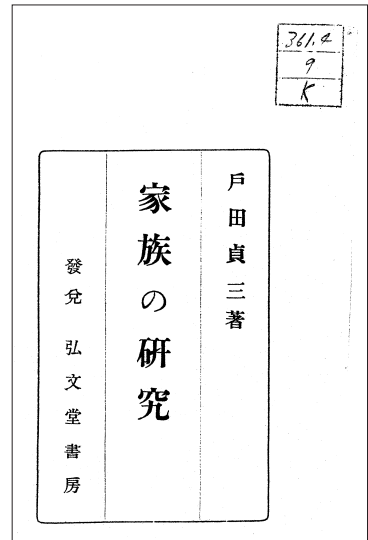
小田秀人訳『社会学の根本問題』（大正15・5）は、形式社会学の創始者であるゲオルグ・ジンメルが著わした『社会学の根本問題——個人と社会』（*Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, 1917）を反訳したものである。

内容の概略は——第一章 社会学の領域 第二章 社会的水準と個人的水準（一般的社会学 of the 例） 第三章 社交（純粹社会学若くは形式的社会学 of the 例） 第四章 十八世紀及び十九世紀の人生観に現はれたる個人と社会との関係（哲学的社会学 of the 例）

原著者ジンメルの考えによると、“社会”とはひとつの抽象にすぎず、その概念ははっきりしていない。そして、その社会で生起するさまざまな現象を究める“社会学”というものは、学として成立するものなのか。

学としての“社会学”の名称は、かならずしも無条件に認容される性質のものかどうかについて、ジンメルはうたがいをもっている。社会学にその領域をあたえるには、あまりにも“内容”が多すぎるのである。社会学は、基礎がすでに確立された他の諸科学と異なり、その存在権を証明せねばならぬ、不利な地位にあるという（七頁）。

松浦 勇、長谷川弥平、畠山弥栄蔵共著の『社会学要領』（大正15・5）は、長方形（たて十六・五センチ、よこ九センチ）の小著（一九〇頁）である。わたしは同書を、国立国会図書館で実見することができた。



戸田貞三著『家族の研究』。

「例言」によると、社会学は創唱者コント以来、日なお浅く、ようやくさいきんになって長足の進歩をみるけれど、まだ十分に発達をとげていないという。学者も、さまざまな方面から、さまざまな方法で研究しているが、まだ学問として、確定的な体系を具備していないという。

この点において、今後じゅうぶん開拓、究明する余地があり、また興味のある学問であるという。

社会学とはなにか。

それは人と人、人と社会との関係を研究する学問であると定義している。だから教育問題、社会問題、またさいきん世間の注視をひくにいたった国民道徳、公民教育とふかい関係を有している、と説いている。それゆえ、これらの基礎科学として、社会学を理解しておくことはひじょうに必要だという。

内容の概略は——第一編 社会学 第二編 社会の成立 第三編 社会形態 第四編 社会結果——である。

本書は、これまでの歴史哲学的、百科全書的な社会学を排し、さいきんの進歩にもとづく分析的形式的社会学を、系統をたてて、やさしく叙述し、その理路をさぐり、一般的概念をあきらかにすることに努めたという（「例言」）。

戸田貞三の『家族の研究』（大正15・6）は、これまでに発表した論文に多少字句の修正をほどこし、一書としたものである。人間はさまざまな集団や団体をつくっているのであるが、本書は、「家族」といった団体に焦点をあわせ、考察したものであり、戸田はわが国における家族社会学の創始者として令名がたかい。

本書は、家族というものの性質や特質を考究したものとしてみこんで、大正期を代表する独創的な論著といえる。

家族とはなにか。「家族」とは、ふつういっばんには、おなじ家に住み、生活をともにする血縁者、夫婦や親子を中核とする生活共同体の意である。が、著者は「家族は性的に差のある男女すなわち夫婦を構成員とし、年齢の異って居る親子を構成員とし、血縁的類似がきわめて強い所の同胞を構成員としている点において、他の一切の団体と異っている」とのべている（「緒言」）。

また著者によると、「家族なる団体」は、異性の成員の存在を必要とし、それを欠いては家族なる団体は成立せず、家族の成員が異性の男女よ

り成りたっていることは、自然に親子関係の発生となる。親子関係の発生は、血縁的類似のつよい同胞関係を惹きおこし、かくして家族は、血縁的連鎖のていどの強きものより成る集団となる、という。

家族の性質を明らかにするには、家族を“制度”としてみる方面と、これを“団体”としてみる方面があり、この両面から研究を重ねることが必要だとかたっている。

内容の概略は——一 家族結合と社会的威圧 二 夫婦関係の強さの測定（離婚に関する一研究） 三 日米両国に於ける夫婦結合の強さに関する比較 四 階級的内婚制に就いて 五 親子の結合に就いて 六 親子中心の家族の特質 七 家系尊重の傾向に就いて 八 家族的生活者と非家族的生活者 九 家族構成について——である。

親子の結合について、著者はこんなことをのべている。

人類、高等哺乳動物、群生動物は、親子同棲し、共同すること多く、親子なる者は、とくべつの愛着の感情をもち、それにもとづいて最もつよい結合をなす。親子の結合は、なんら他の感情を交えない、自然発生的な結合だという。

小栗慶太郎の『タルドの模倣論』（大正15・9）は、小著（二九〇頁）である。著者はタルドの“模倣説”（すべての社会現象は、模倣にもとづいている）を、圧縮し、平易に説いたものである。

内容の概略は——序文 第一章 社会現象と自然現象 第二章 普遍的模倣 第三章 社会的類似と模倣 第四章 模倣とは何ぞや 第五章 論理的勢力 第六章 論理的決闘と論理的交合 第七章 内部より外部への模倣 第八章 上層より下層への模倣——である。

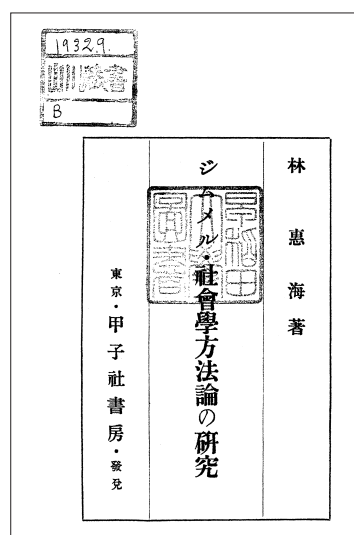
社会は模倣であり、模倣は一種の夢遊行病である——というのが、タルドのおもなる論旨であった。

タルドの見解は、つぎのようなものであった。——模倣こそ、社会の根本的事実であること。ある思想や行為についての模倣は、衝害がないかぎり伝播してゆく。このような現象の反復は、やがて現象の対立を生み、現象の適応に結果する。

社会の発達をあきらかにするカギは、現象の反復、すなわち模倣にある、というのがタルドの模倣説であった（「序」）。

林 恵海（えいかい）の『ジムメル・社会学方法論の研究』（大正15・9）は、学生時代に執筆した論文、『哲学雑誌』『社会学雑誌』などに発表したものを訂正、増補したり、新たに書きおろした幾篇かを加わえ、一書としたものである。

著者の研究活動は、ジンメル、デュルタイ、スペンサー、コントなどを中心とする学説史研究からはじまり、人口社会学・農村社会学へとむか



林恵海著『ジムメル・社会学方法論の研究』。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

ったのであるが、本書に収められた論文は草創期のものであろう。

ジムメルの社会学方法論の基本概念を構成するもの（距離説、形式、概念、空間など）について考察したのが、本書である。

内容の概略は——一 ジムメル・社会学樹立の構想の概観 二 ジムメル・距離説と其社会学方法論 三 ジムメル・心的相互作用・形式の純粹性 四 ジムメル・社会学と心理学及社会心理学との関係 五 ジムメル・社会認識論 六 ジムメル・社会的構成論 附録 ジムメルと其論作年表——である。

高田保馬の『社会関係の研究』（大正15・11）は、さいきんのドイツ社会学——とくに形式社会学ないしは関係論の影響のもとに私見を提示したものである。わたしが見たものは、津田左右吉（一八七三〜一九六一、大正・昭和期の歴史学者）の旧蔵本である。

ドイツの社会学界は、十九世紀のすえ、すでにジンメルやテニエス（Ferdinand Tönnies, 一八五五〜一九三六、キール大学教授、ドイツ社会学会長）らが、不朽の業績を生みだしていたにもかかわらず、学者の数や著書の数はいちじるしくなかった。しかし、第一次世界大戦の直後から、斯学に関する著述が活発になり、あたらしい見方がどんどん現れるようになったという（「巻の首めに」）。

内容の概略は——前篇 社会の概念 第一章 社会の本質について 第二章 社会の本質に関して（銅直学士に答ふ） 第三章 社会学の性質 後篇 社会関係の研究 第四章 結合の上位 第五章 定型としての共同社会 第六章 社会関係の研究 第七章 階級の自懷作用 第八章 結合と分離との関係——である。

“社会の本質”とはなにか。著者によれば、社会をして社会たらしむものが、それである。社会の本質をなんとみるかについては、学界においても定説がないという。

社会学の対象となるものはなにか。それは広義の社会現象一般また文化一般という。社会的行為または社会的作用をもって、社会学の対象をなすという。

また社会学とは、なんの学問か。これに答えて、それが“社会の学”というは、冗語に陥るという。

著者の立論の多くは、ヨーロッパの学者の説を大筋でとり入れ、かつ批判しながら、みずからの見解を組みたてていった感がある。著者は多く

の学説には通じてはいるが独創に乏しく、他人の学説に私意をくわえたような印象をうける。

下村利一郎訳『社会心理学』（大正15・12）は、イギリスの社会学者モリス・ギンズバーグ（Morris Ginsberg, 一八八九―一九七〇、ロンドン大学教授、イギリス社会学会会長）が著わした“*The Psychology of Society, 1921*”を反訳したものである。

訳者の“遺稿”を、一周忌にあたり刊行したものである。訳者は三高をへて、東大社会学科にまなんだが、大学卒業後、東北郡山の地で卒然として病にたおれたという。生前、東大講師藤田喜作に恩誼をかたじけなくしたというから、講義をきいたひとりであろう。

政治問題や社会問題に関する思索には、心理学的基礎をもたねばならぬという。政治・社会問題には、心理学的要素が作用しているから、社会心理学を樹立しようといった試みは、最近の産物であるという。

内容の概略は——原著者序言 序論 第一章 本能の一般的性質 第二章 社会に於ける本能 第三章 理性及び意志の役割 第四章 社会心又は集団心の理論 第五章 総体意志の概念 第六章 種族的及び国民的特質 第七章 伝統 第八章 共同社会・連合社会及び制度 第九章 群衆の心理 第十章 公衆と輿論 第十一章 組織及び民主主義の心理 結論——である。

＊

大正期の特質——赤化思想の進出とその運動。

大正とはどのような時代であったのか。この時代に刊行された社会科学文献を瞥見しただけでも、およそその風潮や時代的特徴の一斑を知ることができる。しかし、本当に知りうるには、その時代に生きてみなければならぬ。明治の時代が去ることによって、大正の国民はその時代の流れ、明治の末年の情勢^{（1）}を継承していった。大正の世となっても、社会は明治の遺風のなかで静かに、ときにけん騒をきわめながら時をきざんでいた。

大逆事件のあとさき。

霞ヶ関の大審院の赤レンガの建物の法廷に、幸徳秋水や菅野すが子、灘波大助らが立った。“幸徳事件”の公判がはじまったのは、明治四十四年（一九一）一月十日であり、同月二十四日には早々に市ヶ谷刑務所において十一名が処刑された。死刑が執行される二日前に、堺利彦、大杉夫妻、石川三四郎（一八七六―一九五六、明治から昭和期のアナキスト）は、死刑囚らとさいごの面会をした。

面会人はまず幸徳と会った。かれは綿入羽織を着、ひじょうに落ちついた態度で席にこしをおろしていた。堺利彦（一八七〇―一九三三、明治



堺利彦

から昭和期にかけての社会主義者、昭和四年東京市議となる）が口をひらいた。

——いまさら身体を大切にしろも妙なものだし、葬式をどうのかうのも変だし……。

幸徳は、にっこり笑って、いった。

——イヤぼくは非墳墓主義だから、からだは海川にすてて魚腹をこやすもよし、その点は諸君におまかせする。それよりか、諸君はさぞ事件のためにめいわくしてるだろう。ぼくは親もなくひとり身だから、覚悟はできてゐる。

ただ世間をさがせて、何とも申訳ない。幸徳という奴、どうしてあんなばかなことをやったかと、いまから十年二十年に思ってくれる者があれば、それでじぶんは満足する。

相被告のなかには、妻子のある者もある。君らはそれらの人たちに会って、一分間でもよけいに慰めてやってくれたまへ。ぼくのために時間を費してはわるいから、これでおいとましよう。

幸徳は、こういうと看守に連れられてドアの外にすがたを消したかと思うと、すぐツカ／＼とひきかえして、わ、わ、わ、の顔をひとりひとり、じつとみつめていた。無限の感がつづいた。お互のひとみは涙にくもっていた。

かれは思ひ返したのか、スタ／＼と出ていった。これが堺らが幸徳をみたさいごであった。……

二十五日の夜七時ごろ——堺らは絞びられた仲間の死体をひきとりに市ヶ谷刑務所にむかった。監獄の大門のあたりに、看守や巡査など、七、八十名が提灯を照らして警戒していた。

不浄門から柩がでてきた。荒なわで十文字にしばった棺おけを、四人の人夫がかついできた。「ギシ」「ギシ」といった音が、夜陰にひびいた。

……

棺のふたの上に、名前を墨書した十一の棺が、刑務所の門前にならべられたとき、さすがに胸がいっぱいになった。棺は、中野附近の火葬場にはこぼれ、茶毘にふされた。

難波大助も大逆をくだてた科で、大審院の法廷でさばかれた。かれは茶縞の袴（裏つきの着物）に、色あせた黒メリンスの兵児帯をしめ、素



大審院長・横田秀雄



主任判事・豊島直通

足にぞうりをひっかけ、やや大股にあるき、被告席にすわった。

頭はそのころ五分に刈りこみ、黒ぶちのめがねをかけていた。ときどき口元が、ピリ／＼とけいれんをおこした。足を無雑作にくんで、ときおり窓外の秋雨に視線を投げかけていた。……

これら二件の大逆事件をさばいた司直は、どのような人物であったのであろうか。

大審院（司法裁判所ちゅう最上級審の裁判所）の裁判長は、横田秀雄であった。文久二年（一八六二）信州松代藩士の家に生まれ、当時六十代であった。明治二十一年（一八八八）法科大学をでると直ちに司法省に入り、参事補をふりだしに判事となって、各地の裁判所につとめた。大正十二年（一九二三）大審院長・平沼騏一郎（一八六七―一九五二、のち近衛内閣の内相、敗戦後A級戦犯）が山本内閣の法務大臣に就任したとき、そのあとをついで大審院長の栄職についた。

性格としては、凝り性であつたらしく、いささかの事件にたいしても、いいかげんに片づけることをせず、書類に一応目をとおすと、綿密に研究し、のちことを断ずるといった風であつたという。東京近郊の裁判所につとめていた青年時代、紅灯の巷（花柳街）に足をふみ入れ、緑酒をくみ、公務のひまを盗んでは花柳界研究に没頭した。

“大逆”といった憲法発布以来の重大事件の主任判事となつたのは、豊島直通である。明治二十八年（一八九五）東京帝国大学を卒業すると、司法省につとめ、刑事訴訟法にかけては天下一品とされ、弁護士がへたなことでもすると、遠慮会釈なく、どなりつけた。チャキ／＼の江戸ッ子であり、司法官にめずらしい歌舞伎と音楽の趣味をもっていた。⁽²⁾

大正十二年（一九二三）六月五日——警視庁は治安維持法違反の科により、大ぜいの社会主義者や共産主義者をひっくくった。俗に“日本共産

党秘密結社事件」と称せられたこの一斉検挙の結果、多くの未決囚が市ヶ谷刑務所に入れられた。

同年九月二十日ごろになると、新聞報道がとぎれ／＼に監房内に伝わるようになった。

「大杉がやられた!」「野枝もやられた!」

「南葛で川合らが、七八人やられた!」

「××もやられた!」

この種のうわさは、誤びゅうに満ちたものであった。が、堺利彦は「大杉がやられた」といったニュースに接したとき、さすがに櫛の梶棒のようなもので、あたまを三つ、四つうしろからなぐられたような打撃をうけたとい⁽³⁾う。

さて、その大杉夫妻のことである。

同夫婦とおいの宗一の幽霊をみたという証言がある。府下代々木初台^{はつだい}(渋谷区北部の住宅地)に住む某が、『読売新聞』の記者にかたった話はこうである。

——わたしは毎晩、焼跡の仮小屋から代々木の宅に帰ってきます。先月十九日(大正12・9・19、大杉夫妻らが殺されて三日目——引用者)の晩は、帰りがおそくなりました。

ちょうど代々木初台の小泉少将のお屋敷のつひ手前にきますと、いやな子供の悲鳴がひと声しました。おやと思ひましたが、あとはしんとしてしまひました。するとこんどは向ふから洋装した男女が二人づれでやってきました。

女のほうが小声で、もしこのへんに子供がいませんでしたかと尋ねて行きすぎました。へんな気持がしましたが、そのまま帰宅しました。

それから三日の晩また帰りがおそくなりました。このまえのことなどすっかり忘れておりましたが、ちょうど同じ所にさしかゝるとまた、このまえと同じに子供の悲鳴がしました。からだがぞくぞくしてきました。ふと顔をあげると、目の前にまえの夜の通りの男女が雨にぬれて立っていました。

このときは、二人の顔がはっきり見えました。女は丸顔で口が大きく、男は目のぎよろりとした鼻下に短いひげがありました。

こんどもやはり女のほうが、もしこのへんに子供がいませんでしたか、と尋ねて、急ぎ足で行きすぎました。わたしはイエと答へて、なんとなく気味が悪かったので、一生懸命いそいで宅に帰りました。

まもなくそれも忘れていましたが、八日の新聞の号外の写真をひとめ見て、わたしはぎょっとしました。わたしに二度子供のことを尋ねた女に相違あ

りません。わたしにはどうしてもあの道は通れません（『読売新聞』大正12・10・13付）⁽⁴⁾。

*

皇嗣^{こうし}が天皇の地位をうけつぐことによって新たな時代の幕あけとされるが、そこには画然とした時代的な区分はない。前時代の形勢をそのままひきずって、時が静かにながれているだけである。

第一次世界大戦が勃発するまで、わが国は、明治の末年の社会情勢をうけついでいたのであるが、日本は連合国側に参加することによって、空前の輸出超過により、大きな利益をうることができ、多くの戦争成金を生んだ。しかし、戦争のさなか、物価の騰貴により一般大衆の実質賃金は、いちじるしく低下し、多数の国民は生活苦に呻吟するようになった。

社会主義者は、一連の大逆事件後、しばらく鳴りをひそめていたが、再起するあらたなうごきを示すようになった。かれらが勇気を出して立ちあがろうとする原動力になったものは、“ロシア革命”である。

一九一七年（大正六）の二月革命により、ロマノフ家の支配はたおれ、つづく十月革命によりロシア帝国は崩壊し、あらたにソビエト社会主義連邦共和国がつくられた。世界を動転させたこの事件のあたえた影響はきわめて大きかった。

共産的世界革命の思想は、ヨーロッパ各国にひろがったばかりか、共産国家による“赤化運動”の魔手は、わが国にもものびてきた。この“新思想”は、統治機関である政府にとって排斥すべき悪思潮——亡国的な思想⁽⁵⁾であった。

共産主義思想は、しだいにわが国の労働運動のなかに浸透し、その現われは大正七、八年（一九一八、一九一九）ごろの“米騒動”（全国で七十万人の民衆を動員した）、ついで労働・小作農争議となってあらわれた。大正十一年（一九二二）六月——「日本共産党」は地下でひそかに結成されたが、翌年六月には党员の大検挙がおこなわれ、政府は労働者や農民の“革命化”（赤化）を防止するために治安維持法をもって弾圧した。

ロシアから渡来した“赤い思想”にたいする反動的な運動がおこった。いわゆる国粹主義的なうごきであり、関東大震災がおこるまえに存在した。社会主義思想や労働運動の防波堤となった右翼団体は——国竜会・国粹会関東本部・大日本国粹会・大化会・大乘会・大正赤心会・大和民労会・赤化防止団・国本社⁽⁷⁾などであった。

いわゆる“大正デモクラシー”が、社会において展開するようになったのは、大正七年（一九一八）ごろからであるが、それは“自由”というものを標語としていた。が、こういった自由思想とはべつに、各大学や高等学校、高等専門学校などに、社会科学や経済学などを研究する団体ができ、しだいにマルクス主義を通して実践的活動に入ってゆこうとする傾向があり、文部大臣より社会主義思想を排除し、健全なる思想教育をおこなうよう内訓がだされた。

*

専制政府が政治情勢を安定させる有効な手段としたのは、民衆の思想統制や言論の圧迫である。そのため明治以来、集会条例・新聞紙法・ざん謗法（悪口をいうのを禁じる法律）・出版法などをもって弾圧をくわえてきた⁽⁸⁾。

出版社は、書物や新聞・雑誌などを刊行するさいに、当局に納本し、内務省警保局の担当官の検閲をうけた。もし提出された出版物が、皇室の尊厳を冒とくし、天皇制を否認したり、共產主義や無政府主義を鼓吹し、風俗を壊乱するものであったりするばあい、一部削除を命じられたり、まるごと発禁処分をうけた。

政友会総裁の原敬が首相になったのは、大正七年（一九一八）九月のことであるが、外国から入ってきた新しい思想にたいする政府の態度について言明した。「政府は建国の大本（国家存立の根本組織）にふれざるかぎり、そのすう勢を阻止する意思なし」とする、と。つまり、国体を否定するような記述がなく、社会の秩序を乱したり、突飛な変動をうながさないかぎり、マルクス思想や赤化思想などの伝播普及を阻止しないというのである⁽⁹⁾。

高島素之によると、とくに大正九年（一九二〇）の春以来——政府の施政方針が改まり、社会問題の取締りもひじょうに寛大になり、社会問題のなかに包含される一切の事実と思想との研究もやりやすくなったという（高島編『社会問題総覧』大正9・2）。

ここで注意せねばならぬのは、大正九年以降にみられる社会科学系文献の顕著な出版活動である。「爾来労働問題、社会運動などを標題とする著書が盛んに刊行される」ようになったという（前掲書の「序」）。

大逆事件後、社会主義や労働運動、さらにこれらの運動に関連した刊行物は、当局の弾圧の対象でもあったが、大正期になると一時ゆるらかになった。しかし、それもつかの間のことであり、昭和初期に赤化思想（共產主義）が台頭するようになると、ふたたび取締りが強化され、弾圧も

峻烈^{しゅんれつ}をきわめるようになってゆく。

*

大正期の社会学界。

大正時代はたしかに社会科学書を多量に生みだしたが、おもなる社会学の専門書にかぎっていえば、およそ百余冊刊行した明治期の比ではない。しかしながら、大正期（わずか十五年しかつづかなかった）には、目ぼしい社会学関連文献だけでも、八十余冊も出版されている。

大正期の社会学界は、明治期のそれとおなじように、まだ“翻訳時代”を脱しきってはいない。

明治の末から大正のころにかけて、わが国の自然科学界は、世界的な業績を生みだしたが、人文系はあまりふるわなかった。

社会学界においては、あいかわらず西洋崇拜、西洋依存の傾向がいちじるしかった。欧米の社会学者の研究書をあやしい語学力で翻訳し、刊行すれば、本人は得意顔となり、ひとかどの学者にでもなったような錯覚にとらわれたし、世間もまたすぐれたしごとをしたように思った。

このような謬想（おもいちがい）は、こんにちわが国の学界においていまだにみられる傾向である。わが国の社会学徒（わたしはあえて社会学者ということばを使わない）が、欧米の学者の論著を反訳してみたところで、せいぜい紹介者として名をとどめるにすぎず、その訳業は学問的な業績とみられることはない。なぜなら、原著は他人がかいたものであり、訳者じしんの述作ではないからである。東洋の孤島日本においてその著作を訳される光栄に浴したのは英米の社会学理だけにとどまらず、ヨーロッパ大陸の仏・独・伊の社会学説も翻訳紹介された。

明治期とおなじように大正期も、海外学説の輸入紹介が活発におこなわれた。

社会学関連の書物を著わしたわが国の学者や著述家には——樋口龍峽、遠藤隆吉、小河原忠三郎、高田保馬、建部遯吾、米田庄太郎、寒河江三郎、笠田長継、納武津、佐野学、土田杏村、小林郁、川辺喜三郎、新明正道、山田嘉吉、綾川武次、杉山栄、大林宗嗣、野崎泰秀、永井亨、松浦勇、長谷川弥平、畠山弥栄蔵、小栗慶太郎——などがある。

これらの著作物の特徴だが、ひっくるめていうことは、なかなかむずかしい。あるものは国内外の専門書をあつめ、それらに目を通し、器用にまとめたもの。あるいは欧米の研究書の翻案書のようなものが、はばを利かせていた。つまり、机のうえに西洋人が著わした書物を積みあげ、その中からこれとおもう記事をつまみ食いのひろい、それを綴合^{ていごう}したり、綴輯^{ていしゅう}（つづり集める）して、じぶんのことばに直してから原稿用紙の

うえに転写したものである。引証する所説は、ほとんど西洋の専門家の述作ちゅうにみられるもので、独特の意見はまったくなかった。

要するに、この種のいわば机上学者、書物学者がかいたものには、独自のあたらしい考えはみられぬため、一顧の価値もないものであった。おもうに真個（まこと）の社会学とは、“生きて、社会”を題目として、生きた研究をしている者のことである。かれらは目のまえの、現に生きている社会でおこっている諸問題に取り組み、その是正に挺身（¹⁰）している。

社会学は、その名がしめすごとく、じつに広汎なる学問であるばかりか、その実地応用の範囲もじつにひろく、小林照朗（東京女高師）は、“日本学院”の第二回大会（大正3・11・1）の開会の辞のなかで、斯学を“活学”とよび、また谷本富（京大）は“活きた物の学問”とか“活きた学問”と呼んだ。

谷本によると、社会学者は社会そのものを観るとき、“死眼”をもってしてはだめだ、社会そのものを活きたものとして捉えねばならぬ、と語っている（「活きた社会学」——「日本学院」第二回大会における講演）。

大正の日本社会学の一般的特徴は、欧米の社会学の専門書を反訳したり、それらを漫然と学んで血肉としたことであるが、学会発表などをみると、日本的テーマによる研究がないでもなかった。肝心な点は、社会学と己れとのかかわり——社会のいかなる問題に関心と注意をむけ、研究をおこなうかである。すなわち、何よりも重要なことは、問題の発見とその解決法であろう。ただまとまりなく社会学を学んでみても、真に得られるものはないからである。そして、人から学ぶだけではつまらない。

大逆事件のあと、“社会学”は“社会主義”と名称がよく似ているため、世間から誤解され、社会学を研究している、というと“主義者”とまちがわれ家宅搜索をうけることもあった。したがって、大正初期、社会学の研究はややもすれば萎縮（¹¹）していたという。

また大正三年（一九一四）第一次世界大戦の勃発により、欧米の社会学文献の輸入がしばらくとだえ、その状況が大正五、六年ごろまでつづいた。が、その後漸次（¹²）、著書や訳書があらわれるようになる。

日本の社会学史上、建部遯吾（一八七一一一九四五）は、斯学の発展に大きな足跡を印したことはまぎれもない事実であるが、当時はいとちがって学者のすくない時代であったから、大学を出て、洋行し、海外文献をしこたま仕込み、帰国後それらを種本にしてものを書きあらわしたり、あるいは海外の社会学説を翻訳紹介してみせつけておれば、いっぱしの学者として通用する、よい時代であった。

東大における建部の講義ぶりは、つねに謹厳であったという。かれはいつもフロックコートを着用して、教壇に上った。教師のなかには、じぶ

んを偉くみせつけるために、開講の初日に、暗記している西洋の詩文などを黒板にすらすらとかいて、受講生を呆然とさせたり、大言壮語をはく者がいるが、建部はみずからてらうタイプの人間であったようだ。

よく新人生にたいして、「社会学はコムトに創り、遯吾において大成す」と、えらそうなことをいってかれらを啞然とさせた。

建部は数十年にわたって、東京帝国大学の社会学講座主任教授として君臨し、いわゆる「建部時代」をつくり、後進の育成につくす一方で、じつに多くの著作をなした。ことに主著『理論普通社会学』（全四巻）は、かれの金字塔となった。松本潤一郎は、それを評して「国際的にも第二十世紀初めの社会学の代表的型式であると認めやう」と、賛辞をおしまない。

しかしながら、同書はほめことばと裏腹に、じつにわかりにくい書物なのである。才をてらい、奇を好むそのふしぎな文体。それはこんにちから見ると、日本語の悪文の好見本といえよう。

ともあれ自衒（じげん）（じぶんをみせつける）のきらいのある典型的教師であった建部は、大正十一年（一九二二）九月、社会学講座の拡張案が容れられず大学を去ってゆくのである。

とまれ、わが国の社会学は、大正十年代まで建部遯吾が主宰する東京帝国大学の社会学研究室を中心に発展していった。同研究室が、わが国の社会学界に覇をとなえたのは、じつに多くの研究者を輩出したからである。

だれにでも栄枯盛衰はあるものだが、明治三十年代から大正の十年代まで東大の社会学研究室に君臨した建部も、ついに凋落の運命をたどるにいたった。それは学問や文化がたえまなく進歩をつづけてゆくことの左証でもあるが、日本の社会学界は大きな転換期をむかえていたからである。当時、建部の有機体説をよりどころとする総合社会学にたいする懷疑と批判が生じ、社会学が心理学化し、社会学を個別科学としようといった傾向が支配的になってきていた。

心理学的社会学の立場において、「新しい社会学」の構想を示唆したのは、京都帝国大学の米田庄太郎であり、その成果は門下生である高田保馬の大著『社会学原理』（大正八年）によって大成した。

建部社会学がまだ盛んであったころ、おなじく外山の門下生であった遠藤隆吉（一八七四―一九四六、のち私塾「巣園学舎」を創設）は、在野の学者として、精力的に社会学書を著わしていた。遠藤は、明治三十年代に執筆活動をはじめ、それは大正・昭和期にまでおよび、亡くなるまで数十冊あまりの作品を書いた。



米田庄太郎

かれの社会学のテーマは、社会現象論にあり、その現象を心理学的に解明することが社会学のしごとであると考えた。また欧米の学者の論著をよむことによって、社会学は“人間結合（心理的结合）の学”⁽¹⁷⁾であるとし、その学説はたぶん心理学の傾向をもつものであった。

遠藤のほか、明治末年から小林郁^{かお}（一八八一―一九三三）が、社会心理学的研究や社会過程論の述作をつぎつぎと発表してゆき、また樋口秀雄^{ひぐち}（龍峽はその号、一八七五―一九二九）も心理学的社会学から出発し、のち社会学史の研究に関心をよせるにいたり、いずれもその研究成果を発表した。

さてつぎに、西のみやこに目をむけると、京都帝国大学には米田庄太郎（一八七三―一九四五）といった大家がいた。両雄ならび立たず、というが、建部が東の横綱なら、西の横綱は米田といったところであった。米田も草創期の日本社会学の建設に大きな功績をたてたひとりである。その生い立ちは、かならずしもめぐまれたものではなかった。かれは奈良の貧窮農家にうまれた。その生家は、被差別部落にあった。郡山中学から奈良英和学校にすすみ、キリスト教に入信し、卒業後アメリカに渡り、ニューヨークの神学校をへてコロンビア大学でギディングズに社会学をまなび、その後パリにおいてコレージュ・ド・フランスのタルドに師事した。

日本にいたら良師について社会学をまなぶことができなかったであろうが、かれは現地において当代一流の学者からじかに学ぶといった幸運にめぐまれた。

米田は海外の地に良師をえて、その薫陶をうけた。ことにひとときわすぐれた語学力は、有力な道具となり、海外の諸学説を習得するのにあずかって力があつた。かれはみずから原典をよくよむ。そしてその中味をよく吟味する。ついそれるをじぶんのものにすべく、よく消化する。

米田は海外のさまざまな学説を吸入同化したのであるが、純正社会学の中心がタルドやデュルケム、ジンメルにあることを強調した。そのためのちに形式社会学の研究や批評がさかんになった。⁽¹⁸⁾

社会学者としての米田の特徴は、学説史家にあつた。日本社会学の建設史上特筆に値する人物であつた。⁽¹⁹⁾しかし、欧米の学者の言説をよみ味わうあまり、独自の考えや意見がないことを指摘されたようである。つまり他人の学説はよく知ってはいるが、独自の主張や考え、すなわち独創性がないとの非難をうけた。



晩年のレスター・フランク・ウォード
 (『社会学雑誌』大正13・9)より。

米田は海外の最新の社会学説、社会思想、歴史哲学などを精力的にまなび、吸収し、紹介した。生涯に二十余冊の論著をあらわし、亡くなった。良師はかならずしも良き弟子を育成しないものだが、米田の門からは結合社会学——理論社会学の分野で懸隔した実力を発揮する高田保馬（一八八三—一九七二）が輩出した。かれは米田門下生ちゅうの異才であった。米田のもとで、タルドの『社会法則論』やグロップリの『社会学綱要』、ギイディングズの『社会学原理』などの講読の授業を一对一でうけ、卒論「分業論」（大正二年）をかいて京大を卒業すると、そのまま大学院に進んだ。

高田ははじめ「熱烈なる社会主義者として」⁽²⁰⁾大学に入学したのであるが、やがて主義の衣をぬぎすて、学業と思索に没頭した。かれもその師にまけず、じつに多作の学者であった。生前に三十数冊の書物をかきあらわした。

数多のその著作物のなかで、高田の名を高らしめたものは、厚さが箱枕^{はこまくら}ほどもある大著『社会学原理』（岩波書店刊、大正8・2）である。同書は、約一四〇〇頁もある書物であり、かれはこれを書きあげるのに数年の刻苦を経験している。しかし、この大部の書は、建部の『理論普通社会学』（全四巻）とおなじように、じつにのみずらい代物であり、悪文の好見本である。極度に抽象化された概念や意味のよくわからぬことが羅列されている。こんにち同書をおわりまで読むものは、おそらくひとりもないであろう。

高田は「社会の本質」を有情者^{うじょうしや}（心や情をもったひとの意か？）の結合とし、「社会学」は、人間結合の学であると断定した。⁽²¹⁾

高田は精力的な著作活動によって、コント流の建部社会学に取って代わった。建部にはもうかつての勢いはなかった。社会学研究のすう勢は、「個別科学的」な立場をとるようになっていた。建部の愛弟子の戸田貞三（一八八三—一九五五）は、のちに「家族」研究の第一人者となるのだが、かれも個別科学の立場を採用した。

明治時代もそうであったが、大正時代に入ってもわが国の社会学界は、海外の新理論、新学説の受容と紹介に忙殺されていた感がある。西洋の学説追隨の傾向はいっこうにすたれず、外国の新学説であれば、なんでも歓迎される時代であった。とくに大正期は欧米の学理の翻訳紹介がもっとも活発におこなわれた時期であった。よろこび迎えられた海外の有名無名の学者は、つぎのようなひとびとである。――

アレクサンドロ・グロップリ（伊）、レスター・エフ・ウォード（米）、シー・アール・ヘンダー

ソン（米）、ジェームス・キール・デイレ（米）、エドワード・アルズワース・ロックス（米）、ジョン・ヘンリー・ウィルブラント・スタッケンベルク（独）、アルバート・ガロウエー・ケラー（米）、アイ・エス・マッケンジー（米）、アーサー・ルイス（米）、ベンジャミン・キッド（英）、マックイヴァー（カナダ）、フランチェスコ・コセンチニ（伊）、シモン・ネルソン・パッテン（米）、ガブリエル・タルド（仏）、パウル・バルト（独）、エミール・デュルケーム（仏）、ルネ・ヴォルムス（仏）、レオナード・トレロウニー・ホブハウス（英）、チャールズ・エイ・エルウッド（米）、エンリコ・フェリ（伊）、ジョージ・ダグラス・ハワード・コール（英）、ウエルネル・ゾンバルト（独）、グスタフ・ラッツェンホーフ（オーストリア）、オット・フォン・ツィーデネック・スエーデンホルスト（独）、ハリー・エルマー・バーンズ（米）、フランクリン・ヘンリー・ギッディングズ（米）、アーサー・ジェー・ペンチ（英）、ゲオルグ・ジンメル（独）、モリス・ギンズバーク（英）など。

いま列挙した学者のうち、国別にわけていけば多いのはアメリカであり、ついでイギリスやドイツ、フランス、イタリアの順になっている。傾向的にみたばあい、なぜアメリカ人がかいた社会理論の翻訳がいちばん多いのであろうか。その理由は、おそらく社会情勢の変動にあるのではなからうか。すなわち、欧州大戦（一九一四―一八）が勃発したことにより、欧米における社会学文献の出版が低調になり、またヨーロッパからの刊行物の輸入がしばらくとだえたこと。またしだいに勢力をもってきたアメリカ社会学が見なおされ、書籍の輸入の便利さから、同国の文献を翻訳紹介することにわが国の学者の関心がむいたためと考えられる。

やがて大正の末期から昭和初期にかけて、わが国の社会学界は、ドイツの『形式社会学』（百科全書総合社会学に対抗して、社会学を特殊科学としてとらえようとする）⁽²²⁾に支配された。その形式社会学の洗礼をうけたわが国の大学人のなかには、東大の戸田貞三や林恵海^{えかい}、東北帝大の新明正道、関西学院の小松堅太郎、関西大学の岩崎卯一、大阪商科大学の関榮吉、在野の学者に杉山栄がいる。

杉山栄（一八九二―一九六八）は『社会学十二講』（大正十四年）を、林恵海（一八九五―一九八五）は『ジンメル・社会学方法論の研究』（大正十五年）を公刊した。林の述作は、形式社会学論のうちに、純正社会学を吟味したものという。ついで関榮吉（一九〇〇―一九三九）は、『社会学研究』（昭和四年）を著わした。

大正時代の日本社会学は、述作と翻訳とで勢力を二分しているが、わが国の社会学者は、ただ黙々として海外学説の焼^やきな^いおし^いや^い受け^い売^いりに終始していた感がある。つまり、欧米諸国の社会学者の意見や知識を、そのままじぶんのものであるかのような顔をし、同胞に伝えていたということである。日本の学者は、ひとを瞞着することにかけては、人後におちない。



晩年の若宮卯之助『富山大百科辞典 下巻』北日本新聞社刊、1994・8より。

社会学を個別科学とすることや理論社会学の分野で異彩をはなった高田保馬は、いたずらに西洋の学者の後じんを拝するをいさぎよしとせず、みずから独自の新社会学——これまでに類例のない理論的に透徹した社会学体系を完成した⁽²⁴⁾、ということだが、田辺寿利⁽²⁵⁾（一八九四—一九六二、フランス社会学史研究家）は、この点に関して疑問をいだいているひとりである。かれは高田社会学を評して、

——高田さんの原理を攻撃する訳ではないけれど、あれは西洋人のやった研究で、あれを外国語に記したら（反訳したら、の意。引用者）寧ろ西洋人の方が分るのではないかと云ふ疑点がある。併し時代から考へてそれは許せるけれども、今ではあういふ行方は許せぬのではないかと思ふ、……⁽²⁶⁾

と語っている。

おそらく田辺のいたかったのは、高田理論の欺瞞性であろうか。高田の学理は、一見すると模倣によらない、独創的な考えであるかのような印象をあたえるが、虚心に観察してみると、欧米の社会学論の焼きなおい——海外の学者の着想や形式をすこし変えて、あたかもじぶんの新作として発表したもののような感じがするであろう。

約言すれば、舶来の素材をつぎはぎし、私見をまじえて得意がっているというのであろう。さらに悪くいえば、放言のしほうだいといったところか。

しかるに大正十四年（一九二五）秋——第一回日本社会学会大会がひらかれる前後から、慶応義塾大学文学部講師・若宮卯之助⁽²⁶⁾（一八七二—一九三八）は、形式社会学の当時の傾向があまりにも日本社会のことを忘れて、点を指摘しつつ、日本の社会学者が独立の見地に立たず、固有の動機にもとずかず、「西洋人の研究だけに追隨して」いる点を批判し、論文「日本社会学の意義」（『社会学雑誌』第三十一号所収、大正15・11）のなかで、学者の猛省⁽²⁷⁾をうながした。

日本の社会学は、無問題に出發して、現に無問題に低回している。此の点に於て、日本の所謂研究と、西洋の社会学との間に、明かに一種の差異を見ることが出来る。西洋の社会学は、問題に始

ま、って居る。

若宮は若き日に、ワシントンD・Cにあるアメリカ・カトリック大学に在学ちゅう、ギィディングズやウオードの“アメリカ社会学”をまなんだものであろう。アメリカ社会学の特徴は、日常生活において生じた現実的諸問題を研究テーマとし、実証的なのである。

ところが日本の社会学の研究のやり方は、現実の生きた社会とのかかわりはほとんどなく、あらかた海外の理論研究が中心であり、現実から遊離したものである。社会学の本来の任務からいって、社会学は现实生活をはなれたところに存在しないのである（神永文三）。若宮が糾弾したかった点は、日本社会学が現実問題から逃避していたり、調査研究をおこなう動機のなさであった。

フランス、ドイツ、アメリカの社会学が、それぞれ社会的必要に刺戟されておこったのに反して、日本の社会学は社会とのふかい関わりや独自の視点をもたず、ましてや研究をはじめる意識的な理由もない。若宮はさらにかたる。

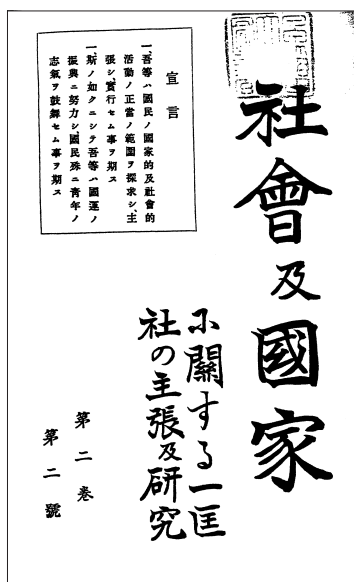
社会学の研究は、各国各々その特殊の出発点を持つのである。（中略）これに反するものは日本の社会学である。日本の社会学は、独立の見地に立たず、固有の動機に本づかず、特定の問題を把持して居るのでもない。

わが国の社会学界は、欧米の社会学を尊重し、それに依存し、「西洋人の研究だけに追隨している」だけで、現実の日本社会から目をそむけているというのである。

そしてわが国の社会学者（徒）がやっていることといえば、欧米の社会学理論をもてあそんでいるだけであり、せいぜいそれはお高くとまった概念あそびのためにおこなわれているにすぎないのである。

若宮によると、日本人は創見にとぼしい国民である。西洋を歌ひ、西洋を写し、西洋を焼直して生活しているのである（「日本は西洋のやうな文明国になれる乎」『若宮論集』所収、実業の世界社、大正5・5）。日本人は、西洋人が書いたものなら、一も二もなくあがめる、体質的な病癖があるということである。

ことばをかえると、日本の社会学は、高等遊民のための“遊逸（あそびたのしむ）の材料”になっているということか。明治期から大正期まで



無名氏「大学制度の改革に関する意見」を収録している雑誌『社会及国家』。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

の日本社会学の一般的な弊風といったものは、研究者が日本的な問題を取りあげず、日本的考察をおこなわず、ただ「西洋学説」を金科玉条のごとくありがたがっていたということである。

要するに、大正時代の日本社会学は、概して欧米の社会学の「亜流」であつたといえる。

*

閑話。

学問も教育も社会的現象のひとつといえる。大正期、各誌はときおり、大学教授論、大学論などをのせ、教育界の自覚をまとうとした。こんにち学問研究の中心は、いずれの国においても大学や研究所であり、そこでおこなわれるのがふつうである。が、学界がふるわないのは、大学の制度や大学教育の方法に重大な欠陥があるからである。このことは大正の時代も平成のいまも大して変わらない。

雑誌『社会及国家』（大正3・2）に、「大学制度の改革に関する意見」といった論文が掲載されているのがたまたま目にふれたので、その概要を紹介しておく。その内容たるや、こんにち的生命をもっており、参考や反省のよすがともなるものが多々ふくんでいるからである。

執筆者は官立の医科大学を出たのち、ヨーロッパに留学し、当時は病院長であつたが、匿名で寄稿した。

大正時代の大学教育の実状とその欠陥とはなにか。無名氏の答えはこうである。

——學術の研究という点からみて、いまの国立大学はきわめて不完全である。教授に眞摯（まじし）（まじめ、ひたむき）な学者がすくない。学生に研究の氣風がとばしく、制度がそれに適していない。若者は元氣に欠け、社会の空氣も沈滞しているから、まじめに學術を研究しようといった氣風が興らぬのは当然である。政府は官立大学に特殊の優越なる地位をあたえているから、私立大学は健全に發達しない。

純粹なる學術研究または學者の養成所として国立大学院を設置する必要があ。いまの大学院は、有名無実（名稱とじっさいとが合わない）であるから、

根本的改造が必要である。大学院として特別な設備なく、肝心の研究室もない。指導教授といっても、その多くはじっさいさしたる指導はできないし、じっさいしていない。毎年、大学一覽に教師の研究題目や教育科目が麗々しく記載されているが、それに相応する研究成果があらわれない（これはむかしもいまもまったく変らない——引用者）。

教授に適任者がすくない。教授の多くはあまり研究をしていないし、じっさい学生を指導することもしていない。研究的精神をもつ者はひじょうにすくない。学問の研究ということがまるでわかっていない。研究結果を世間に発表しているものは稀有である。

研究の結果、または研究の過程を講義している者はきわめてすくない。多くの教授は、毎年おなじノートをくり返して講義している（古本屋の主人が見たらおどろくほどの古物を朗読している——引用者）。教授のうちには、じぶんの専門の最近の傾向を知らぬもの、またそれに無頓着なものもある。

注・傍点は引用者による（以下おなじ）。

学生に研究的精神が欠けているのはなぜか。

——学生はただ講義を筆記し、それを試験前に暗記し、それを答案のうえに吐きだせばよいからである（学生は何の準備もなく、漫然と教室にやってきて、漫然として立ちさる。多くの学生は、単位だけが欲しいのであり、講義の内容にたいする興味もなければ、それを批判する能力もない——引用者）。教授のなかには小学校の生徒にでも課するような暗記の試験をおこなうものがある。学生はおよそ研究心に欠いているから、図書館や研究室を利用することはなはだすくない。いまの大学は、すこしむずかしいことを年老いた生徒に教える小学校にすぎない。こういった教授と学生から成りたつ大学が有名無実に陥るのは当然である。

教授はその地位に安心して何もしない。俗界の地位や名利をむさぼる傾向がある。学生は教授に学者としての価値があるかどうか問わない。学生は価値のない講義でもきかねばならないし、また無能力の教授にもつかねばならない。若いころ熱心な研究者であっても、年をとり、地位をうるにしたがつて研究心がなくなる教授はすくなくない。研究心がおこらないのは、学問は人から学ぶものだといった古い思想があるからである。

学校（大学）は、学者になるにしても実社会において活躍する人間になるにしても、その予備としての修業の場であり、じっさいの修練は卒業後にはじまることを多くの者は知っていない。

いまの私立大学は不完全である。

——私立大学は、いずれも大学とはいひがたい。どの私立大学も学術的方面からいえば、無価値、無能力といってよい。私立大学の卒業生が、学識において国立大学のそれに多少おとっていることは事実である。劣っているよりも、玉石混淆の度合がちがっていて、私立のほうは割合にくずが多いという方が適切である。優良なるものを比較すれば、その間にさしたる差別はないのである。慶応の理財科教授と国立大学の商科教授とくらべても優劣はないのである。

学術の研究所たる大学院の実をあげるにはどうすればよいか。

——大学院に教授を中心とする研究室を設ける。必要な設備をほどこす。教授はその研究室にいて、自己の研究に従事し、かつ学生を指導する。研究室本位の活動をし、講義本位にしないこと。学生の卒論、教授や学生の研究結果はかならず世間に発表するようにする。ふだん研究結果を発表しない教授は、教授として置かぬようにする。教授の地位は、学術上の研究を発表して、その力を世間にみとめられているものだけにかぎるようにする。

大学の内外でも、名義や称号や学歴をすてて、実力本位、人物本位にする必要がある。図書館を完全なものにする。官学とか私学といった偏狭な党派心をすてれば改革は容易である。学問も教育も、国民全体の事業である。

*

いまのべた無名氏の意見は、おおむね正鵠を射ているように思われる。平成のいまの時代は、ほんものの学者は払底しており、敬慕すべき真しな教師を捜すのが、じつにむずかしい。広い世間には、学究肌の人間はいるはずだが、ほとんどお目にかからない。むかしの先生は、えらかった。社会万般の事業が、学術のうえに立たねばならぬのに、現状はむかしもいまもすこしも変わっていない。

学部教育や大学院教育は、健全におこなわれ、それなりの実をあげているのか、と問うと、あやふやな返事しか返ってこないのが実状である。人を育てるのは、制度、設備、教師であるとすれば、せめて教授の任用はきびしく、恥しくない学業績をもつ人物をその任につかせるべきである。わたしなどは、ひとがどんな学校を出ていようと、その者がちゃんとした専門書（単行本）が書けるかどうかで判断している。

世間は人が社会的評価のたかい、有名大学を出ていれば、その者はりっぱな人間、学力もすぐれ、人格もすぐれているといった謬想をいだくが、

わたしはその者がじっさいに、え、た、結、果、に、よ、つ、て、し、か、評、価、し、な、い。じっさいの学力の優劣や人格の高下は、学歴のよしあしとそれほどふかい関係があるとは思えないからである。

こんにちの国立大学の事情にはくらしいが、私、立、大、学、に、お、い、て、真、剣、に、研、究、や、教、育、に、取、り、く、も、う、と、い、つ、た、気、風、が、な、く、頭、著、な、業、績、が、あ、が、ら、ぬ、の、は、一、つ、は、昇、格、審、査、の、あ、ま、さ、(じゅうぶんな業績や、専門書がなくても教授になれる)と終、身、在、職、が、保、障、さ、れ、て、い、る、か、ら、で、あ、る。なにもせず、遊んでいても月給は保障されているからである。昇格審査は、身内がおこなうと、採点があまくなりがちであるから、むしろ第三者機関において、きびしく、厳正にやってもらうべきであろう。

二つには、雑用(各種委員、会議、その他)が多く、落着いて研究に従事できないからである。

また大学院の授業を担当する人間には、専門書が何冊もあるようなちゃんとした業績をもつ、世間がみとめる第一級の人物を当てるべきであり、担当者がこの条件にかなわぬとしたら、その者は大学院の授業を遠慮すべきである。ちょうど日清戦争まえに、海軍主事・山本権兵衛(当時、大佐)が凡骨将官九十六名をすべて首にしたように、人、事、を、大、刷、新、す、べ、き、で、あ、る。

なぜなら欧、米、の、大、学、教、授、は、ほ、と、ん、ど、皆、著、書、(単、行、本)が、あ、る、の、が、ふ、つ、う、で、あ、り、²⁷またつねに間、断、な、く、論、文、を、発、表、し、て、い、る、か、ら、で、あ、る。元氣旺盛であった時期に研究活動したにせよ、老、い、て、勉、学、の、氣、力、が、う、せ、た、と、き、は、勇、退、す、べ、き、時、で、あ、る。とくにいまの時代、高給を食み、勉強もせず遊んでいることは許されない。

要は、大学院は最高の設備と超絶した実力をもつ最強の教員チームでつくり上げるべきであり、けっして見かけ倒しにおわらぬよう、りっぱな実をあげるよう鋭意つとめねばならぬ。

さいごに、い、う、この私立大学も、経営至上主義であり、表面上はもっともらしい教育理念や理想をかげているが、じっさいは商人が営利会社を営んでいるのと何らかわらず、教育や学術研究は第二義的になっている。私、立、大、学、と、い、え、ど、も、本、来、学、術、を、も、つ、て、世、界、に、打、つ、て、出、な、く、て、は、な、ら、ぬ、の、に、世、界、に、通、用、す、る、成、果、は、な、か、な、か、生、ま、れ、ず、ま、つ、た、く、大、学、の、実、質、を、備、え、て、い、な、い、の、が、現、状、で、あ、る。

*

つぎに大正期の社会学界の動向を、ひとわりながめておこう。

大正時代、比較的設備がととのっていたとおもわれる東大の「社会学研究室」(明治三十六年〔一九〇三〕三月開設。その所在地は、はじめ法文科大学研究室的の西北隅にあったが、のちに法文科大学本館の楼上東南隅室に移った)は、大正十二年(一九二三)九月の大震災によって、一瞬にしてあとかたもなく焼失した。

研究室の創設当時、どのような文献があったものかわからぬが、社会学ならびに斯学関連の和書としては、明治期のものも相当あったのではないかと想像される。が、惜しいことに大震災によって、研究室にあった三千にもあまる貴重なる文献は、すべてうしななったという。

しかし、住居をうしななった社会学研究室は、心理学研究室の一部に定住することになった。文献をことごとくうしななった研究室はどみじめなものはないが、五年たつたいまでは、

社会学関連文献……………一二〇〇部

資料(どんなものか不明)……………五〇〇部

海外のおもなる社会学のバックナンバー和洋雑誌……………二〇種

を所有するまでになったという(「東京帝国大学社会学研究室創立二十五周年記念会記事」『社会学雑誌』第四八号所収)。

いうまでもなく、人文科学の研究をおこなうには、文献資料がないと、万事お手あげなのである。できれば筋のよい原史料をもちいる機会と能力があれば、鬼に金棒、もっともたしかな研究ができる。

——官立・私立の諸学校における社会学教育ならびに各学会の概況

○東北帝国大学 同大学の社会学講座が開設されたのは、大正十四年(一九二五)八月のことである。担当者名と科目名・時間数は左記のとおりである。

(大正十四年)

鈴木宗忠教授	社会学	二
河村又介教授	社会学講読	二
服部英太郎助教授	社会運動史及社会政策	三
鈴木義男教授	社会的立法論	二
和田佐一郎教授	社会統計論	二
鈴木敏一講師	社会統計数学	一

○東京帝国大学

大正元年から同十五年にかけての同大学の社会学開講は、つぎのようであった。

(大正元年度)

〔講義担当者〕	〔講義題目および時間数〕
建部遯吾教授	社会学原論序論 一、同本論 二、教政学各論（宗教行政、美術行政、学術行政） 二、演習 A. Comte : <i>Discours sur l'Esprit positif</i> 一
有賀長雄講師	「最近五十年間欧米各国の政治史上に現れたる社会問題」 二
藤井 講師	「族制の発達」 二

(大正二年度)

建部遯吾教授	社会学原論 四、教政学各論（国語行政、礼儀行政） 二、演習
--------	-------------------------------



建部遯吾教授

有賀長雄講師……………「国際関係と社会問題との史的研究」二
竹下清松講師……………「社会学研究法としての理論統計学」二

(大正三年度)

建部遯吾教授……………社会学原論 四、教政学各論(風俗行政、教導行政、变的教化行政) 二、「社会問題と現代文明」二
有賀長雄講師……………「三国同盟以後の世界外交と社会勢力」二
小林照朗講師……………演習 Durkheim : *Les règles de la methode sociologique* 三
(東京女子高等師範学校教授)

(大正四年)

建部遯吾教授……………社会学原論 四、特殊講義(社会進化論) 二、教政学講義、演習——一学年間に左記の洋書をわりあて、これにたいする論評を提出させるもの。
(一) Comte : *Discourse on the Positive Spirit*.
(二) Loria : *Die Soziologie. Aufgaben der Soziologie*.
(三) Baldwin : *Development & Evolution*. p.50~195
(四) Ward : *Pure Sociology. Social Statics*. p.169~220
(五) Stein : *Soziale Flage im Lichte der Philosophie. Umriss einer Geschichte der Sozialphilosophie, bis Staatsromane*.

p.145〜235

- (六) Giddings : *Inductive Sociology. The Consciousness of Mind. The Conserved Volition.* p.91〜181
- (七) Spencer : *Principles of Sociology III. Ecclesiastical Institution.* p.3〜175
- (八) Sumner : *Folkways. Fundamental Notions.* p.1〜74
- (九) Avedbury : *Marriage, Totemism and Religion. Marriage.* p.1〜85
- (十) 建部、世界列国の大勢

講義「社会学原論」は、ノロノロ筆記になれた受講生にはかなりきついものであり、急いでノートをとる必要があった。「演習」は、一月下旬および二月上旬に、てきぎ時間を設けて三回ほどおこなった。右にかかげた九冊の原書は、つぎの要項について演習した。(イ) 該著者の著書全般における該著の地位(ロ) 該著全体の構成および該著における該部分の地位関係(ハ) 該部分の発現(ニ) わたし(建部)の見解との比較論評。(ホ) 全篇について著者の用いた方法を看取し(見てとる)、著者の国勢消長(なりゆき) 観を攬要す(要点をぬきとる)。もし批評をくわえらとさらによい。提出期限をもうけない。

演習は、二年生および三年生に課した。学生は二週間に一回レポートを提出せねばならなかった。原書を苦勞しながらよみ、それを批評するのであるから、相当の努力を要するハードな科目であった。卒業論文に費やす努力以上に骨のおれるものであったらしい。

東京帝国大学の社会学専修学科は、時勢の進運(進歩)にともない大正五年(一九一六)九月より、教則の改正を断行した。そのねらいは、学生に力をつけさせ、国家の須要に応じるために、学習の教程をたかめ、研究の造詣をふかめるためである。そのため学習の自由、授業の自由が拡大された。

社会学専修学科のあたらしいカリキュラムは、左記のようなものであった。いま「必修科目」だけをしるす。

必修科目				
英	独	仏	語学	第一年
四	三	四		
			社会学原論	
			心理学概論	
			倫理学概論	
			東洋哲学史概論	
			西洋哲学史概論	
			哲学概論	
				三年
英	独	仏	語学	第二年
四	三	三		
			社会学(甲)	
			教政学	
			理論統計学	
			民族心理学	
			社会学演習	
			備考 社会学(甲)(乙)	
			二年(乙) 第三年(甲)	
			ハ隔年遞出(かわる)スルヲ以テ第	
			ニ場合モアリ 甲乙計五単位必修	
			卒業論文	第三年
			社会学(乙)	
			社会学特殊講義	
			社会学演習	
			社会学史	
			優生学	

語学は、英独仏のうちから一つ、二ヶ年間毎週三時間か四時間履修した。

(大正五年)

建部遯吾教授……………社会学原論 四、特殊講義（社会進化論） 二、演習（用書は左記の二種）

Comte : *Discourse on the Positive Spirit* (英仏書両用)

Comte : *General View of Positivism* (英書)

[illegible]

桑田 講師……………優生学および理論統計 二、民族心理学 二

建部遯吾教授	社会学 二
新渡戸教授	社会政策 二
金井教授	社会政策 三
小林照朗講師	社会学史（コムト以後現代まで） 二
桑田 講師	優生学および理論統計、民族心理学 二

法科大学では――

建部遯吾教授	社会学 二
新渡戸 教授	社会政策 二
金井 教授	社会政策 三

（大正六年）

建部遯吾教授	社会学原論 四、教政学 三、純正社会学提要 一、演習（コムト「実理思想 <small>えんぎ</small> 衍義」）「説をあかしたもの」およ びプリストル「社会応用論」 研究問答 随時
小林照朗講師	演習（タルド「社会理法論」） 講読 二
角田豊治朗講師	理論統計学およびその社会学における応用 二

法科大学では――

建部遯吾教授	社会学 二
金井 教授	工業経済および社会政策 三

(大正七年)

建部遯吾教授……………	社会学原論 四、教政学 三、純正社会学提要 一、演習(コムト「実理思想衍義」およびブリストル「社会応化論」研究問答 随時
小林照朗講師……………	演習(タルド「社会理法論」)講読 二
亀田豊治朗講師……………	理論統計学およびその社会学における応用 二

法科大学では――

建部遯吾教授……………	社会学 二
金井 教授……………	工業経済および社会政策 三

注・大正八年度については不明。

(大正九年)

建部遯吾教授……………	(社会学?) 研究法、史論、演習 三、特殊講義(「国是調査定立の方法」) 一
小林照朗講師……………	Comte : <i>Discours sur l'Esprit positif</i> の講読批判
亀田豊治朗講師……………	応用社会学綱要 二
今井時郎講師……………	理論統計学および演習 二
(同年八月、露米四ヵ年半の留学より帰朝)	「最近露国社会変動の因由(原因)および経過」 三
桑田助教……………	民族心理学 三

注・この年の社会学科の学生数は四十七名(正科学生三十名、選科学生十七名)であり、主位のイギリス文学科をぬいて一位になった。⁽²⁹⁾

(大正十年)

建部遯吾教授……………社会学序説(甲二)、教政学(甲四)、社会学原論(乙四)、具体的進化(乙二)
今井時郎助教授……………「米国の人種問題」(甲四)、社会誌学概論(乙四)、社会問題演習(乙二)
小林照朗講師……………社会学史概観 二
藤田喜作講師⁽³⁰⁾……………社会問題大意 二
(同年三月に就任)
竹下清松講師……………理論統計学 二

なお戸田貞三講師は、ヨーロッパ各地を巡歴研究中であり、遠からずイギリスに駐在研究のうえ、明年春帰朝の予定であった。東大における社会学科の学生数は、前々年度の三十四名より、前年度の四十七名にふえ、今年度(大正十年)はさらに激増し、八十一名になった。大正十一年にはさらに増えて、学生数百三十九名をかぞえた。これは文学部学生総数の約四割をしめた。

(大正十一年)

この年と翌大正十二年の講義担当者、講義題目、時間数についてはよくわからない。この年にいわゆる「建部辞職事件」がおこっている。「時勢の斯学科に対する要求の熾烈なるは、何人の注意をも脱すべからざらむ⁽³¹⁾」と、建部みずからが語っているように、東大社会学科への入学希望者は、としごとにふえつづけたために、社会学第二、第三講座の増設は焦眉^{しやうび}の急であった。

主任教授の建部は、文科大学教授会に増設を大正八年五月正式に提案し、二十五票ちゅう二十三票の大多数にて可決していた。が、大正十一年文学部教授会は、『緊縮主義』をとっていたため、同年六月十四日の教授会で否決されてしまった。教授会の欺まんに怒った建部は、ただちに退席すると、「病弱重任に堪へざる放を以て」辞職願をその筋に提出すると、午後四時をもって社会学研究室をしりぞき、七月九日東京を去り、郷里の新潟へかえってしまった。そして九月五日、依願免官となった。

建部の辞職後、社会学研究室は、教授不在であったために、松本亦太郎教授(心理学)が主任に補された。その後、社会学科はしばらく「教授不在」がつづいた。

戸田貞三助教授……………社会学概論、演習？



晩年の藤田喜作（藤田龍二氏提供）



晩年の戸田貞三

法科大学では、建部に代わって上杉慎吉教授が『社会学方論』を担当した。

（大正十三年）

戸田貞三助教授……………社会学概論 二

演習 Park & Burgess : *Introduction to the Science of Sociology* 二

演習 Toennies : *Gemeinschaft und Gesellschaft* 一

（大正十一年九月欧米留学より帰朝、十月より第一講座担当）

今井時郎助教授……………演習その他？

（第二講座担当）

小林照朗講師……………演習その他？

（大正十二年一月中旬―福岡県立女子専門学校校長として赴任）

綿貫哲雄講師……………演習その他？

（大正十二年三月、あらたに講師を嘱託される。同人は東京高師教授）

藤田喜作講師

（社会問題研究のため、欧米に在外研究に従事する）

竹下清松講師……………理論統計学および研究

今井時郎助教授……………社会誌学概論 二

露西亜社会誌 二

演習 Summer : *Folkways* (‘習俗、の意’) 二

竹下清松講師……………統計学 二、数理統計論 二

綿貫哲雄講師……………社会過程 二、演習 Vierkandt : *Gesellschaftslehre* 二

注・藤田喜作講師は、同年八月留学をおえてドイツから帰朝し、十月末より東大、法大で開講した。

(大正十四年)

戸田貞三助教授……………家族 二、演習 Trotter, W. : *Instincts of the Herd in Peace and War*. Kistiakowskith : *Gesellschaft und*

Einzelwesen 二

今井時郎助教授……………社会学概論 二、露西亜社会誌 二、演習 Summer, W.G : *Folkways* 二

綿貫哲雄講師……………社会意識 二、演習 Vierkandt, A : *Gesellschaftslehre* 二

藤田喜作講師……………社会と国家 二、演習 Kelsen, H. : *Der soziologische und juristische Staatsbegriff* 二

(大正十五年)

戸田貞三助教授……………社会学概論、社会学演習 V. Wiese : *Allgemeine Soziologie*

今井時郎助教授……………露西亜社会誌、社会誌学概論、社会学誌演習 Summer : *Folkways*

藤田喜作講師……………社会と国家、社会学演習 Maciver : *Community*

綿貫哲雄講師……………社会学威圧、社会学演習 Vierkandt : *Gesellschaftslehre*

竹下清松講師……………統計学とくに数理統計論 (統計曲線論に及ぶ)

○京都帝国大学

大正三年から同十五年にかけての社会学開講は、つぎのようであった。

(大正三年)

〔講義担当者〕

〔講義題目および時間数〕

米田庄太郎講師……………

社会学概論 一、特殊講義「輿論の研究」(第一学期)、「疾病と社会生活」(第二、三学期)

演習 R. Stammler : *Wirtschaft und Recht* 二、講読 A. Maigrin : *La Psychologie sociale de G. Tard, Urwick : A*

Philosophy of Social Progress

高田保馬講師……………

Gide : *Principes d'Economie politique*

(法科大学)

* ルドルフ・シュタムラー (Rudolf Stammler, 一八五六―一九三八) は、ドイツの新カント主義的法哲学者である。演習では一週二時間、二十頁

以上素読した。演習室では、大要をのべ、要点を翻読し、内容を批評した。内容は難解につき、受講者はそれを理解するのにずいぶん苦しんだ。

** 仏書のはうは、一週二時間、十頁以上すんだ。英書は一週一時間、一学期ごとに読了した。

(大正四年)

同年の社会学関係の授業の担当者および講義・演習の詳細については不明である。京大における社会学の講義および演習は、学内のどこでおこなわれたものか定かでない。「読書会」は、はじめ米田講師の私宅⁽³³⁾でおこなわれたが、のちに主として学生集会所が用いられた。読書会における発表がおわると、それになりたいする批評と論駁^{ろんぱく}(相手の説にたいして論じ攻撃する)がおこなわれ、ときに卓をともし、炉をかこんで談論風発、夜がふけるのに気づかないこともあった。

読書会の例会は、左記のとおりである。

大都市の発達とその意義

十月二十二日

山口正

都市教会と犯罪問題

十一月二十六日

篠田霊音

客観精神と民族心理学

十二月九日

田村恵寛

〃

一月二十八日

同右

カントの法理学

二月十八日

山口正

(大正五年)

米田庄太郎講師

純正社会学概論、タルド、デュルケームおよびジムメルの社会学、民族心理学

“純正社会学概論”は、ふつうの講義である。学問論、方法論について語ったのち、社会現象の概念に入る。“タルド、デュルケーム、ジンメル”は特殊講義である。おもにタルドの伝記や性格をへて、その哲学的原理にいたる。“民族心理学”は、その創設についてかたり、ラッアールス、シタインタールの貢献についてのべる。

同右

演習 Wundt : *Element der Völkpsychologie*. Durkheim : *Division du Travail sociale*. Giddings : *Principles of*

Sociology. 講読 Keller : *Societal Evolution*.

法科大学において――

米田庄太郎講師

現代哲学者の社会問題論

読書会および懇親会において。

犯罪人型

四月二十八日

榊尾密道

Nationality and Government

五月十九日

大沢鷺雄

(嵐山懇親会)

六月二十七日

女に子を産ます政策

〃

米田庄太郎

社会結合の形式に就て

九月二十八日

高田保馬

The Modern City and its Problems

十月二十六日

森賢隆

満朝視察談

〃

守屋徳夫

(大正六年)

米田庄太郎講師……………特殊講義「デュルケーム」の社会学、講読 Giddings : *Descriptive and historical Sociology*, 演習 Wundt :

Völkerpsychologie.

この年の演習・講読等は、予定どおりの進行をなし、佳境にはいったという。読書会のほうは、米田庄太郎・高田保馬などから発表者にたいして質問の矢が放たれ、油をしぼることはなはだしかったという。

読書会の例会は、左記のとおりである。

人類系譜の地質学的研究

十一月十六日

敵西真集

Daprat : *La Psychosociologie de la Guerre* (La Revue Internationale de Sociologie Oct. 1916)

十二月十四日

銅直勇

Aboriginal decay in the Pacific Ocean (Prof. J. Macmillan Brown)

一月二十五日

守屋徳夫

Crime and Criminals (Osborne : Society and Prisons)

二月十五日

梅尾密道

社会化サレタル法律ノ必要

三月十五日

大沢鷲雄

読書会は毎回議論百出して尽きることはなかった。守衛の警告、あるいは集会場の消灯におどろいて、散会するのをつねとした。第二学期はこうのようにすぎ、第三学期に四名の学生が入ってきた。すなわち——査沢吉太郎、円谷弘、林田太平、馬場剛などである。

社会と個人

四月二十七日

査沢吉太郎

(ボルキドン氏の人格発達論の紹介)

戦争と民主的国家

五月十八日

円谷弘

(ミズリー大学教授・ベルナルド氏の“*War and Democratic State*”という論文の紹介)

(大正七年)

米田庄太郎講師……………講義「Dulkeimの社会学」、講読 Giddings : *Descriptive and historical Sociology*. Wundt : *Völkerpsychologie*

講義において、米田は道德現象・宗教現象・自殺等についてのデュルケームの見解について語った。

(大正八年)

米田庄太郎講師……………特殊講義「ジンメルの論文 *Skizze einer Willenstheorie*」を用いた。演習 *Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft*
および Baldwin : *Individual and Society*. 講読 Eisler : *Soziologie*.

法科大学において――

米田庄太郎講師……………社会学講義「労働階級の研究」

読書会――

社会政策に就て 森賢隆
都市計画の研究 諏訪潜
ミカイドロスキーの主観的方法論 馬場剛
およびその批評
我国に於ける資本主義的精神の発達 円谷弘
ヘンダーソン博士の論文に就て 村田太平

(大正九年)

米田庄太郎教授……………普通講義「社会学概論」 一、特殊講義「近代資本主義の研究」 二、演習「文芸批評の社会学研究」「労働立法
の研究」 一、講読 Small : *The Meaning of Social Science*. 経済科講読 Guyot : *Les Causes et les Consequences de
la guerre*.

この年、万年講師であった米田は、条件つきで教授に就任した。米田が担当する「社会学概論」は、独自の新システムによって展開し、講義開始以来つねに聴講学生二百名（文学部、経済学部、法学部の学生からなる）は大講堂にあふれたという。「特殊講義」は、まず近代の資本主義が

どのような基礎において発生し、発達してきたかについて究明し、ついで本論に入り、その歴史的基礎の章下において論究したものである。『演習』用の教材としては、Irving Babitt : *Masters of Modern French Criticism*, Commons & Andrews : *Principles of Labour Legislation* をもち、毎回十頁ないし三十頁ほどのスピードで進んだ。

本年度は、社会学専攻の学生が激増したために、スモールの書を用いることになり、学生全員の手教科書がわたったので、大速力で同書を読破することになったという。

読書会および新会員歓迎会

利益分配法の根本原理

九月三十日

山崎若太郎

(大正十年度)

米田庄太郎教授……………普通講義「純正社会学概論」「人口理論の発達」、特殊講義「軌近の歴史哲学」、演習 Hobson : *The Evolution of*

Modern Capitalism. Hobhouse : *Liberatism*. 講読 Giddings : *The Principles of Sociology*.

注・十月中旬より、第三高等学校教授・十時^{とよむたろ}弥があらたに講師に就任し、「犯罪社会学」を講じることになった。

読書会——

(五月例会)

R.E.Park : “*Sociology and Social Sciences*” (*The American Journal of Sociology*, Jan. 1921.) 久保寺保久

H.M.Baker : “*The Count and the Deligent Child*” (*The American Journal of Sociology*, 1920.) 伊藤典考

(六月例会)

J.F.Steiner : “*Education for Socialworks*” (*The American Journal of Sociology*?) 三枝樹正道

E. R. Groves : “*A College Program for Rural Sociology*” (*The American Journal of Sociology*?) 光明正道

大正十一年と翌十二年の講義担当者・講義題目・時間数についてはよくわからない。

(大正十二年)

米田庄太郎教授……………普通講義、純正社会学概論 二、特殊講義「社会学方法論の発達——歴史のおよび批判的考察」 二、演習「タルドの模倣の法則」 二

注・米田教授は、大正十四年三月かぎりで、故あって京大文学部から身をひいた。

(大正十四年)

コクレ講師……………普通講義(第二学期より)
〃……………特殊講義(〃)

藤井健治郎教授……………社会的理想主義の研究

レーデラー講師……………*Die Methodentheorie d. Soziologie.*
(もと東大経済学部教授)

西田幾多郎教授……………演習 Weber : *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*

注・この年、米田庄太郎と高田保馬は、「ドイツ社会学会」(*Deutsche Gesellschaft für Soziologie*)の通信会員 *Korrespondierendes Mitglieder* に挙げられ、兩人ともこれを快諾した。

(大正十五年)

〔文学部〕

三浦新七……………「文化類型と団体意識」

藤井健治郎教授……………講読 Tönnies : *Gemeinschaft und Gesellschaft.*

法科大学において――

河田嗣郎……………「社会政策」

米田庄太郎……………講義「社会学」

○東京高等師範学校

大正九年

建部遯吾?……………社会学綱要

大正十四年

綿貫哲雄……………社会学概論、社会学演習

大正十五年

綿貫哲雄……………社会学概論、演習

○東京外国語学校

今井時郎……………社会学概論

○大阪高等商業学校

山口正太郎教授……………社会学

河田嗣郎講師……………社会問題及社会政策

トラフォード講師……………社会問題及社会政策
 財部静治講師……………統計学
 山本美越乃講師……………植民政策及農業政策

○広島高等師範学校

新見吉治……………家族制度史、演習
 岩井龍海……………最近社会学、演習 *Maciver : Elements of Social Science. Diehl : Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus.*

○東京高等商業学校

同校は校長佐野善作（一八七三—一九五二、明治から昭和期の金融学者）の熱心なる計画のもとに、大正五年（一九一六）四月より、その専攻科の授業科目のなかに“社会学”（二週二時間）をもうけ、東大の建部遯吾教授を招いてその任にあたらせ、“社会学原論”を講じてもらうことにした。

（大正七年）

建部遯吾講師……………社会学 二

（大正九年）

建部遯吾講師……………社会学（斯学的主要問題に関するもの） 二

（大正十年）

建部遯吾講師……………社会学 二

高田保馬教授……………社会学、経済学史

注・この年、東京商科大学と名称変更する。従来よりの建部講師のほか、こんど新たに高田保馬が正教授としてむかえられた。同人は広島高等師範学校を兼任した。社会学は、建部と高田とで汎論と各論とを交互担当することになり、経済学は福田徳三（一八七四～一九三〇、明治から大正期の経済学者）とのあいだで、分担もしくは共担することになった。

（大正十四年）

建部遯吾講師……………社会学 二

永江亨……………社会政策

大正十三年（一九二四）度の、私立大学における社会学講義の担当者、題目および時間数は、つぎのとおりである。

○法政大学

松本潤一郎……………社会学概論（法文学部 二、経済学部 一二）、社会階級研究、演習 E. Durkheim : *De la division du travail social*.

藤田喜作……………社会学的国家観

蔵内数太……………演習 G. Simmel : *Soziologie*, N. Spykman : *The Social Theory of G. Simmel*.

なお夜間専門部に新設された社会学の講義は、高山兼吉が担当した。

松本潤一郎……………社会学概論（法文学部 二、経済学部 一二）、社会学史演習（文学部 一二）

戸田貞三……………社会調査法（法文学部、経済学部共通 一二）

桑田芳蔵……………社会心理学（法文経共通）

大田正孝……………新聞研究

高山兼吉……………社会問題

小林輝次……………社会政策

○ 日本大学

円谷弘教授……………社会学原論、社会政策、卒業論文指導、演習 Giddings : *Studies in the Theory of Human Society*.

銅直勇講師……………日本社会史、演習 Davis : *Psychological Interpretation of Society*.

蔵内数太講師……………演習 G. Simmel : *Soziologie*.

金杉恒弥講師……………演習 Beach : *Introduction to Sociology*.

小林郁講師……………社会学史

渡辺徹教授……………社会心理学

山上昶教授……………都市計画

安井英二講師……………社会問題

森数樹講師……………社会統計

生江孝之講師……………社会事業

英義彦教授……………社会教育

田中□^{不明}講師……………経済心理学

○ 日本大学

小林郁……………社会学史 二、社会学演習 二

松本潤一郎……………社会思潮史 二

永井亨……………社会政策概説 二、産業監理 二

本丸……………社会統計学 二

山上昶……………都市計画 二

戸田貞三……………社会学原論 二

森本富士雄……………労働立法 二

生江孝之……………社会事業 二

藤原勘治……………新聞研究 二

桑田芳蔵……………社会心理学 二

大塚政晨……………工場監理 二、広告心理 二

浜田本悠……………社会学演習 二

斎藤响……………外国書講読 二

吉田九郎……………社会誌学講読 二

柳沢泰爾……………外国書講読 二

○慶応義塾大学

加田哲二……………社会学（ただし留学中）

（経済学部）

小泉信三……………社会思想史

（文学部）

若宮卯之助……………社会学

○早稲田大学

関與三郎……………社会学 二（第一学年）、社会問題 二、社会学研究（一）、社会学説（二）（第三学年）

伊藤輔利……………社会学研究〔近代社会学の研究〕（第二学年） 二

松田治一郎……………社会心理学 二

二階堂保則……………統計学 二

大山郁夫……………国家学 二

注・同大学における社会学の講義題目および時間数（各週）は、「社会哲学科」におけるものである。

大正十四年（一九二五）度の、私立大学における社会学講義の担当者、題目および時間数は、つぎのとおりである。

○ 日本大学

円谷弘教授……………社会学原論 二、演習、卒業論文指導および Gillette : *Rural Sociology*

小林郁講師……………米国社会小史 一

銅直勇講師……………社会学史 一

山内得立講師……………社会思潮史 二

桂皋講師……………労働問題 二

安井英二講師……………社会問題 二

永井亨講師……………社会政策 二

英義彦講師……………社会教育 二

森数樹講師……………社会統計 二

山上昶講師……………都市計画 二、新聞研究、二

大塚政晨講師……………広告研究 二

蔵内数太講師……………演習 Giddings : *Principles of Sociology* 二

金杉恒弥講師……………演習 Vierkant, A : *Gesellschaftslehre* 二

桑田芳蔵講師……………社会心理学 二

○ 東京女子大学

松本潤一郎……………社会学

戸田貞三……………社会問題

○日本女子大学

林恵海……………家婦問題

戸田貞三……………防貧救貧事業

永井亨……………社会政策

綿貫哲雄……………産業の発展、社会演習

富士川遊……………社会衛生

生江孝之……………児童保全事業

桑田芳蔵……………社会心理

二階堂保則……………統計学

○東洋協会大学

小林郁……………社会学概論 二

○中央大学

大学部 松本潤一郎……………社会学概論 二

専門部 小林郁……………？

○専修大学

大学部 小林郁……………社会学概論 二

専門部 赤神良譲……………？

○法政大学

松本潤一郎	社会学概論	二、特殊研究（社会学史）	二
高田博士（保馬？）	社会学概論	<i>Cole : Social Theory</i>	一一
藤田喜作	特殊研究	国家論 <i>Giddings : Responsible State</i>	一一
吉田九郎	演習（社会発生論）	<i>Hardland : Primitive Society</i>	一
桑田芳蔵	社会心理学		二
高山兼吉	社会問題		二
小林輝次	社会政策		二

○東洋大学

印哲科教倫科	社会学		
文化学科	近世社会問題		
社会事業科	社会学、社会政策、社会問題		
文化学科	社会学		
関栄吉	社会学		
板垣鷹穂	歴史哲学		
杉村章三	国家学		
小島幸治	社会事業		

○早稲田大学

政治経済学部	社会学		
文学部	社会学、社会問題、社会学説		
関教授	社会学、社会問題、社会学説		
伊藤講師	社会学の諸問題		

渡利講師……………アリストートルの研究

○立教大学

植原悦二郎……………社会学

○明治大学

大学部 赤神良譲……………社会思潮、社会学、社会心理学

田中貢……………社会政策

小島憲……………労働問題、社会事業

森山武一郎……………労働立法

専門部 蒲生俊文……………労働問題及労働法

藤森達三……………社会学

田中貢……………社会及労働問題、社会政策

赤神良譲……………社会学

○関西大学

大学部 岩崎卯一教授……………社会学原理 二

専門部 “……………社会学概論 二、社会政策

○龍谷大学

本田弘人……………(普通)社会学原論 二

海野幸徳……………社会政策 二

二十二鉄鎧……………(特殊) 社会的宗教批判研究 二

財部静二……………統計学概論 二

海野幸徳……………社会事業学 二

○同志社大学

波多野鼎……………社会学、社会問題

大正十五年（一九二六）度の、私立大学における社会学講義の担当者、題目はつぎのとおりである。

○東京女子大学

堀江帰一……………財政学

片山哲……………私法

高橋誠一郎……………経済思想史

平貞蔵……………経済政策

松本潤一郎……………社会学、社会思想史

青木誠四郎……………心理学

南原繁……………政治学

○日本女子大学

生江孝之……………社会事業

綿貫哲雄……………社会学

富士川遊……………社会衛生

高橋誠一郎……………社会経済学

桑田芳蔵……………社会心理

森数樹……………統計学

林恵海……………家族問題

佐藤寛次……………農村問題

永井亨……………社会政策

戸田貞三……………防貧救貧

○東洋大学

戸田貞三……………社会学

藤田喜作……………社会問題

服部之総……………社会政策

林恵海……………社会学

平野長次郎……………社会政策

○明治大学

田中貢……………社会政策、商工政策

小島憲……………農働問題、社会事業、植民政策、労働法

藤田喜作……………社会学

大内武次……………農業政策

栗原信一……………社会心理学

○ 駒沢大学

建部 遯吾……………社会学原論

○ 立正大学

二子 石武喜……………社会学概論

西宮 藤朝……………社会思想史

北沢 新次郎……………労働経済史

生江 孝之……………社会政策

桑田 芳蔵……………社会心理

○ 国学院大学

〔大学部および高等師範部〕

今井 時郎……………社会誌学、社会学概論

○ 立教大学

江刺 喜四郎……………社会学概論

○ 同志社大学

難波……………社会学

林 要……………社会問題

○大谷大学

若栗現昭……………社会学概論、ロースの社会学、演習

五十嵐信……………社会思想史、演習 *Giddings : Studies in the Theory of Human Society.*

○関西大学

岩崎卯一……………社会学、社会政策

○関西学院

松沢兼一……………統計学、社会政策、演習

エッチ・ピー・ジョーンズ……………社会施設

大石兵太郎……………社会心理学

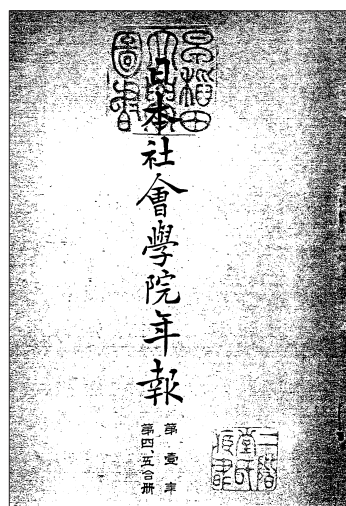
小松堅太郎……………社会学、社会思想史

つぎに大正二年（一九一三）から同十五年（一九二六）までの、「学界彙報（いほう報告をあつめたもの）」についてのべておこう。これによって大正期の日本社会学界の動向を知ることができる。

大正二年（一九一三）

同年十二月六日（土）午後四時半より、東京帝国大学構内の会議所において、「日本社会学院」の第一回小会がひられ、左記の講師がつぎのような講演をした。

支那に関する社会学的観察……………有賀長雄



『日本社会学院年報』（第一年、第四、五合冊）。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

独逸勃興の由来……………今井政吉

大正三年（一九一四）

京都帝国大学の「社会学会」は、一月十九日午後六時、二月例会を開催した。

分離論……………高田保馬

注・これは「分離」なる社会現象を反感と反対とにわけ、第一に反感の原因を三つさ
ぐり、その原因についてさらにこれを三分し、つぎに反対の原因を説明し、さいごに「分離」の社会に表現する形式を、闘争・戦争および競争に
わけて論じたものらしい（『日本社会学院年報——第一年第四、五合冊』）。

三月二十日午後七時より三月例会をひらき、米田講師の講演があった。

婦人の貞操……………米田庄太郎

「潜龍会」（東大社会学研究室同人）は、第六十五例会兼新人会を、一月二十四日午後五時より神田一橋学士会仮事務所第二号室においてひらき、
午後六時半より左記の演題について研究発表がおこなわれた。

刑法法制主義に就て……………法科大学 助教授 牧野
欧州に於ける国語行政……………文科大学 助教授 保科

第六十六例会は、二月二十五日午後六時より、第二学生集会所第二室でひらかれた。

東北凶作地視察談……………三浦
地方経営上の抱負……………西田

第六十七例会は、遠足会であった。三月二十一日に東京を発し、久里浜松輪をへて相州三崎（そうしき）に一泊し、翌二十日は鹿島に漁村をおとずれ、
風俗民情を視察し、午後八時帰京散会した。

第六十八例会は、五月一日午後五時半から神田一橋学士会仮事務所第二号室でひらかれ、夕食会のち講演があった。



谷本富

「潜龍会」の第六十九例会は、五月二十九日午後六時より、大学構内第二学生集会所においてひらかれ、左記のような研究発表がおこなわれた。

孤兒院の植民地……………西原喜作
ロシアの経済事情……………今井時郎

社会学と現代宗教学との交渉……………赤松智城
社会現象としての道徳……………藤井健治郎
社会学の哲学的基礎……………谷本富^{とめり}

晩さん会は、午後六時会議所においてひらかれ、この日の大会は終了した。
京都文科大学社会学会は、五月十七日午後一時より法科大学第四教室において公開大会を開催し、午後九時散会した。当日、左記のような講演がおこなわれた。

国民の頽廃……………富士川遊
現代社会の害悪と優生学の効果……………東京高等師範学校教授 吉田静致
植民地の混血児……………早稲田大学教授 永井柳太郎
社会学とは如何なる科学なる乎……………東京帝国大学名誉教授 加藤弘之
最近社会運動に於ける革命的傾向と第五級團の分化……………京都帝国大学文科大学兼法科大学講師 米田庄太郎
人種の衝突と日本の天職……………添田壽一

各種の形式主義……………文科大学教授 建部遯吾
朝鮮談……………京城高等普通学校教諭 高橋亨
「日本社会学院」(大正二年「一九一三」建部遯吾によって創設された)の第一回大会が、大正三年三月八日(日)午前九時より、東京帝国大学法科大学第三十二番教室で開催され、建部遯吾の開会の辞のあと、研究報告(題目「婦人労働問題」——今井政吉、阿部秀助)がおこなわれ、午後一時より講演会へと移った。

「日本社会学院」の小会は、六月十六日（火）午後四時半より東京帝国大学の会議所でひらかれ、左記のような講演がおこなわれた。

メキシコの内乱に就きて……………東京帝国大学
法科大学助教授

吉野作造

植民地の労働問題……………早稲田大学
教授

永井柳太郎

帝国国防の標準と其統一……………衆議院議員

片桐西次郎

日本帝国食料問題より世界……………添田壽一

大勢論におよぶ

第七十例会は、九月二十五日午後五時半より大学構内山上会議所において開会し、有賀・小林両講師の帰朝および新入会員の歓迎会をかねた。

中華民国憲法制定に関する抱負……………有賀長雄

欧州留学談……………小林照朗

第七十一例会は、有賀長雄の懇篤なる招待により、大正三年秋十月十七日塩原の別荘に遠足会として開催された。参加者は午前七時、上野駅を発し、十一時西那須^{なす}駅に着し、のち軽便鉄道にのったり、歩いたりして有賀別邸にむかった。有賀夫人にむかえられ、まず庭内で握飯をたべ、のち一浴おわると、酒席がもうけられていた。林間の紅葉をあつめ、それを焚いて酒をあたためて飲んだ。

翌十八日は、有賀の案内により溪谷ちゅうの景勝めぐりをし、正午別荘の亭において昼食をこちそうになったのち、微雨にうたれながら邸を辞し、夜十時上野駅において散会した。

第七十二例会は、十二月二日午後六時より大学構内第二学生控所においてひらかれ、学生や院生らが研究発表をおこなった。

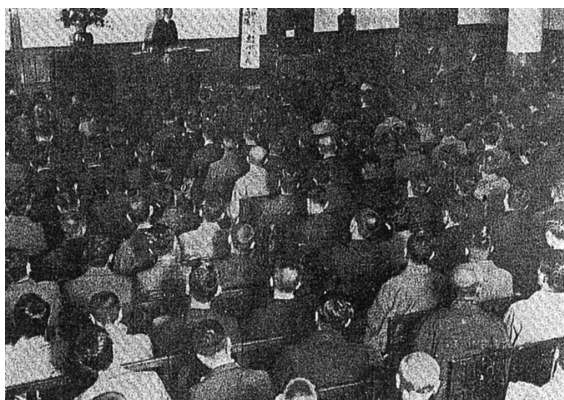
都市と児童……………（学生）渋谷

欧州に於ける民主主義……………（院生）綿貫哲雄

このあと建部教授が批評および感想をのべ、十時散会した。

第七十三例会は、十二月十七日忘年会をかねて午後六時より同前の場所においてひらかれ、西原学生が「建部教授の自由史観に就いて」と題し、教授のおしえを請うた。が、建部は、途中で用事のため退席した。そのため日程を変更して、自由討論に移り、九時半散会した。

「日本社会学院」の第二回大会は、十一月一日（日）午前八時半より、東京高等師範学校大講堂において開催され、東京帝国大学講師・小林照朗の開会の辞につづいて、東京高等師範学校長・嘉納治五郎の歓迎の辞のあと、研究報告（題目「国民思想動揺」の原因——吉田静致、藤井健治



「日本学院」の第2回大会における講演会。

郎)がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

社会の根本的現象……………	慶応義塾大学 教授	田中一貞
教育と社会……………	東京女子師範 学校教授	吉田熊次
予防主義を批判す……………	弁護士	大場茂馬
国民道徳統一の必要を論ず……………	東京高等師範 学校長	嘉納治五郎
帝国の国是と世界の戦乱……………	東京帝国大学 文科大学教授	建部遯吾
宗教政策と国民思想の動揺……………	曹洞宗大学学監 兼教授	大森禪戒
倫理の根本問題に関する疑問……………	日白中学校長	十時弥
人種感情か国民感情か……………	東京女子高等師範学校教授、 東京帝国大学講師	小林照朗
活きた社会学……………	谷本富	
国民思想は動揺せりや……………	三宅雄二郎	

晩さんは、午後六時半構内茗溪会^{めいけい}においてひらかれ、この日の大会は終了した。

大正四年（一九一五）

「潜龍会」の第七十五例会は、二月十八日午後六時より、大学構内第二学生集会所においてひらかれ、左記のような研究発表がおこなわれた。

露国の欧化主義と国粹主義…………… 今井時朗

新聞紙上に現はれたる広告に就いて……（学生） 志賀志那

第七十六例会は、三月九日建部教授の青島旅行送別^{チンタオ}の意をかねてひらかれた。建部は各発表に縦横に批評をくわえ、十時散会した。

文明に関する雑感講話…………… 今井時朗

批評の根底……………(学生) 西原喜作

都市教会と慈善事業……………岩井龍海

第七十七例会は、四月二十一日午後六時より前同所においてひらかれ、建部とその同行者による帰朝講演がおこなわれ、十時散会した。

東洋の大勢と青島チンタオの運命……………建部遯吾

青島および支那社会についての……………葛西又次郎

観察談

「日本社会学院」の第三回大会は、十月十日(日)午前八時半より、東京高等商業学校大講堂において開催された。早稲田大学教授・田中穂積の開会の辞、東京高等商業学校長・佐野善作の歓迎の辞のあと、研究報告(題目「人口問題」——建部遯吾、高野岩三郎、永井潜)がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

人口問題に於ける宗教的解決……………宗教大学
教授

渡辺海旭

所謂独逸文化宣伝策の主張の批判……………早稲田大学
教授

大山郁夫

社会病理学に就いて……………東京高等商業
学校教授

志田鉦太郎

貧乏は根絶し得べきや……………阪谷芳郎

晩さん会は、午後六時から神田一ツ橋学士会事務所においてひらかれ、この日の大会は終了した。

第七十八例会は、五月十二日午後五時より大学構内第二学生集会所(控室)においてひらかれ、各発表のあと、建部幹事の批評があり、十時散会した。

共済組合に就いて……………亀田豊治朗

北越講演旅行所感……………今井時郎

第七十九例会は、六月二十一日午後六時より同前の場所においてひらかれ、各発表のあと、今井、綿貫、藤田につづいて、建部教授の批評があり、十時散会した。

原始婚姻に就いて講述を補ふ……………建部教授

欧州遊学雜感……………上西

第八十例会は、本学年度最初の会であり、九月二十八日午後六時より同前の場所においてひらかれ、各発表のあと、藤田、建部教授の批評があり、十時散会した。

労働者待遇に就て……………(学生) 志賀

道徳的情緒の特質に就て……………綿貫哲雄

第八十一例会は、十一月二十六日午後五時半より同前の場所においてひらかれ、各発表のあと談話があり、十時散会した。

大典期旅行談……………建部教授

支那旅行談……………(学生) 朱章宝

第八十二例会は、十二月六日午後六時より同前の場所においてひらかれ、各発表のあと談話があり、十時散会した。

露西亞の教育制度……………今井時朗

教育振興の御沙汰を拝読して……………建部教授

大正五年(一九一六)

第八十三例会は、新年会をかねて一月十九日午後五時から前同所においてひらかれ、五時半食卓をひらいて祝杯をあげた。六時半、研究発表・講演に移った。のち各講師に質問や弁難の矢をはなち、また建部教授の批評があったりし、十時散会した。

我国現代教育界に対する疑点……………小林照朗講師

予が日英関係観に対する……………

建部教授

内外物議の沸騰……………

第八十九例会は、九月十九日例刻より新入会員(八名)の歓迎会をかねて例所においてひらかれ、小林・建部・高山らの夏休み中の旅行談があり、十時散会した。

第九十例会は、十月十六日例刻より前同所においてひらかれ、研究発表のあと、例によって批評・論評があり、十時散会した。

土地所有の起原に就いて……………(学生) 西田己四郎

「日本社会学院」の第四回大会は、十月二十九日(日)午前八時より、早稲田大学大講堂において開催され、建部遯吾の開会の辞ののち、研究報告(題目「戦後教育の根本方針」——下田次郎、小西重直、平沼淑郎、諸橋轍次)がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

哲人主義の政治教育……………早稲田大学 講師 北聆吉

我国教育の根本問題……………慶応義塾大学 教授 川合貞一

軍隊教育……………教育総督部本部長 山梨半造
陸軍中将

医学教育の統一について……………東京帝国大学医科 大学教授 入沢達吉

戦後の商業教育……………東京高等商業 佐野善作
学校長

晩さん会は、午後六時半より早稲田大学恩賜館においてひらかれ、この日の大会は終了した。

第九十一例会は、十一月七日午後六時から例所においてひらかれ、各研究発表ののち批評や弁難があり、いつものように十時に散会した。

日本我について……………(学生) 前田一

形式政治と実質政治……………建部教授

第九十二例会は、学生の発起により十一月十九日郊外散策会となった。午前九時赤羽駅前に集合し、蕨、浦和をへて大田窪にいたり、川魚の名物に舌づつみをうち、数杯のビールに陶然の酔を買い、一日の秋遊をおえて、八時帰路についた。

第九十三例会は、十一月二十九日午後六時より前同所においてひらかれ、研究発表のあと、講演者にたいして論駁応酬があり、十時ようやく解散した。

現代社会問題に就いて……………(学生) 若栗現昭

研究対象としての現代日本の社会……………綿貫哲夫

第九十四例会は、十二月十九日午後五時半より前回の場所においてひらかれたが、幹事の建部教授が病気のため欠席したことにより日程を変更し、今回は忘年会の意味で自由談話をおこない、九時散会した。

大正六年（一九一七）

第九十五例会は、一月二十四日午後五時半より前同所においてひらかれ、新年会と三浦助手（一昨年、鉄道院保健課に転任）と高橋助手（後任）の送迎をかねてひらき、また綿貫・藤田らの講演（題は不明）がおこなわれた。参加者二十三名、九時半散会した。

第九十六例会は、二月二十日午後五時より前同所においてひらかれ、学生の発表や今井時朗のロシアに関する研究発表がおこなわれたのち、十時散会した。

第九十七例会は、三月十二日午後五時より前同所においてひらかれたが、これは今井のロシア留学の送別会をかねていた。また研究発表は、左記のようなテーマでおこなわれた。

社会の目的と人世の理想……………（学生） 土生秀穂

社会観……………（学生） 遠山鑑治

時弊（その時代の悪習）論……………藤田喜作

第九十八例会は、四月二十日午後六時より前同所においてひらかれ、各研究発表のち、批評や質問がおこなわれ十時散会した。

上代理想社会の研究……………（学生） 赤神良譲

社会勢力の生成と変遷……………藤田喜作

藤田の発表は、社会勢力の性質、その政治との関係を論じ、さらに我が国古来の社会勢力というべきものについて、その変遷を概観し、現今の民本主義に対する政治家の態度の重要なものをべたもの（『日本社会学院年報』第四年、第三、四、五合冊、六五〇頁）。

第九十九例会は、五月六日郊外散策とし、一行は江戸川を渡って里見の城跡に午さんを摂り、葉桜のもと江戸川堤を柴又にむかい、帝釈天に参拝し、午後五時——料亭「川甚」^{かわじん}に至った。建部教授の開会の辞のあと、和親の会合となり、十時すぎ帰路につく。

第百例会は、六月二十日午後六時より前同所においてひらかれ、学生の研究発表ののち、建部教授は第百例会にさいして、本会成立当時の回想をのべ、十時散会した。

支那現下の状態に就て……………(学生) 黄

第百一例会は、九月十九日午後五時より前同所においてひらかれ、当日は新人学生会員の歓迎会と建部教授の朝鮮・満州出張送別会をかねたものであった。一同五時半に食卓につくと、建部幹事より新人会員歓迎のあいさつがあった。談話ののち、九時半散会。

第百二例会は、十月十日午後六時より前同所においてひらかれ、亀田講師の研究発表のあと、藤田の批評があり、九時散会した。

貧乏論……………亀田豊治朗講師

注・これは貧乏の意義、原因、防止策について論じたものであり、亀田が得意とする労働保険論をふりまわして論及したもの。

「日本社会学院」の第五回大会は、十月二十八日(日)午前八時半より、京都帝国大学大講堂において開催され、京都帝国大学文科大学教授・藤井健治郎の開会の辞につづいて、同大学総長・荒木寅三郎、市長、府知事らのあいさつがあり、つづいて研究報告(題目「人種競走」——米田庄太郎、新見吉治、今井新吉)がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

国民的理想……………第五高等学校 江部淳天
教授

我国経済上に於ける女子の地位……………神戸高等商業学校 津村秀松
教授

世界戦乱と平和運動……………東京帝国大学文科 建部遯吾
大学教授

民族と国民と世界文化……………京都帝国大学文科 坂口昂
大学教授

日米関係問題……………京都帝国大学法科 神戸正雄
大学長

都市計画に就いて……………大阪市助役 関一

晩さん会は、午後七時より大学構内の学生集会場においてひらかれ、この日の大会は終了した。

「潜龍会」の第百三例会は、十一月十一日午後五時より前同所においてひらかれ、新帰朝者の講演がおこなわれ、十時散会した。

露西亜談……………今井政吉

注・これはロシアの最近の変動、ロシアの財政上の窮状、ロシア人の民族心理を史観的にのべたもの。

鮮満視察談……………建部教授

第百四例会(月日は不明)は、午後五時から前同所においてひらかれ、東京日々新聞のロンドン特派員として渡欧する米谷吉次郎の送別会と、

研究発表がおこなわれたのち、質疑応答があり、十時散会した。

ノルマンエンチエリズム……………(学生) 松本潤一郎

遊女に就て……………石原

石原の発表は、遊女の名称論、および外国における起原発達についてのべたもの。その輕妙なる叙述方法は、一同の注意をうながしたという。

第百五例会は、十二月十九日午後五時半より前同所においてひらかれ、研究発表のあと、質疑応答がおこなわれ、十時散会した。

生活の進化……………(学生) 村山智順

食糧問題……………戸田貞三

大正七年(一九一八)

第百六例会は、一月二十九日午後五時半より前同所においてひらかれ、研究発表のあと質疑応答がおこなわれ、十時散会した。

真言宗の社会的特色……………川井精春

注・これはその歴史的由来と、同宗が将来どのように社会的価値をもとめてゆくかについて語ったもの。

我予言^{わがよげん}また適中……………建部教授

注・いまのドイツやロシアの形勢は、大正三年秋にすでに予言したものである、といった講話。

第百七例会は、二月十九日午後五時半より前同所においてひらかれ、研究発表のあと質疑応答がおこなわれ、十時解散した。

露国の社会問題……………大山良継

注・これは桑田著『最近欧州の社会問題』のなかの一部を紹介し、かつ批評したもの。

宗教の社会的職能に就て……………戸田貞三

第百八例会は、三月十九日午後五時半より前同所においてひらかれ、研究発表のあと質疑応答がおこなわれ、十時解散した。この日、二人の発表者は語るべき材料すこぶる多く、時間不足のため、わずかに一端だけにとどめた。

新自然法説と行動能力……………二子石武喜

戦後の経済的社會問題……………藤田喜作

「日本社會学院」の第六回大会は、十月二十七日（日）午前八時半より、東京帝国大学法科大学第三十二番教室において開催され、同大学文科
大学長・上田万^{かずとし}年の開会の辞につづいて、研究報告（題目「戦争と文化」——高田保馬、山内雄太郎、椎尾弁匡）がおこなわれ、午後より講演会
へと移った。

社会学の応用方面に就て……………東京女子高等師範
学校教授 小林照朗

貧乏の原因 及其救济……………早稲田大学
教授 北沢新次郎

政党の闘争……………京都帝国大学
教授 佐藤丑次郎

欧州現代文明の弱点……………早稲田大学
総長 大隈重信

戦争と文化……………海軍主計
總監 宇都宮鼎

戦争と国家組織……………陸軍中將 佐藤剛次郎

第百十五例会は、十二月十七日午後五時半から前同所においてひらかれ、研究発表ののち質疑応答があり、十時開散した。

仏教の社會観……………岩井

学者の事^{じだい}大的態度……………建部教授

大正八年（一九一九）

第百十六例会は、一月三十日午後五時半から前同所においてひらかれ、研究発表ののち、質疑応答があり、十時開散した。

温情主義について……………戸田貞三

国民道德の教授に就て……………江部

第百十七例会は、二月二十五日亀田豊治郎講師の学位受領祝賀会をかねており、食卓をともし、歓談ののち研究発表をおこない、十時散会し

た。

細民生活の調査……………松永栄

注・発表者は昨年の冬、救世軍とともに東京市内の細民（貧民）窟をおとずれた。そのときの体験をふまえ、今回細民となった原因や経路についてくわしく語った。しかし、二三者の感想によって説述することの危険について、聴衆のなかから、批判がでた。その発表は、確実なる資料（統計）にもとづいていなかったからである。統計のしめすところによれば、細民となる主なる原因は、疾病（病気）と老衰である。

人口移動の一行相に於ける……………大場実治
動搖因と集中因……………

第百十八例会は、三月十六日（日）『予餞会』^{よせんかい}（卒業のまえにおこなう送別会）をかね、郊外散策とした。両国駅より午前十時五十分発の列車にのり幕張にいたり、それより稲毛^{いなげ}（千葉市西部）にむかった。稲毛海岸の「海気館」に着し、午後二時より眺望絶佳なる大広間において宴会がはじまった。卒業予定者の謝辞、建部教授のあいさつがあった。暮色ようやく迫るころ、一同帰路についた。

第百十九例会は、三月十八日前同所において、二時間半にわたって講演がおこなわれた。

高田文学士の『社会学原理』を……………二子石武喜
讀みて……………

注・高田の学説を批判するには、まずその師である米田庄太郎の学説を考察する必要があることを説いたもの。

第百二十例会は、四月二十三日前同所においてひらかれ、左記のような研究発表がおこなわれた。

現代生活の弱点……………土生秀穂

男女闘争論……………小林照朗

第百二十一例会（月日は不明）は、前同所において午後六時から、随意会食の食卓をひらき、また研究発表のあと、建部教授の批評、同人との歓談があり、十時散会した。

経済学の問題と社会学の問題……………田辺壽利

戦時ちゅう独艇のぼっこする……………

インド大西洋を経ての旅行談……………米谷

第二百二十二例会は、六月二十七日東京府視学より新潟高等学校教授に栄転する会員・十倉精一の送別会をかねて、前同所においてひらかれ、六時半より研究発表があり、のち建部の批評があり、雑談に入ったのち十時散会した。

愛知縣村落生活視察談……………（中華民國留學生）黃鏞

東京府の教育の實際に就いて……………十倉精一

第二百二十三例会は、十月六日午後五時より新入生の歓迎会をかねて前同所においてひらかれ、会食のあと建部教授の歓迎の辞と潜龍会の主旨大綱について説明があった。ついで新入生の自己紹介がおこなわれたあと、建部は講演旅行（東北・関西におよぶ）の状況についてのべた。のち雑談にうつり、午後十時散会。

「日本社会学院」の第七回大会は、十一月二日（日）午前八時より、仙台市第二高等学校講堂において開催された。第二高等学校長・武藤虎太の開会の辞のあと、東北帝国大学総長、宮城県知事、仙台市長らの歓迎の辞があり、ついで研究報告（題目「国民保健問題」——山内雄太郎、木村男也、長谷部言人、遠山郁三）がおこなわれ、午後一時すぎより講演会へと移った。

我国に於ける精神病者の現況……………新潟医学専門学校教授 中村隆治

人種の保健……………東京帝国大学講師 亀田豊治朗

禁酒問題……………内務書記官 田子一民

国民保健の六大条件……………東京帝国大学教授 建部遯吾

晩さん会は、午後六時より仙台市内の「弥生軒」においてひらかれ、この日の大会は終了した。

第二百二十四例会は、十一月十八日午後五時半より、前同所においてひらかれ、研究発表のあと、建部教授の批評があり、十時散会した。

仏教に現れたる道德思想の

実理的批判……………三原恵海

所感……………（院生）若栗現昭

注・若栗の発表は、大学院において研究すべき社会学史の研究計画である。

第百二十五例会は、十二月十一日午後五時半より前同所においてひらかれ、研究発表のあと、建部教授の批評があった。

近代文学に現れたる婦人問題……………松坂達雄

貧の問題……………畑道雄

注・畑の発表は、“貧”とはなにか。貧乏の意義をあきらかにするために数多の統計表をかけた、あるいは十数葉のパンフレットを出席者にくばって説明したもの。

大正九年（一九二〇）

同年春、日本大学は“社会科大学”（夜間）を開設したが、これは日本の社会学史上まさに特記すべき事項であった。あらたに同大学が「社会科」を開設した趣意は、「現代ニ於ケル諸般ノ社会問題ヲ解決スルニ必要ナル知識ヲ涵養スルト共ニ 思想界ノ嚮導（道案内人）ニ裨補シ 以テ我邦文化ノ向上ニ寄與スル所アラントス」といったものであり、さらに「本大学ハ 卒先シテ社会科ヲ新設シ……………各種社会問題ノ根本原理ニ就キ徹底シタル教育ヲ施シ 以テ新時代有為ノ人材ヲ養成シ 併テ社会制度ノ実ヲ擧ケンコトヲ期ス」と抱負をかたっている。

社会学……………遠藤隆吉

輓近社会思想……………（一、二学期）杉森孝次郎

同……………（三学期）児玉達童

社会政策……………円谷弘

社会問題研究……………大場実治

倫理学……………佐々木英夫

社会史……………原隋円

民法総則……………長島毅

社会心理学……………山田珠樹

植民政策……………平元兵吾

西洋哲学史……………（一学期）四宮兼之

同……………（二、三学期）出隆

心理学……………渡辺徹

経済原論……………藤井英信

憲法……………金森徳次郎

刑法統則……………山岡万之助

この夜間大学の学生数は、男女あわせて三百名を計上されている。また学生の相互研究の機関として、円谷弘教授の指導のもとに「日本大学社



大庭村公

会学会」なるものが設立され、講演会が催され、かつ機関誌も刊行されることになった。

この年開催された公開講演会における講題と講師は、左記のとおりである。

第一回 六月二十七日

ロシア人の友愛性と惨虐性……………おおば かこう (34) 大庭村公

農村社会学……………かおる 小林 郁

民衆芸術論……………きよし 江口 渙

所感……………遠藤隆吉

同……………円谷弘

第二回 十月十七日

（カリフォルニア）
加洲に於ける排日問題……………平元兵吾

没批判より批判へ……………田中孝子

文学に現はれたるロシア思想……………昇曙夢

社会生活の頹廢とその更正……………大山郁夫

プロパガンダに依る露軍の解体……………アレキサンダー・ユーシヤ

プラトーンと現代哲学……………鹿子木員信

このように講義を担当した講師にせよ、講演者にせよ、当時名の知られた著名人をあつめたことがわかり、大学当局の力の入れかたが知られる。
「日本社会学院」の第八回大会は、十一月十四日（日）午前八時より東京高等師範学校大講堂において開催され、東京高等師範学校長・三宅米吉の歓迎の辞のあと、研究報告（題目「教政問題」——小林照朗、林博太郎、塚原政次、江部淳夫、十倉精一、佐々木吉三郎、今井時郎）がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

米国に於ける法学教育の現況……………東京帝国大学 助教授 高柳賢三
実業補習教育に就いて……………京都帝国大学 教授 青柳栄司

欧州戦後の社会観一斑……………海軍主計少将 宮都宮鼎
教育費用……………貴族院議員 柳沢政太郎
……………帝国教育会長

晩さん会は、午後六時半より構内会議室においてひらかれ、この日の大会は終了した。

大正十年（一九二一）

第三百三十六例会は、六月七日午後六時より前同所においてひらかれ、講演や潜龍会の意義、所感などの表明がおこなわれた。

社会学説の異同に就て……………（学生）古坂明詮

注・これは二時間にわたっておこなわれた講演であり、学説の異同の個人的社会的影響、過去の社会学説および社会学者、分派の理由（対象、現象、理法、進化）、結論について語ったもの。

潜龍会の意義……………建部教授

建部いわく。「先輩、後輩一堂に会して研鑽すること、後輩は先輩の知遇を得べき機会たることの二点において、学問上自個発展上有意義なることむしろ講壇の学問にまさるあるも劣るあるを見ず」と。

過去一年間に於ける文部省生活……………中島

のち随意談話にうつり、十時散会。

第三百三十七例会は、六月二十八日前同所においてひらかれたが、これは暑中休暇に入るさいこの例会であった。建部の開会の辞のあと研究発表がおこなわれ、午後九時解散した。

所謂世界的秘密結社に就いて……………今井時郎

無政府主義の批判……………赤神良譲

第三百三十九例会は、九月二十二日（水）午後五時より前同所において開会した。四ヶ年半のロシア、アメリカ留学から帰朝した今井時朗講師と、新入学学生の歓迎をかねてひらかれたものだが、建部教授は潜龍会の創立（明治四十二年一月）についてかたり、さらに日本社会学院や社会学研

究の主意を説明し、いっそうの勉学の奮起を希望した。七時よりこの日の講演が二時間にわたっておこなわれ、ついで新旧同人の自己紹介、小林照朗講師の所感があり、十時閉会した。

露西亞と亜米利加……………今井時朗

第百五十七例会は、九月二十八日（金）午後五時より前同所において、藤田喜作の講師就任の祝賀をかねてひらかれたが、参加者は三十六名であつた。例のごとく研究発表や談話がおこなわれたのち、午後十時散会。

社会学説の異同に就いて……………（学生）古坂明詮

満韓に於ける経験談……………藤田喜作

第百五十八例会は、十月十九日（水）午後五時より前同所においてひらかれ、旅行談が語られ、自由談話がおこなわれた。

韓国旅行談……………今井時朗

「日本社会学院」の第九回大会は、十月三十日（日）午前八時より東京商科大学講堂において開催され、東京帝国大学教授の建部遯吾の開会の辞につづいて、東京商科大学長・佐野善作の歓迎の辞のあと、研究報告（題目「内地植民問題」——稲田周之助、稲田昌植、高岡熊雄）がおこなわれ、午後より講演会へと移った。

社会的宗教……………宗教大学
教授

岩井龍海

本邦統計界の現状に就て……………前内閣統計官

二階堂保則

農民の都会移住に就て……………東京帝国大学
助教授

有馬頼寧

歴史家として観たる貧富問題……………東京帝国大学
教授

三上参次

近代社会運動の基調……………東京高等師範学校
教授

綿貫哲雄

戦後の殖民危険論に就て……………東京商科大学
教授

山内正瞭

自己の改造……………東京市長

後藤新平

晩さん会は、午後六時半より如水会館においてひらかれ、この日の大会は終了した。

昨春開設された日本大学「社会科大学」は、ますます発展の一途をたどり、いまや男女学生四百有余名を有するまでになり、日本における社会学の一大講筵（こうえん）（講義をするところ）になりつつあった。次に講座と担当講師についてのべると、左記のようになる。

〔第一学年〕

社会学概論……………	遠藤隆吉	社会政策……………	円谷弘
社会問題……………	大場実治	社会史……………	原隋円
社会思想……………	松原寛	購読 Blackman & Gillin : <i>Outline of Sociology</i> ……	小林郁

〔第二学年〕

(普通) 社会学史 ……	小林郁	(特殊) 社会学史 ……	高田保馬
社会誌学……………	今井時郎	購読 J.A.Hobson : <i>The Evolution of Modern Capitalism</i> ……	柳沢泰爾

この年の公開講演会は、左記のように開催された。

第三回 (月日は不明)

現代の都市……………	渡辺鉄蔵
都市計画に就いて……………	池田宏
都市と建築……………	内田詳三
ロシア革命当時の都市……………	今井時郎

第四回 (月日は不明)

国家と社会との関係……………	高田保馬
社会階級の対立……………	綿貫哲雄
真理か生命か……………	松原寛

第百五十九例会は、十一月二十三日(金)午後五時より前同所においてひらかれ、東京高等師範学校教授・綿貫哲雄の帰朝談(第一次大戦後のヨーロッパがいかに惨状を呈したか)を聴いた。出席者は四十二名。

欧州における旅行談……………綿貫哲雄

第百六十例会は、十二月十六日(金)午後五時より前同所においてひらかれ、研究発表ののち質疑応答があり、午後十時閉会した。

大正十一年（一九二二）

第百六十一例会は、一月二十七日（金）午後五時より新年会をかねて前同所においてひらかれ、講演のあと九時半より自由談話にうつり、十時に閉会した。

裏面より観たるシベリア事情……………陸軍教授・樋口艶之助

注・これはシベリアの現状、ウラジオ政府の内幕、チタ政府の状態などについて説明し、進んで共産黨員がいかに日本において宣伝をなしているかの問題に言及したもの。

第百六十二例会は、新入学生の歓迎会と藤田喜作講師の在外研究生として渡欧するにあたっての送別会をかね、四月二十六日午後五時より、前同所においてひらかれ、建部教授の開会の辞のあと、講演や研究室規定の説明、日本社会学院の紹介などがおこなわれた。十時閉会。

学生生活の充実……………（学生監）鈴木早苗

注・鈴木の発表は、じぶんの学生生活を回顧し、かつ目的のためには手段をえらばない現代の社会風潮の弊風について憂いたもの。

第百六十三例会は、宗教大学教授より広島高等師範学校教授に栄転する岩井龍海の送別会をかね、六月十三日午後五時より前同所においてひらかれ、建部教授の開会の辞のあと、諸論文および論者についての批評がおこなわれ、十時閉会した。

最近『日本社会学院年報』

（第九年、第三、四、五冊参看）に……建部教授

現はれたる諸論文に関する評論

注・この発表において、建部は林恵海、赤神良讓、小林照朗らの論文を縦横自在に論評した。

建部遯吾著『政治改革策』……………藤田喜作講師

同年六月十四日午後三時四十分——教授会を退席した建部は、突如「病弱重任に堪へざる故」をもって「辞職願」を当局に提出し大学を去ると、同年九月五日附で「依頼免官」となった。いわゆる建部の「辞職事件」がこれである。

「日本社会学院」の第十回大会は、九月三十日より十月一日まで新潟高等学校大講堂において開催され、建部遯吾の開会の辞につづいて、新潟縣知事、市長、高等学校校長らの歓迎の辞があり、そのあと研究報告（題目「農村社会問題」——戸田貞三、有馬頼寧、坪井秀）がおこなわれ、翌十月一日午前八時半より講演会がおこなわれた。

我国の農業と保健問題……………新潟医科大学 教授	川村麟也
農村の政党運動……………慶応義塾大学 教授	田中萃一郎
自治と農村……………警察講習所長、 内務省監察官	松井茂
美術と国民性……………東京帝国大学 教授	瀧精一
貴族院論……………貴族院職員	近衛文麿

午後からは左記の講演がおこなわれた。

体育と個性 ^附 農村に於ける体育……………大阪医科大学 教授	木下東作
群集心理と精神分析……………京都帝国大学 教授	米田庄太郎
思ひ浮ぶま、……………第十二師団長、 陸軍中将	川村正彦
多数政治……………朝日新聞社 事務	下村宏
社会政策と国語問題……………東京帝国大学教授、 神宮皇学館長	上田万年

このあと質疑応答、閉会の辞（米田庄太郎）があり、午後五時半閉会した。なお晩さん会（「慰労招待会」）は、大会初日の九月三十日午後六時より「鍋茶屋」においてひらかれた。

大正十二年（一九二三）

この年は資料を欠いており、記すことができない。

大正十三年（一九二四）

潜龍会の二月例会は、二十七日午後五時半より山上御殿でひられ、左記のような講演がおこなわれた。

研究法をめぐる社会学……………小林郁

東京社会学研究会の二月例会は、二十八日帝大前の「鉢の木」においてひられた。

フッサールの現象学に就て……………松永

同右研究会、三月例会は二十八日一橋学士会館においてひられた。

早期社会に於ける魔術師……………岡正雄

また「潜龍会」の五月と六月の例会は、つぎのように開催された。

議論よろんの生成に関する一考察……………小山隆（五月三十日、午後六時、於東京帝大第二学生控所）

社会学の概念に就て……………蔵西真乘（六月二十日、午後五時半、前同所において）

日本大学「社会学会」の例会（第一回？）が、六月四日は神田女子基督教青年会館で開催された。

現代社会政策の基調……………円谷弘

KKKに就いて……………桜井庄太郎

「東京社会学研究会」の例会が、一ツ橋学士会館で開催された（月日は不明）

社会学の概念……………発表者不詳

日本大学社会学大講演会は、学会創立五周年を記念して、九月に欧米研究視察をおえて帰朝した円谷弘教授の歓迎会と研究発表会をかねて、神田の明治会館でひられた（月日は不明）。

社会関係の複合及び競争化……………小松堅太郎

社会哲学の一考察……………児玉達童

ハイゲートに詣でて……………円谷弘

「大阪社会学会」は、九月二十六日午後六時から第二回目の講演会をひらき、高野岩三郎・櫛田民蔵・山口正とのあいだで“失業統計”に関して討議がおこなわれ、また高野による明治二十年代の東京帝大における社会科学研究についての懐旧談などがあった。

潜龍会九月例会は、九月三十日午後五時半より、東京帝国大学山上御殿においてひらかれ、最近帰朝した、松本亦太郎博士・藤田喜作・小野秀雄学士らによる感想談があり、またあらたに渡欧留学する安富成中・秋葉隆学士らによる談話があり、十時ごろ散会した。

大正十四年（一九二五）七月十日午後五時——大阪市南区「大原社会問題研究所」において、高野岩三郎（二八七一—一九四九、大正から昭和期の統計学者・社会運動家）ほか十名ほどの社会学徒があつまり、「大阪社会学会」の設立を協議し、同日、成立した。

大原社会問題研究所の研究員のすべて、大阪市役所、大阪毎日新聞社、関西大学、大阪高商、大阪高等学校、大阪女専などからも多数会員として参加した。「大阪社会学会」は純粋なる学術団体であり、社会学の理論および応用を攻究する目的で設立された。

日本大学「社会学会」の第二回例会が、七月九日神田女子基督教青年会館で開催された。

倫理の社会学的考察……………文学士 熊岡敬三

ポンペイの遺跡を訪ひて……………教授 円谷弘

ついで第三回例会が、九月二十四日日本大学駿河台校舎において開催された。

十字街頭に立てる日本……………学生 岡本義雄

トルストイとボルシェヴィズムとの

交渉に就て……………学生 河一藤一

法政大学「社会学会」第一回例会が、十月三日同校講堂において開催された。講演題目および発表者は、つぎの面々である。

社会起原に関する疑^{うたがひ}……………今井時郎

社会学研究に於ける歴史主義……………喜多野精一

売操制度について……………菊池竹司

東京鉄道学校において、十一月一日“社会学講演会”がひらかれた。

社会と発明……………特許局技師 八木静一郎

社会学の方向態度について……………法政大学講師 喜多野精一

「日本社会学会」(第一回)は、大正十四年(一九二五)十一月八日(日曜日)午後一時より、東京帝国大学法学部三十番教室において開催された。

参加者は約五百名におよんだ。この日、今井時郎理事をはじめ各委員は、早朝より会場の設備その他の準備に多忙をきわめた。午後一時より公開講演会がはじまった。

講演題目と講演者は、左記のとおりである。

相続法改正の問題……………教授 穂積重遠^{しげとお}(東大)

維新前後の社会意識……………教授 綿貫哲雄(東京高師)

(休憩)

闘争、闘争心及び闘争機関……………長谷川万次郎

講演は、午後四時四十分におわり、五時半より東京帝国大学工学部地下食堂において研究報告会に移った。まず晩さんの食卓をとにしたのち、午後六時半より、戸田貞三理事の司会のもとに、蔵内学士、松本教授らがつぎのようなテーマで報告をおこない、第一回の大会は閉会した。

家族……………蔵内数太

社会学方法論……………教授 松本潤一郎

法政大学文学部講演会が、十一月十四日同校講堂にて開催された。

文化意識と社会制度……………法政大学教授 城戸幡太郎

〃……………小山龍之輔

なお法政大学では、同大学の政治学・経済学・社会学・商業学関係の教授や講師のあいだで、かねてから社会科学関係の機関誌をつくりたいといった意向があったが、このたび大村書店から『法政大学論集』の名称のもとに創刊号が生まれた。

「東京社会学研究会」の第四回例会は、十一月十五日に東京帝大前の「鉢の木」において開かれた。

タルドの未来社会観に就いて……………田辺寿利

「大阪社会学会」の第三回例会は、十一月二十八日午後六時半より、大原社会問題研究所でひらかれた。

高野岩三郎、森戸辰男、十倉精一などのあいだで、社会主義と社会学との関係について意見の交換があり、午後十時半散会した。

関西大学社会科学研究会は、大正十四年（一九二五）十一月三十一日福知山線武田尾温泉橋本楼において、秋季懇談会をひらいた。出席者は、岩崎卯一ほか八名。

大正十四年（一九二五）年度の、日本大学の社会学科の“卒業論文名”は、左記のとおりである。

（日本大学）

婚姻関係の進化……………野尻義一 徳川時代に於ける民族の社会的地位……………近藤恭一郎

家族制度の発成とその進展……………熊岡義一 徳川時代に於ける農村に就て……………西野建夫

江戸時代に於ける経済史的考察……………神納斉 倫理の社会学的考察……………久沢周実

都市集中と農村生活に及す影響……………仙石小石郎 日本労働運動批判……………河原井貞雄

革命期に於ける芸術の社会機能に就て……………白山秀雄 ラッセルの社会思想研究……………鄭担

以下、省略する。

注・日本大学は、“社会学科”をもっていたから、毎年三十名前後の学生が卒論を提出した。

法政大学社会学会は、大正十五年（一九二六）二月二十日同校において左記のテーマで講演会を開催した。

社会史に就て……………巨橋頼三

性的頹廢者の心理的社会的考察……………中村猛郎

東京社会学研究会の例会は、二月二十五日午後六時より東京帝大山上御殿においてひらかれ、円谷弘理事の司会のもとに、二講演あり、十時ごろ散会した。

社会的認識に於ける……………法政大学 教授 城戸幡太郎

説明と理解と批判……………

革命と権威……………東京帝国大学 助教授 今井時郎

つづいて三月二十七日に、第十九回例会がひらかれた。

獨逸最近の社会学傾向……………藏内教太

また四月二十四日に東京帝大山上御殿でひらかれた第二十回例会では、左記のような発表があった。

Des clans aux empires……………何畏

無頼漢の歴史……………折口信夫

日本大学社会学会第四回例会は、十月二十二日同校にてひらかれた。

ロシアの復活と

帝政主義運動の前途……………学生 名越辰雄

日本大学社会学会第六回例会は、五月十九日同校にてひらかれた。

宗教としてのマルクス主義……………円谷弘教授

哲学会講演会は、五月二十三日東京帝大三十二番教室にてひらかれた。

社会学会の混沌……………今井時郎助教授

法政大学社会学会は、六月十二日同校においてひらかれ、左記のような講演がおこなわれた。

我国中世に於ける土地問題に就いて……………巨橋頼三

大谷大学社会学会は、六月十七日例会をひらき、左記のような二講演がおこなわれた。

社会思想より見たる自由主義……………藤木義考

国家主義・社会主義……………藤木義考

唯物史観に於ける社会概念……………海老原臇磨

東京社会学研究会は、六月十七日（木）午後六時半より、東京帝大山上御殿において開かれ、つぎのような講演がおこなわれた。

社会学的研究とは何ぞや……………文学博士 遠藤隆吉

法政大学の社会学会の例会は、七月三日同大学においてひらかれた。

所謂国民道德と社会道德……………城義臣

土曜労働講座は、八月七日東京労働学校において、左記の二講演をひらいた。

男女関係の一考察……………浅野研真

公娼問題と社会政策……………三好豊太郎

日本大学社会学会第七回例会は、十月十六日ひらかれた。

スモール教授を偲ぶ……………円谷弘教授

東京社会学研究会は、十月二十六日第十五回例会を一ツ橋学士会館でひらいた。

封建社会に於ける婚姻……………阿畏

潜龍会の例会が、十月二十八日午後六時から山上御殿においてひらかれ、さいきん海外遊学から帰朝した古坂明詮学士ならびに熊本県社会事業課主事として栄転する三好豊太郎（会員）の歓送会がひらかれた。晩さん会の席上、司会者・今井時郎のあいさつがあり、それにたいして古坂と三好は答辞をのべた。

古坂は、つづいて欧米巡遊ならびにアメリカ社会学会の最近の傾向について、有益なる帰朝談をこころみた。来会者側より、文部省督学官・山内雄太郎と東洋協会大学教授・小林郁は、社会学出身者の前途について希望するところをかたった。

日本大学社会学会は、十一月六日秋季大会を開催した。

芸術社会学……………金杉恒弥講師

日本社会学会第二回大会は、十一月七日大阪市大阪毎日新聞社講堂において開催され、約六百名ほどの会員および一般聴講者が会場につめかけた。

大会第一部として、午後二時より講演会がひらかれ、今井時郎理事の日本社会学会の事業についての紹介説明のあと講演にうつった。

民法に反映したる社会問題……………京大教授

末川博

国体観念と社会……………経済学博士

永井亨

文明の西遷北徙……………東大助教授

今井時郎

第一部は、午後六時に閉会した。ついで六時半より講師歓迎晩さん会が、大阪市庁地下食堂において催され、約六十名ほどが参加した。このあと午後七時半より、毎日新聞社講堂において大会第二部としての研究報告会にうつった。

夫婦結合分解の傾向……………東大助教授 戸田貞三

日本家族制度の特質……………広島高師教授 新見吉次

かくて日本社会学会第二回大会は、午後十時半閉会した。

東京社会学会第二十四回例会は、十一月二十九日山上御殿においてひらかれ、左記のような研究発表がおこなわれた。

ブルタニユの婚姻風俗……………秋葉隆

アイヌの詩歌……………金田一京助

東京社会学会第十六回例会は、十二月本郷の仏教青年会館において開かれた。

葬式に就いて……………柳田国男

つぎに大正十四年（一九二五）の、慶應と早稲田の“社会学”の卒業論文の題目についてのべておこう。

（慶応義塾大学）

社会学の方法論的基礎に就いて……………衣斐久雄

徳川時代に於ける江戸侠客の……………大浜^{不明}□雄

社会的意義……………大浜^{不明}□雄

倫理上の婦人問題……………佐藤麟太郎

（早稲田大学）

ギディングスの社会学に関する……………星田普五

二、三の考察……………星田普五

農村社会層の人口状態調査……………松尾茂樹

與論の生成に就て……………安武誠一
風習の心理的解釈……………大淵千^{不明}□

「日本社会学会」の春季小会は、四月二十八日午後五時半より、一ツ橋学士会館において開催され、東大の今井助教授の司会のもとに、まず晩さんがはじまり、ついで講演に移った。題目と発表者は、

親子関係に就いて……………戸田助教授

貨幣に就いて……………土方教授

であった。そのご質疑に入り、夜十時半ごろ閉会した。

「東京社会学会」の例会は、五月二日一ツ橋学士会館にて開催された。題目と発表者は、

社会持続に就いて……………岡村精一

梁啓超

先秦時代の政治思想史に就て……………松永栄

慶応義塾大学の「三田社会学会」は、五月十五日春季大講演会を同大学のホールで開催した。講演者名はわかるが、題目がはっきりしない。後藤新平子爵、石川半山、伊藤正徳につづいて、若宮卯之助が「日本人の弱点」について講演した。

また当時の大学は、社会学に関して、どのような試験問題を出したのか興味あるところであるが、日本大学は左記のような問題を出題した。

一 社会意識拘束の法則を述べよ。

二 都市^{および}及都市計画の社会学的意義を論ぜよ（社会政策・長井講師）

一 社会革命と社会政策とを比較せよ。

二 社会主義と社会政策とを比較せよ（日本経済史・銅直講師）。

一 上古の我国経済に及ぼせる大陸の影響。

二 上古に於ける市の状態を概説せよ。

東京社会学会は、大正十五年（一九二六）二月二十五日午後六時より、東京帝大山上御殿において開かれ、左記のような二講演があり、夜

十時ごろ散会した。

社会学的認識に於ける説明と

理解と批判……………法政大学教授 城戸幡太郎

革命と権威……………東京帝大助教授 今井時郎

大阪社会学研究会第四回例会は、二月二十七日大原社会問題研究所会議室においてひらかれた。

我国に於ける国家観念の変遷……………森戸辰男

東京社会学研究会第十八回例会は、二月二十七日東大第二学生控室においてひらかれ、左記のような発表をおこなわれた。

我国上代の労働組織……………喜多野精一

東京社会学研究会の例会は、四月二十二日（木）午後六時より、東京帝大山上御殿においてひらかれ、左記のような二講演があった。

マルキシズムに於ける社会の構成と

其変革觀に就て……………東京帝大講師 藤田喜作

民族学の現状……………柳田国男

「日本社会学会」第二回大会は、大正十五年（一九二六）十一月七日午後二時より、大阪市大阪毎日新聞社講堂において開催された。参加者は、会員および一般聴講者をふくめて約六百名にもおよんだ。この日、今井時郎、永井亨は東京から、戸田貞三、末川博、新見吉次らは京都より来阪した。

講演題目については不明だが、今井理事が「日本社会学会」の目的・組織・歴史・事業について語ったのち、末川博・永井亨・今井時郎の順で講演がおこなわれ、午後六時に閉会した。

午後六時半より、講師歓迎の晩さん会が大阪市庁地下食堂において催され、約六十名ほどが列席した。午後七時半より大会第二部の左記のような研究報告会にうつり、午後十時閉会し、この日の大会は終了した。

夫婦結合分解の傾向……………東京帝国大学 戸田貞三
助教授

日本家族制度の特質……………広島高等師範 親見吉次
学校教授

大正十五年度の東京帝国大学社会学科の“卒業論文”は四十七件あり、参考までにそのうちから十件ひろうと、左記のようになる。

政党の成立及発展に就て……………	原田恭之助
本邦労働争議の研究……………	山本祐吉
社会過程……………	畚野信蔵
我が国上中古に於ける……………	本間末雄
婚姻制度の研究……………	井森陸平
形式社会学の確立及発展……………	大内定
天才の研究……………	進豊紀
我が国離婚に就いて……………	重木善吉
犯罪の研究……………	増谷達之輔
社会学の対象としての社会事業……………	野田虎雄
権力の社会学的考察……………	

大正十五年度の日本大学社会学科の“卒業論文”は三十六件あり、参考までにそのうちから十件ひろうと、左記のようになる。

社会学上より見たる貧民……………	岡本義雄
及貧民児童の考察……………	河井藤一
社会人の教育……………	沢井一郎
日本女性発達の社会学的考察……………	朴商烈
社会文化と農村問題……………	姜在源
朝鮮に於ける特殊部落の研究……………	武市猛雄
農民一揆と其原因……………	青木俊吉
青少年国研究……………	望月唯一
国家社会主義者として見た……………	佐藤信淵
佐藤信淵……………	柳瀬留治
性欲抑制の害悪とその解決……………	

注

- (1) 『日本文化史大系 第十二巻 明治・大正文化』（誠文堂新光社、昭和十七年十月）、一九六頁。
- (2) 「雷光石火 大逆事件を裁く人」（『太陽』第三十巻第十二号所収、大正13・11）。
- (3) 『堺利彦全集 第五巻』（中央公論社、昭和八年九月）、三三八頁。
- (4) 『新聞集成 大正編年史 十二年 下巻』（明治・大正・昭和新聞研究会、昭和六十年八月）、三九三頁。
- (5) 建部遯吾「明治晩期の社会」（『太陽』第十八巻十六号所収、大正元・12）、一〇八頁。
- (6) 『説 日本文化史大系 12—大正 昭和時代』（小学館、昭和三十二年九月）、一七八頁。
- (7) 同右。
- (8) 『明治大正史 [1] 言論篇』（朝日新聞社、昭和五年十月）、一一五頁。
- (9) 堺利彦『恐怖・闘争・歓喜』（聚英閣、昭和九年四月）、四〇頁。
- (10) 口先だけの社会学、ペンの先だけの社会学とは異なり、書齋より街頭に出て、われわれのかけがえない環境を守るために、身を挺して実戦活動をしているのは、法政大学社会学部の舩橋晴俊教授である。同氏の一連の論文は地味なものではあるが、どれも命のかよったものである。地の産物である。
- (11) 高田保馬「日本に於ける社会学の発達」（『岩波 講座 教育科学第十八冊』岩波書店、昭和八年三月）、一一六頁。
- (12) 『東京大学文学部社会科学科沿革七十五年概観』（『非売品』東京大学文学部社会学研究室、昭和二十九年八月）、一一九頁。このほか「東京大学文学部社会科学科沿革七十五年史記要」（東京大学文学部社会学研究室開室五十周年記念会編、昭和二十八年十二月）を参照。
- (13) 同右。
- (14) 「第八篇 日本社会学」（『社会学辞典』河出書房、昭和十九年八月）、七六七頁。
- (15) 同右。
- (16) 注（11）の九七頁。



米田庄太郎

(17) 注 (11) の九七頁。

(18) 教養講座『社会学』（有斐閣、昭和二十八年四月）、二七八頁。

(19) 米田は特殊部落の出身者であったゆえに、不遇の一生を送ったが、学問的には傑出していた。

米田庄太郎（一八七三～一九四五）が生まれたのは、水平運動の発祥地である奈良県である。奈良県添上郡（同県北端部）辰市町杏において農業をいとなむ八十平の長男として、明治六年（一八七三）二月一日に生まれた。

同十一年村立辰市小学校に入学し、同十九年（一八八六）四月県立郡山尋常中学校に進学したが、翌明治二十年私立奈良英語学校に転校した。なぜかが県立中学校から私立の英語学校にかわらねばならなかったのか、その理由は明らかでない。ひょっとして、部落出身者であることから、蔑視やいじめがあったかもしれない。

明治二十四年（一八九一）六月、米田は同校を卒業した。かれはこの英語学校の生徒であったとき、アイ・ゾーマン（米人）の助手となり、比較宗教学の編さんに協力した。

明治二十八年（一八九五）九月——アメリカに留学し、ニューヨークにある米国監督派の神学校に入り、またコロンビア大学において社会学を兼習した。明治三十一年（一八九八）五月、神学校を卒業し、のちコロンビア大学の大学院で、ギッディングズ教授の社会学を主科とし、クラーク教授およびセリグマン教授の経済学、ルセル学長の比較憲法学、メヨ・スミス教授の統計学、ボアス教授の人類学などをまなんだ。これらの教授は、一流の学者たちであった。

明治三十三年（一九〇五）二月、フランスに渡り、コレージュ・ド・フランスにおいてタルド教授から社会学を、ルヴァサル教授について統計学を、レルア・ボーソア教授からは経済学を、フンクブレンター教授からは比較法学をまなんだ。

明治三十四年（一九〇六）京都同志社から招かれ、同年十二月帰国し、翌年一月より高等科の教授に就任。そのご高等科が「同志社専門学校」と改称されてからは、経済学科の教授として、社会学・社会政策・経済学・統計学を担当した。

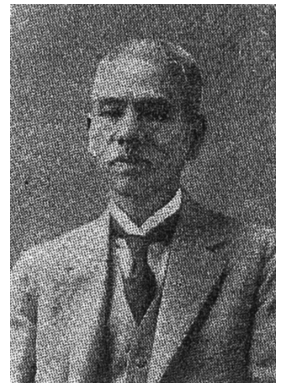
京都帝国大学文科大学に社会学講座がひらかれたのは、明治四十年（一九〇七）五月のことであるが、米田は同年九月より「講師」として、その講座を担当し、そのご法科大学にも出講し社会学を講じた。

米田は大正九年（一九二〇）五月、京都帝国大学の専任講師となり、同年九月教授に就任した。（木村京太郎「部落の生んだ、奈良県の誇り 米田庄太郎博士を偲ぶ」『月刊部落』第四十五号所収、昭和28・8）。

米田の教授就任にさいしては、文学部教授会で反対が多かったという。「人間のたたかい」（『部落間



浜田耕作



桑原隲藏

題』第十四号所収、昭和25・4）を執筆した桑原武夫（一九〇四〜八八、フランス文学者、評論家）は、「同博士の学問は必ずしも一流ではなかった。粗末なところもあった」と、あまり高く評価していない。なるほど米田が書いたものは、すべて好評噴噴（きくきく）というわけではなかったが、中にはよいものもあったはずである。

米田の教授就任反対の理由が、学問的なものであればしかたないとしても、反対論の有力なものは、部落の出身だということであった。当時、武夫は父（桑原隲藏（じつぞう）「一八七〇〜一九三一」、東洋史学者、京大教授）からその間の事情をきいていった。

H教授のごときは、

——米田を教授にするというが、じぶんは教授会で××などと席をならべることは真平ごめんだ。

といった。結局、米田を教授にするが、発令と同時に辞表を出してもらい、一年後には必ずやめさせるといった条件つきであった。

このH教授とは、だれであったのか。同人はある藩の家老の家の出であり、それを誇りにするような古いタイプの人間であったらしい。当時、Hのインシヤルをもつものといえば、浜田耕作（一八八一〜一九三八、青陵（せいりやう）は号、明治から昭和期の考古学者）であろうか。

「××などと席をならべること」の××とは、「部落民」のことか。おそらく、Hなる教授は、部落民といった侮辱的な呼称を露骨に使ったものであろう。

当時、H教授の暴漫をゆるした教授会（そのころは一流の学者のあつまり）にも問題がある。保身（ほし）をかんがえ、だれひとり捨て身（すてみ）になって米田擁護（ようご）のために立ちあがろうとするものはいなかった。だれもが官僚学者としてのじぶんの立場（たちば）や地位（ちゐ）のことを気づかい、米田を守ろうとはしなかった。

米田としても、教授になると恩給（おんぎく）が増加するので、あえて屈辱的な条件を甘受したのであろうか。また決然たる態度をとったとしたら、出自（しゅつ）がはっきり世間に知られるおそれがあった。

米田の令息は、桑原武夫と小学校から中学まで同級であったという。米田のむすこは、勉強もよくできる美少年であった。桑原は少年のころ、部落



若宮の留学資金をだした矢後孫人。『富山大百科辞典 下巻』北日本新聞社、1994・8]より。

から通ってくるトラホームの子供をいじめていたが、米田少年は、けっしてそれを止めようとはせず、傍観していた。

ともあれ、米田庄太郎は、日曜日になると、釣竿をもってビワ湖に出かけた。その表情はさみしく、あきらめ顔であったと、桑原は回想している。

(20) 注(11)の三〇頁。

(21) 「第六章 日本社会学の発展」(教養講座『社会学』所収、有斐閣、昭和二十八年四月)、二八七頁。

(22) 松本潤一郎『日本社会学』(時潮社、昭和十二年十月)、三九頁。

(23) 注(21)の二七九頁。

(24) 注(14)におなじ。

(25) 河合弘道『日本社会学原理』(昭森社、昭和十八年一月)、一四八頁。

(26) 若宮の経歴については、すでにふれたことがあるが、かれは富山県砺波郡埴生村(現・小矢部市)で生まれた。明治十六年(一八八三)四月十六日——生家は埴生村(戸数百二十)の大火のとき焼失したため、小学校を三年で退学し、その後は石動・城端などの寺で雲水生活した。向学の念を断ちがたく、上京すると、苦学しながら哲学館(現・東洋大学)や神教神学校でまなんだが、いずれも中退した。明治二十四年(一八九一)、砺波郡戸出村横越(現・高岡市)の封建家・矢後孫人(一八七四―一九一八、西砺波郡醍醐村の村長・矢後孫二の長男)の後援をえて渡米し、アメリカの大学や図書館で勉学にはげんだ。ことにワシントン図書館に三年間休まず通った話は有名である(笹原千恵子筆の小伝を参照)。(『富山大百科辞典 下巻』所収、平成六年八月刊)。

若宮の米国留学に財政的支援をした矢後家は、高岡市において「越中製乳」を設立し、富山県においてはじめて乳加工を企業化した資産家であった。父の村長・矢後孫二とともに孫人は、郡会議員、県会議員を二期つとめ、政財界で活躍した。

私事にわたるが、この稿の筆者・宮永孝の生家は、矢後家と縁戚関係にある。わが祖父・龍太郎(一八七八―一九五〇)の妻・美津江は、この矢後家の出である。亡父・友義も義侠心にあつたところがあつたが、やはり血のつながりであろうか。わが家は、故あって祖父・龍太郎の代で家産のすべてをうしない零落した。

また富山県出身の衆議院議員・土倉宗明(一八八九―一九七二、当選六回)は、立憲政友会総務、民主自由党総務、自由党総務などをつとめたが、その妻も矢後家の出である。のちに土倉の選挙地盤をうけついだのは、昭和の政治家・松村謙三(一八八三―一九七二)や正力松太郎(一八八五―一九六九)である。

(27) 京都帝国大学教授・柳沢政太郎「大学教授論」(『太陽』第十九卷第十号所収)。

(28) 下出集吉「東大社会学研究室創立滿二十五周年を迎へて」(『社会学雑誌』第四十七号所収)。

(29) 「東京帝国大学文学部学生生徒数学科別け表」(『日本社会科学院年報』所収、第八年、第一、二合冊)所収)。

(30) 社会学者としての藤田喜作(一八八六―一九七三)のことを知るひとは、いまやほとんどいないであろう。藤田は瀬戸内海の「生口島」の生まれである。十三歳のとき、放浪の旅にで、十五歳でたまたま『福翁自伝』をよみ、学問に志をむけた。苦学して長崎県の鎮西学院中学を卒業すると、岡山の旧制第六高等学校に進み、ついで大正四年(一九一五)七月、「労働問題の研究」(卒論)をかいて東京帝国大学文学部社会科学科を卒業し、ひきつづき同大学経済学科に進んだ。大学を出てから、しばらく満州の銀行につとめたが、恩師・建部遯吾のすすめにより講師として母校にもどった。

のち文部省の給費生としてドイツ、イギリスに留学した。ドイツでは第一次大戦後のベルリンの混乱をつぶさに観察し、またイギリスではロンドンの労働大学で研修した。帰国後の藤田は、東大社会科学科の講師をつとめるかたわら、明治・法政・東京女子大学などで教鞭をとった。

東大では、社会問題大意・社会学演習(外書を用いる)などを担当した。のち藤田は大学で教鞭をとることをやめると、区会議員となり、衆議員議員にも立候補したことがあった。なぜ教職をはなれたのか、その理由は知るよしもない。

昭和十年(一九三五)――藤田は同六年(一九三一)創立の財団法人・自由ヶ丘学園中学(東京市目黒区自由ヶ丘一三八番地)の経営を引きついだが、このとき中学校設立当初からの協力者白上佑吉(文部省学務局長・東京市助役)の推挙があったものらしい。昭和五・六年といえは、いちばん不況なときであり、何よりも生徒の確保が急務であった。そのため藤田は、校地内に私塾「明訓塾」をもうけ、知人の子弟や朝鮮・台湾・タイ国などの転入留学生にも門戸をひらいた。

質実剛健の「雑草教育」を教育目標として発足した、この私塾的な学校は、戦前・戦後の苦しい時代をどうにか生きぬき、今日にいたっているが、昭和二十三年(一九四八)、教育制度改革により、校名を「自由ヶ丘学園中学校高等学校」と改称した。中学校は、昭和三十四年(一九五九)休校となった。

わたしは昭和三十年代後半に、縁あってこの学校にまなんだ。

当時、このオンボロ学校にはもったいないような先生がいっぱいいたが、学ばねばならぬわれわれ生徒の大半は勉強ざらいであり、学ぶところがなく、素行が修まらないものが多かった。年々歳々、不勉強な生徒が入ってきた。途中で廃学するものもいたが、なんとか卒業し、社会に出てゆくもの、さらに上級学校に進むものもいた。哲学者・三木清(一九九七―一九四五)の弟(繁)がいることをだれもが知っていた。さすがに血をわけた兄弟だけあって、顔付は兄の清とうり二つであった。東大前の街路を歩いていると、兄の清とまちがわれ、未知らぬ大学生からよくあいさつされたという。三木繁は、旧制の姫路高校から東京帝大の哲学科にまなんだ人である。英語と政治経済のような科目をおしえていた。タバコも酒もたしなんだ。

弟の繁は兄の清が、友人の共産主義者を自宅にかくまい、金をあたえたことから、再度治安維持法違反で検挙されたとき、借家でいっしょにくらし



晩年の藤田校長

ていた。特高にふみ込まれた朝、弟の繁は玄関ちかくの部屋で寝ていた。顔が似ているため、刑事は弟のほうを清とおもったらしく、すぐ着がえるように命じた。すると、奥のほうから、「ここにもう一人いるぞ!」という声がした。兄の清がみつかったのである。この話をわたしは、三木繁からじかに聞いたのでここに記しておく。

三木清は、京大哲学科が生んだ稀代の秀才であった。なぜその弟が、しがない私立中学・高校の教師をやることになったのか、その理由はわからぬが、兄のせいでもともな職につけない時代であったのかも知れない。

じつは藤田は、渡欧の船がたまたまドイツに留学する三木の船とおなじであった。だからのちに三木は藤田に弟・繁の就職を依頼したとも考えられる。昭和初期、上智大学で月一回研究会があると、三木はかならず出席し、いつもドイツ語で司会していた。藤田などもときたまこの会合に顔をだすと、三木は当時東大講師の藤田に「特別に懇懇な態度」をとっていたという。

学園を停年でやめた三木繁は、本をよむ時間がふえ、深夜まで読書をつづけた。また私立大学の非常勤講師としてドイツ語をおしえた。……

ずっとわたしのクラス担任であった国漢の字井義三郎は、漢学の力はへたな大学の先生より、わたしのほうが上である、というのが傲慢であり、教科書などほとんどみないで講義していた。毛筆の字は、じつにみごとであり、能楽の先生でもあった。授業中、ときどき英語やドイツ語の単語が飛び出ることがあったが、「英語のこの語は、宮永ならわかるはずだ」とよくいった。奥方は旗本の子孫であり、十五代将軍の慶喜が使った硯^{すずり}をもっていることが傲慢であった。

のちに第三代校長になる林田茂（福岡県田川市の出身）は、旧制中学のとき、街頭で兄（共産黨員）のピラくばりを手伝い、逮捕され、中学を放校となった。が、上京後、自由ヶ丘学園中学のことを知り、その門をたたき、入学を許可された。五年間在籍し、成績はつねに一番であり、苦学をつづけ大学を出たのち、母校の教員となった。反骨のひとであり、高二が高三のとき、五十分かけて「下山事件」のことを熱っぽく語ったことを、いままざまさと思いだす。

その他、語るべき教師は多いが、このくらいにしておく。

藤田喜作は、どちらかといえば短軀^{たんく}であった。身長は百五十数センチほどであったろうか。血色、肉づきのよい教師であり、もそもそういう人であったが、その発言はいずれも含蓄があった。毎年、春になると九州のほうに旅行に出かけたようである。よく茶色の大きなショルダーバックを肩にかけ、学校の周辺を散歩しているすがたをよくみかけた。

藤田校長の学校は、万人に門戸を開放した学舎であり、入学試験はあっても成績ので

き、ふできにかかわらず、なるべし入学させる方針であったようである。

——本校には、学校秀才はひとりも来ない。本学の教育モットーは雑草教育である。受験の亡者^{もつや}はつぐらな。社会に出て、社会をささえるような人間を育てるのが、この学校の主旨である。社会を支えているのは、ソバ屋や洗たく屋の小僧、郵便配達人、農夫、漁民である。大臣がひとり亡くなくても、そのなり手はいくらでもいる。が、手をよこし、額にあせしてはたらき、われわれの生活を支えてくれる仕事に従事する者はすくない。

入学式（小さな木造の武道館でひらかれた）のとき、このような藤田のことを聴いた父兄のなかには、感動のあまり、涙をながすものもいた。つぎにおもいだすまゝに、藤田語録をつづっておこう。

○むかしはすべての教科を英語でおそわった。

○天下の秀才を放っておくのか、とおもい、篤志家のところに援助をもとめに行った。

これは六高に入学したとき、大原孫三郎（一八八〇—一九四三、大正・昭和期の実業家、大原社会問題研究所を設立）のところに学費の申し込みに行ったことを指す。このとき大原は、一番になるなら資金をだしてやろう、といった。藤田は一学年の第一学期で、そのことばどおり首席となり、以来ずっと奨学資金をうけた『蔵内数太著作集 第五巻』関西学院大学生生活協同組合出版社、昭和五十九年三月、五〇八頁）。

○どんなに早く走っても、自動車にはかなわない。どんなに早く泳いでも魚にはかなわない。どんなに重いものもちあげても、起重機にはかなわない（爆笑）。

○西洋では、霊柩車がとると、知らない人までも、帽子をとり、死者を見送る。

○好きな女性は、高峰秀子^{ひたけ}（一九二四—）、昭和期の映画女優、「二十四の瞳」「浮雲」「喜びも悲しみも幾歳月」などに出演）である。

○英語にmob^{モブ}（乱衆）ということばがある。

○A rolling stone gathers no moss（ころころがる石はけが生えない）

藤田が継承したこの学校は、むかしもいまもけっして社会的評価の高いものではない。毎年、大勢の卒業生を有名大学に送りこむような実績をあげていないのは、『雑草教育』を実践しているからである。しかし、実社会で、はじめにはたらく、実直な人間をいまも着実に送りだしているようだ。

しかし、ときどき雑草のなかに可憐な花が一、二本咲くことがあるから、この学校は、まんざら捨てたものではない。かつては地方の高等学校に入

り、帝大に進んだものもいたし、戦後はすぐとなり街にある都立大学（府立高等学校の後身）に入学するものもいた。わたしが在籍していた昭和三十年代——有名校に入るものは少なからずいたようにおもふ。が、学校は、どこそこの大学に何名入学した、といった風に、麗しい発表はいっさいしなかったから、じっさいの数はわからない。それがこの学校のいいところであり、かつ特徴でもあった。また、われわれ生徒は、校長がむかし東大で教鞭をとっていたことを知ってはいたが、何を教えていたかまでわかっていなかった。わたしは、日本社会学史を調べるにつれて、藤田校長の未知なる部分を垣間みたにすぎない。ああ、この校長について書こうとは夢にもおもわなかった。……

(31) 『日本社会学院年報』第十年 第三、四、五合冊、六〇五頁。

(32) 同右、六〇三頁。

(33) 『京都帝国大学文学部三十年史』（京都帝国大学文学部、昭和十年十一月）、一四七頁。

(34) 大庭柯公（一八七二〜？、明治・大正期のジャーナリスト）は、幼なくして父をうしない、東京四谷小学校を出ると、太政官の給仕となり、夜は夜学に通い英語をまなんだ。明治二十四年（一八九一）ごろより、古川常一郎についてロシア語を学んだ。日露戦争のとき、参謀本部付通訳官として従軍。のち各紙の海外特派員となったが、ロシア革命後モスクワに入ったといった報告をしたのち、消息をたった。……